八尾市文化財調査報告66
平成22年度国庫補助事業

高安古墳群　調査報告書

－平成22年度　出土遺物整理調査－

2011年3月

八尾市教育委員会

高安古墳群　服部川支群　西舞台出土金銅装大刀

は じ め に

八尾市の東部に位置する高安山のふもと「やまんねき」は、豊かな歴史遺産が残された地域です。なかでも、「高安千塚」とも呼ばれる高安古墳群の集中地域には、六世紀代に造られた二百基以上もの横穴式石室を持つ古墳が残されており、わが国の古代国家の形成を考える上でも、大変貴重な遺跡です。

本市では、全国的にも有数な群集墳である高安古墳群を、やまんねきの里山や自然とともに、次世代に残していくために、国指定史跡を視野に入れた保存・調査事業を文化庁国庫補助事業として、平成16年度から開始し、平成20年度までに詳細分布調査と、古墳群内の重要な古墳の測量調査、服部川支群の地形測量調査、出土遺物の整理事業を行ってきました。

今年度は、高安古墳群の総括報告書に向けたこれまでの調査成果の整理と、高安古墳群に関する貴重な遺物の整理作業を行いました。本書は、これらの成果をとりまとめたものです。

これらの成果をもとに、今後は古墳群の重要性を市民の方々をはじめとして、多くの人々にご理解をいただき、地域の貴重な歴史資産のひとつとして、「高安千塚」の保存・活用していくことが文化財行政の重要な課題となります。本書が、その役割の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に際し、ご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

八尾市教育委員会
教育長　中原敏博

例　言

１．本書は、平成22年度の国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）として実施した、大阪府八尾市に所在する高安古墳群から出土した遺物の調査報告書である。

２．調査は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課が実施した。

３．今年度の調査は、八尾市立歴史民俗資料館保管資料及び大阪城天守閣所蔵の高安古墳群関連資料を中心に行った。歴史民俗資料館保管資料のうち、大阪城天守閣が寄託している資料については、所有者のご協力のもと、調査を行った。

４．調査を進めるにあたっては、「高安古墳群と山麓の古墳保存調査計画検討会議」の白石太一郎氏、一瀬和夫氏、高橋照彦氏、花田勝広氏、安村俊史氏、若松博恵氏、森屋直樹氏、岡田 賢氏のご指導、ご助言をいただいた。

　今年度の調査にあたり、下記の関係機関及び多くの方々からご指導・ご協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。(順不同)

　大阪城天守閣　大阪府教育委員会　泉福寺　(財)大阪文化財研究所　(財)八尾市文化財調査研究会　伊藤幸司　尾崎良史　小谷利明　高萩千秋　原田昌則　松尾信裕　松江信一　山中良平　山本光昭

５．本書の作成にあたっては、八尾市教育委員会　藤井淳弘、吉田野乃、(財)八尾市文化財調査研究会　歴史民俗資料館係　樋口めぐみが執筆を行った。Ⅱ－３，４，７ Ⅳ－２，３については、担当者との協議のもと、真鍋貴匡（龍谷大学大学院卒)、志田真吾（龍谷大学大学院生）が執筆を行った。それぞれの分担は目次に記している。

６．本書の編集は、八尾市教育委員会生涯学習部文化財課　藤井が行った。

本　文　目　次

はじめに
例言

Ⅰ．平成22年度　高安古墳群出土遺物整理調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・ 1

１．整理調査の概要　（藤井） 1

Ⅱ．大阪城天守閣所蔵　高安古墳群出土資料等の調査・・・・・・・・・・・・・・ 3

１．調査経緯　（吉田） 3
２．高安古墳群関連資料（八尾市立歴史民俗資料館寄託分）の調査　（樋口） 4
３．高安古墳群関連資料　須恵器高坏形器台について　（真鍋） 13
４．出土地不詳　須恵器子持器台について　（真鍋） 18
５．まとめ　（吉田） 22
６．考察１　装飾付須恵器副葬の特徴からみた「高安千塚」の造墓集団の性格について（吉田） 25
７．考察２　河内四大群集墳とその周辺出土の須恵器高坏形器台の変遷について　（真鍋） 29

Ⅲ．森田山古墳出土須恵器について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

１．森田山古墳について　（樋口） 33
２．出土須恵器の報告　（樋口） 33

Ⅳ．服部川支群　西舞台出土金銅装大刀について・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

１．金銅装大刀・耳環の調査経緯　（藤井） 36
２．金銅装圭頭大刀について　（志田） 36
３．耳環について　（志田） 42
４．金銅装圭頭大刀・耳環の出土古墳の検討　（藤井） 43
５．まとめ　－高安古墳群における金銅装圭頭大刀出土の意義－　（藤井） 50

図　版　等　目　次

図１　高安千塚（高安古墳群集中地域）分布図
図２　長者の箸塚古墳(大窪・山畑59号墳)推定位置図
図３　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）①　長者の箸塚古墳出土装飾付須恵器（S=1/4）
図４　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）②（S=1/4）
図５　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）③（S=1/4）
図６　高坏形器台　各部名称図
図７　高坏形器台１ スカシ展開図
図８　高坏形器台１（S=1/4）
図９　高坏形器台２ スカシ展開図
図10　高坏形器台２（S=1/4）
図11　子持器台　各部各称図
図12　出土地不詳　須恵器子持器台（S=1/4）
図13　俯瞰模式図
図14　スカシ展開図
図15　同一ヘラ記号をもつ子持器台
図16　河内の四大群集墳の位置
図17　装飾付須恵器の変遷
図18　器台の変遷図　１
図19　器台の変遷図　２
図20　器台の変遷案
図21　森田山古墳位置推定図
図22　森田山古墳出土須恵器実測図（S=1/4）
図23　圭頭大刀実測図１（S=1/4）
図24　圭頭大刀実測図２（S=1/2）
図25　耳環実測図（S=1/2）
図26　須恵器・坏蓋
図27　森田山古墳の推定範囲
図28　服部川56号墳(左)と服部川48号墳(右)の石室
図29　高安古墳群出現期の横穴式石室
図30　河内の初期横穴式石室（上）と竪穴系横口式石室（下）
図31　高安古墳群周辺地域出土の装飾付大刀

写真１　中河内郡誌に掲載されている高安古墳群出土資料の写真
写真２　長者の箸塚古墳が破壊されている様子
写真３　森田山古墳検出状況(南から)
写真４　鐙（左：報告Ⅲ－６・右：報告Ⅲ－４）底面
写真５　森田山古墳とその周辺

資料１　大刀類とともに寄贈された「大刀出土」を伝える新聞記事

Ⅰ．平成22年度　高安古墳群出土遺物整理調査の概要

１．整理調査の概要

これまでの調査　八尾市教育委員会では、平成16年度から国庫補助事業の一環として、高安古墳群の基礎的な調査として、平成19年度まで高安古墳群の集中地域となる「服部川地区，大窪・山畑南地区，郡川地区」の詳細分布調査と重要古墳として位置づけられる「開山塚古墳，郡川4号墳，二室塚古墳，大窪・山畑6～8号墳」の石室及び墳丘の測量調査を行った。また、平成19年度には花田勝広氏による高安古墳群の128基もの石室実測の成果を掲載した『高安古墳群の基礎的研究』（八尾市文化財紀要13）を刊行した。そして、平成20・21年度は支群中最も古墳が集中する服部川支群（服部川地区）の測量調査を行い、古墳群の基礎データの蓄積に努めた。

高安古墳群の性格解明は、古墳の分布、石室の内容だけでなく、発掘調査事例が少ないため、過去の出土遺物から明らかにする必要がある。平成20年度・21年度（八尾市教育委員会編2009・2010）は、大阪府教育委員会による昭和41年の高安古墳群の分布・実測調査において出土した遺物や八尾市立歴史民俗資料館に所蔵している高安古墳群関連資料等についての整理と調査を行った。郡川16号墳のミニチュア炊飯具や鉄製品を始めとして、高安古墳群の出土遺物の内容解明に向けて、貴重な成果を得ることができた。

平成22年度の事業　平成22年度の事業は、平成23年度刊行予定の高安古墳群の総括報告書に向けて、高安古墳群に関する出土遺物の整理・調査をさらに継続して行うことにした。

高安古墳群の数少ない出土遺物の中で大阪城天守閣が所蔵し、平成22年3月20日から5月5日にかけて開催された「テーマ展　地中からの遺産－大阪城天守閣収蔵考古資料展－」で展示された高安古墳群出土の多数の須恵器（大阪城天守閣編2010）は、有名な長者の箸塚古墳（大窪・山畑59号墳）の装飾付器台だけでなく、その他に大型器台があり、また『中河内郡誌』（1923年）に掲載されていた資料を含んでいたことが分かった。これらの資料は、高安古墳群を考える上で貴重な資料といえることから、大阪城天守閣のご協力により、八尾市立歴史民俗資料館に寄託されていた大阪城天守閣所蔵資料と合わせて、資料調査と実測・写真撮影を行った（**Ⅱ．大阪城天守閣所蔵　高安古墳群出土資料等の調査**）。

また、八尾市立歴史民俗資料館で保管している高安古墳群関連資料も調査を行い、『大阪文化誌』通巻第6号で紹介されていた森田山古墳（服部川134号墳）の須恵器について、資料調査で新たな知見が得られたため、再実測を行った（**Ⅲ．森田山古墳出土須恵器について**）。

そして、八尾市立歴史民俗資料館に平成2年度に寄贈、保管されていた高安古墳群の服部川支群　西舞台出土の金銅装大刀1振りと耳環2点については、大刀は柄頭部分がばらばらで、刀身が大きく破損するなど脆弱資料のため、平成22年度に保存処理を行った後、実測及び写真撮影等を行った（**Ⅳ．服部川支群　西舞台出土金銅装大刀について**）。

以上の高安古墳群の出土資料の整理調査の成果を報告するもので、今年度の事業によって、高安古墳群の主要な出土遺物の資料化をほぼ図ることができ、総括報告書に向けての基礎資料が蓄積できた。

［参考文献］

大阪城天守閣編　2010『テーマ展　地中からの遺産－大阪城天守閣収蔵考古資料展－』
原田修・久貝　健・島田和子　1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』通巻第6号・(財)大阪文化財センター
清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第6号・(財)大阪文化財センター
八尾市教育委員会編　2009『高安古墳群　調査報告書　－出土遺物整理調査・服部川支群東側地区測量調査－』
2010『高安古墳群　調査報告書　－出土遺物整理調査・服部川支群西側地区測量調査－』

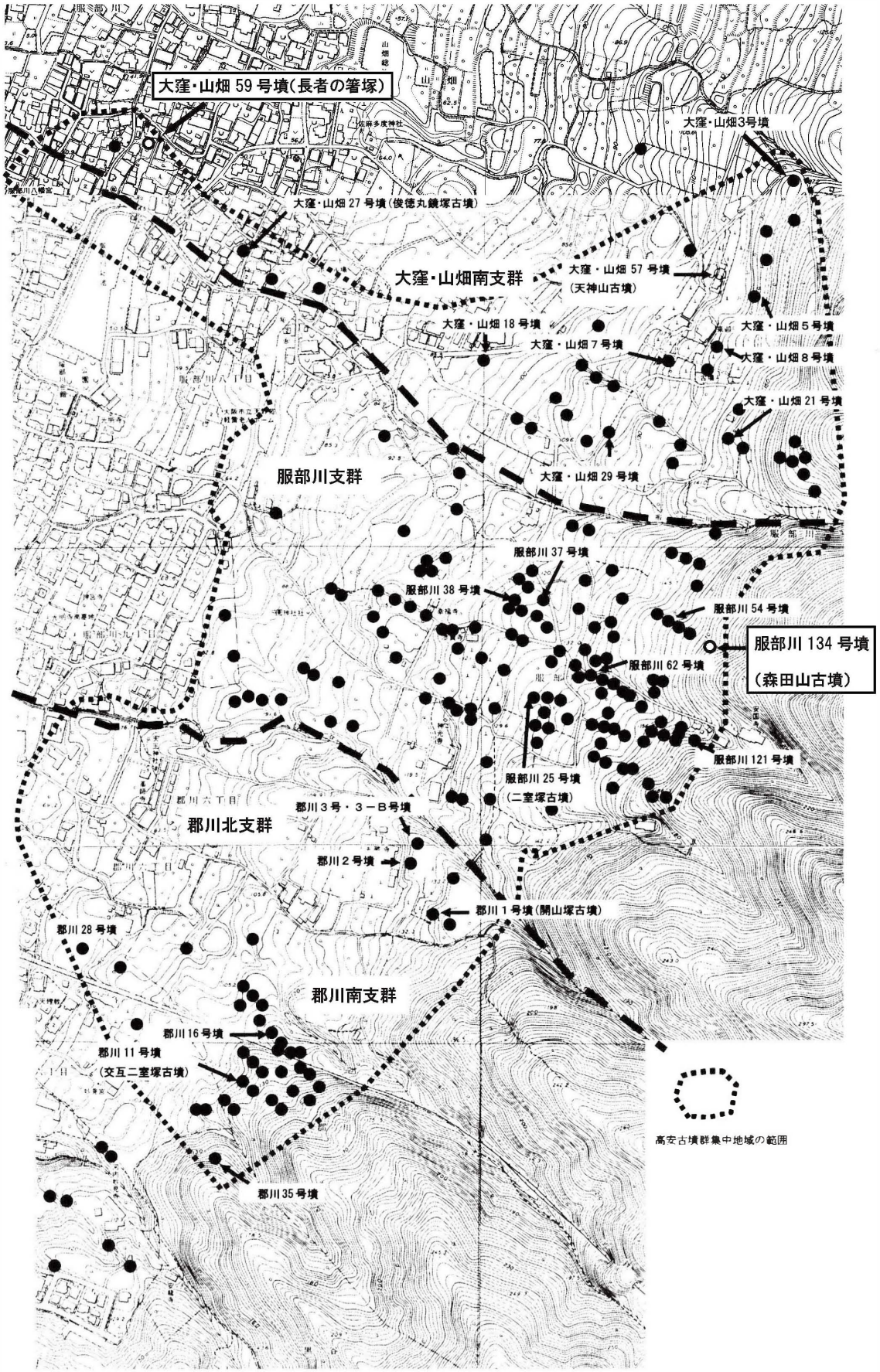


図１　高安千塚（高安古墳群集中地域）分布図（□の古墳が今回関係する古墳）

Ⅱ. 大阪城天守閣所蔵高安古墳群資料等の調査

１．調査経緯

八尾市教育委員会では、平成 16 年度から高安古墳群の保存のための基礎的な調査を継続して行ってきた。平成 20 年度からは、出土遺物の調査として大阪府教育委員会の昭和 41 年調査資料や八尾市立歴史民俗資料館所蔵資料の調査を行ってきた。そして本年度は、大阪城天守閣所蔵の岩本文一氏収集資料等の調査を行うこととした。今回の調査をもって、現在知られている高安古墳群出土の遺物資料は、ほぼ報告されたことになる。

昭和６(1931)年に開館した博物館である大阪城天守閣には、岩本文一氏収集の高安古墳群出土土器 29 点が所蔵されている。また、資料の来歴は不明であるが、須恵器の高坏形器台２点と共に、保管されていた須恵器の子持器台１点がある。平成 22(2010)年には、大阪城天守閣においてテーマ展『地中からの遺産』として同館収蔵の考古資料が体系的に展示・公開され、そのなかで、本資料は高安古墳群の貴重な資料として紹介された(松尾 2010)。

本資料のうち、国重要美術品である長者の箸塚古墳出土の装飾付器台を含む 27 点は、八尾市立歴史民俗資料館に寄託され、展示等で活用されている。このためこれらの資料については、八尾市立歴史民俗資料館において調査を行うこととした。残りの２点の須恵器の高坏形器台は、大阪城天守閣に保管されているため、大阪城天守閣のご協力をいただいて、現地で実測・写真撮影等の調査を行った。また来歴が不明であるが、これらと共に保管されていた子持器台１点についても、高安古墳群出土の可能性がある資料として調査を行った。

岩本文一氏収集資料の由来についてであるが、本資料のうち、八尾市立歴史民俗資料館に寄託されている資料の一部は、Ⅱ－２項に記したように、大正 12(1923)年に刊行された『中河内郡誌』に、「高安出土各種土器(岩本文一氏蔵)」のタイトルでの写真が掲載されている(片岡 1923)。また、『中河内郡誌』には、岩本氏の大正 11 年８月の調査として、高安郡の古墳数が当時の村落ごとに記されており、合計 640 基の古墳が確認されている。注意されるのは、この際の古墳の数え方が、「完全なもの」「破損せるもの」「跡のみ残るもの」といった残存状況別に行われている点である。高安古墳群の古墳が、この時代に先人の残した貴重な歴史遺産としての認識をもって調査され、その記録が『中河内郡誌』に残されていることは注目される。

また、岩本文一氏収集資料の高安古墳群での出土地については、長者の箸塚古墳出土の装飾付器台のみが出土古墳が明らかな資料である。本資料は郷土史家である清原得巌氏の記録が残っており、明治 41 年の出土であることもわかる(清原 1976)。他の資料については、『中河内郡誌』の記載や資料に貼られた紙の記述等から高安村出土であることは明らかであり、高安古墳群のいずれかの古墳からの出土とみられる。

また収集された時期について、長者の箸塚古墳出土の装飾付器台は、明治 41 年の出土である。また、八尾市立歴史民俗資料館寄託分資料には、「岩本文庫」「大正□年」と印刷された古い張り紙が残っているものがあり、岩本文一氏が自らの収蔵品を整理するために付されたものとみられる。このなかには、「大正□年中河内郡高安村出土」と記載された張り紙のある資料もある。さらに、大正 12 年に刊行された『中河内郡誌』に資料の写真が掲載されていること、岩本文一氏の古墳の数の調査が大正 11 年に行われていることを考えあわせると、本資料は、明治の終わり頃から大正 11 年位までに高安村から出土した資料の収集品であり、その内容からみて、高安古墳群の出土品が中心であると考えられる。大阪城天守閣は昭和６年開館しており、当時は大阪府下に公的機関による調査体制が充分ではないなかで、出土した遺物の受け入れ先としての役割を果たしていたとのことである(松尾 2010)。本資料は、そのような状況のもと、昭和６年以降に大阪城天守閣所蔵品となった資料とみられる。

［引用文献］
片岡茨糸編　1923『中河内郡誌』大阪府中河内郡役所
清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター
松尾信裕編　2010『地中からの遺産－大阪城天守閣収蔵考古資料展－』大阪城天守閣

２．高安古墳群関連資料（八尾市立歴史民俗資料館保管分）の調査

１）資料についての経緯

当館では、八尾市内出土の資料で大阪城天守閣所蔵の資料を昭和62年の開館当初から保管している。これらの資料の内訳は、須恵器25点、土師器３点の計28点である。このうち、高安古墳群出土資料が27点、弓削遺跡出土資料が１点である。今回は高安古墳群出土資料とされている27点を報告する。

これらの資料の一部が最初に報告されたのは『中河内郡誌』である（片岡編1923、**写真１**）。『中河内郡誌』では「高安出土各種土器（岩本文一氏蔵）」と報告されており、大正11年に高安の古墳調査をした岩本文一氏が収集した資料であることが分かる。当館が保管している大阪城天守閣資料の一部には「岩本文庫」と記載したラベルが付けられており、『中河内郡誌』で紹介されている資料と一致する資料が多かった。その後、当館が開館するにあたって、高安古墳群出土資料として出土地である八尾市で保管されることとなった。

次にこれらの資料が報告されたのは、大阪城天守閣が2010に行った『地中からの遺産ー大阪城天守閣所蔵考古資料展ー』である（大阪城天守閣2010）。しかし、実測図の報告は、装飾付須恵器（**図３－１**）が行われた（拙稿2009）のみで、他の資料の実測図の報告は今回が初めてとなる。

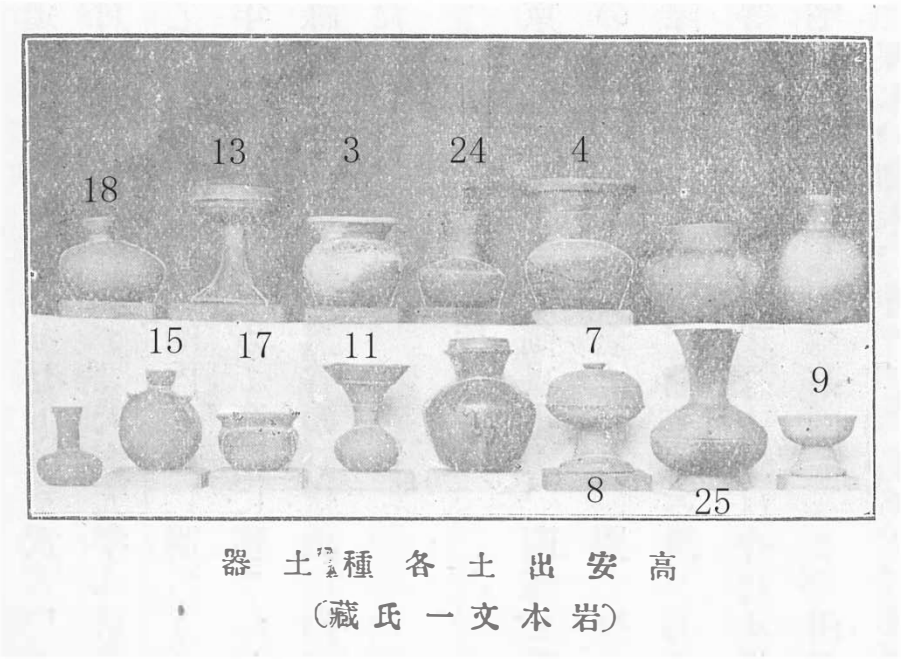


写真１　中河内郡誌に掲載されている高安古墳群出土資料の写真
（図中の番号は図４・図５の実測番号と対応）

２）長者の箸塚古墳（大窪・山畑59号墳）出土の装飾付須恵器について

大阪城天守閣所蔵資料のなかで最も広く知られているのが、長者の箸塚古墳（大窪・山畑59号墳）から出土した装飾付須恵器である（**図３－１**）。

この資料が出土した長者の箸塚古墳は、八尾市山畑に所在した古墳である。明治41（1908）年に盗掘を受け、須恵器大型器台、装飾付器台、大型甕、純銀製耳環、台付壷（？）など多くの資料が横穴式石室から出土した。しかし、古墳の規模や石室の状況はわからないまま、戦後破壊された（清原1976、**写真２**）。出土したと伝えられている資料のうち、現存しているのは装飾付須恵器（器台）である本資料のみで、他の資料の所在は不明である。

写真２　長者の箸塚古墳が破壊されている様子

図２　長者の箸塚古墳（大窪・山畑 59 号墳）推定位置図

１は、高坏形の器台の口縁端部に小像と小型壷が交互に配置されている「配像高坏形器台」である。法量は、受部径33.8㎝、裾部径27.0㎝、最大高60.8㎝を測る。口縁端部に付いている装飾の順番は、正面から右に向かって鳥形小像、短頸壷、人物小像（美豆良髪を結った男子）、短頸壷、鞍を付けた馬形小像、短頸壷、欠損、短頸壷、鳥（？）形小像、短頸壷、欠損、短頸壷である。子器である短頸壷は全て残存しているが、小像は２カ所欠損している。また、鞍を付けた馬と鳥（？）の二像は、口縁端部とつながる柱部分が復元されているため、作られた当初からこの位置にあったかどうかは不明である。子器は内外面とも回転ナデ調整、小像は手づくねである。本例の特徴として、子器は坏部と接する部分に、小像は坏部と接する柱部分に径４㎜程度の小孔が穿孔されていることがあげられる。何のために穿孔されたのかは不明であるが、子器、小像ともほぼ中央に均一な大きさで穿孔されており、注目できる。

器台の形は、坏部はやや内湾しながら伸び、端部は外方向に屈曲し、外端に面をなす。脚部はほぼ直線的な柱状部から裾部はゆるやかに内湾しながら開き、端部は内傾する面をなす。坏部と柱状部の境には円形のスカシを３方向に施し、柱状部のスカシは上から３段は３方向に長方形スカシを施している。４段目には６方向にスカシを施しているが、そのうち５方向が長方形スカシ、１方向に三角形スカシである。５段目には三角形スカシを６方向に施す。

装飾付須恵器は、江戸時代からその存在が知られていた。これら装飾付須恵器の集成を最も早く行ったのは、末中哲夫・村川行弘氏である（末中・村川1957）。両氏は主に縄文時代から古墳時代までの河内国中河内郡の出土資料を集成され、その中で、中河内郡の装飾付須恵器の収集も行っている。本資料が初めて報告されたのもこの文献である。その後、柴垣勇夫氏が「装飾付須恵器の器種と分布」で装飾付須恵器の型式別、時期別の分布を論じた（柴垣1984）。また、間壁葭子氏は装飾付須恵器の小像の集成を出土府県別に行い、岡山県、兵庫県、大阪府、和歌山県から小像が付く須恵器の出土が多いことを示した（間壁1988）。この論中で本資料の人物像を「美豆良付人物」として紹介している。なかでも最も広く装飾付須恵器の集成を行ったのは、山田邦和氏である。山田氏は1989年に「装飾付須恵器の分類と編年（上・下）」を著し、現在の研究の基礎となる装飾付須恵器の分類と編年を行った（山田1989）。また、1992年には「装飾付須恵器総覧－装飾付須恵器の基礎的研究３－」で全国の装飾付須恵器の集成を行った（山田1992）。山田氏の研究によると、全国（32府県）でみつかった装飾付須恵器の総数は800例以上を数える。

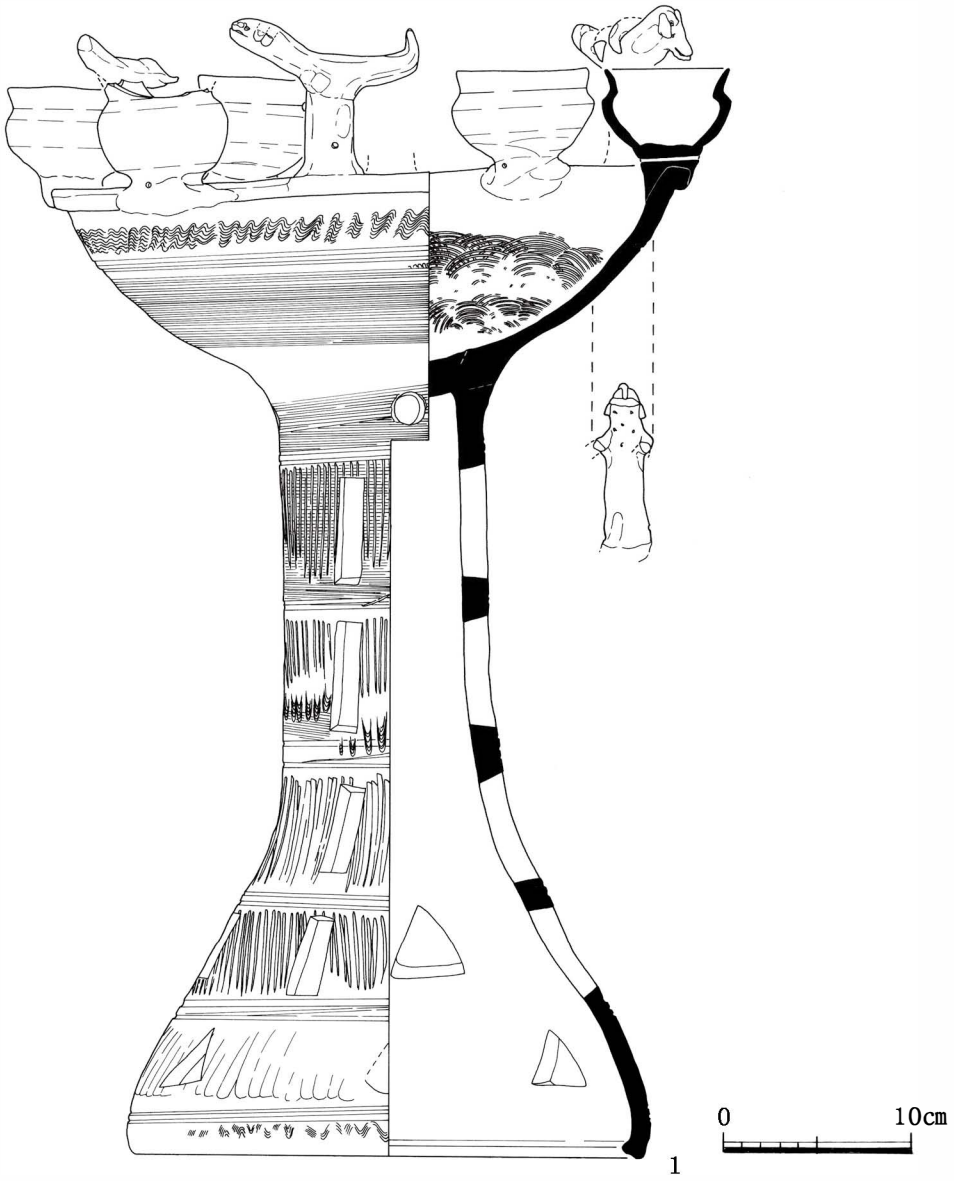


図３　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）①　長者の箸塚古墳出土装飾付須恵器（S=1/4）

数多く出土している装飾付須恵器の中でも本例は、人物像（美豆良髪の男子像）、鞍を付けた馬など当時の風俗を表しており、貴重な資料である。時期は山田編年のⅡ期後半（６世紀後半）に比定できる。

３）その他の須恵器・土師器（図３・図４）

その他の資料として須恵器23点、土師器３点を報告する。本資料には「中河内郡高安村出土」と手書きされた付箋が貼られている資料や（２・４・６・７・10・13・14・17・24)、「岩本文庫　第　号　大正　年　月　日　」と印刷されたラベルが貼られている資料もあり（４～７、９・11・13・15・19・21・23・25)、岩本文一氏が大正年間に、高安古墳群から採集した資料であることがわかる。

２は現存高10.2cm、体部最大径は12.0cmを測る瑞である。口縁端部は欠損している。体部は中位が大きく張り出す形で、体部中位と頸部に波状文を施す。底部は静止ヘラケズリが施されている。３は口径14.6cm、高さ14.9cmを測る壷である。体部下半は不定方向の平行タタキ、上半は縦方向の平行タタキを施す。その後、全体的に回転ナデを施している。４は口径17.8cm、高さ21.5cmを測る広口壷である。肩

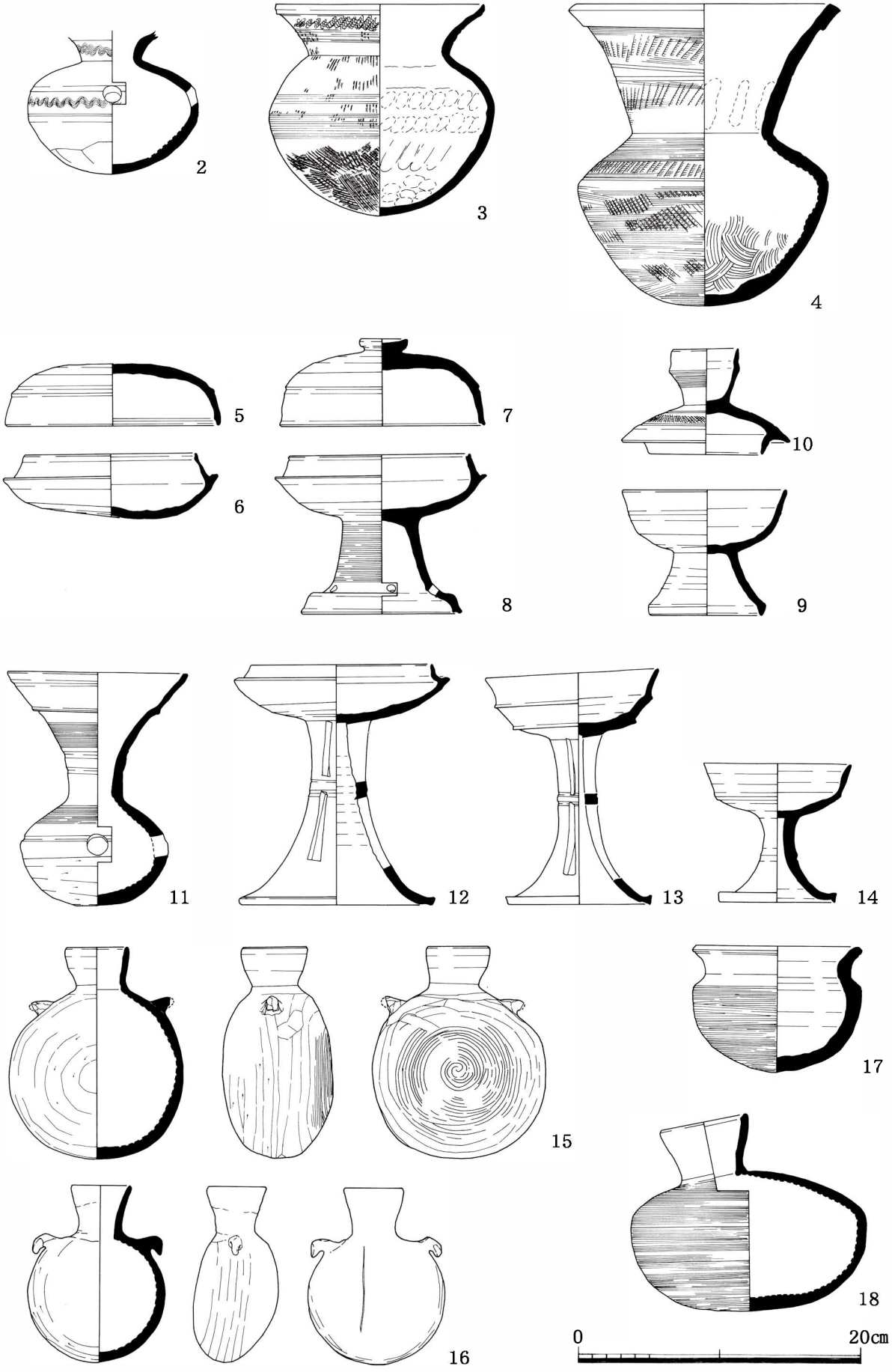


図４　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）②（S=1/4）

部がやや張り、頸部は直線的に外上方に開き、口縁部は厚く、端部は面をなす。体部下半に平行タタキを施したのち、体部全体にカキ目を施す。体部上半と頸部には櫛描文状の調整を施す。体部内面は下半には同心円文タタキが残っているが、上半はナデ消している。

５は口径15.0cm、高さ4.4cmの坏蓋である。天井部と体部を分ける稜はやや鈍く、口縁端部は不明瞭な段をなす。天井部約1/２に回転ケズリ調整を施す。６は口径12.1cm、高さ4.6cmの坏身である。立ち上がりは、やや内傾し、端部は不明瞭な段をなす。底部は約１/３が回転ケズリ調整を施す。５と６はセット関係になると考えられる。７は口径14.4cm、高さ6.2cmの有蓋高坏の蓋である。天井部と体部を分ける稜はやや鈍く、口縁端部は内傾し、やや鈍い段をなす。天井部の約２/３に回転ヘラケズリを施し、天井部には中央がくぼんだつまみがつく。８は口径12.7cm、高さ11.35cmの有蓋高坏である。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部は段をなす。脚部はやや太く、裾部が「ハ」の字状に開く。脚部と裾部の境目に５カ所の円形スカシを施す。７と８もセット関係になると考えられる。９は口径11.5cm、高さ8.9cmの無蓋高坏である。坏部は内湾しながら立ち上がり、端部は丸く収める。脚部はほぼまっすぐ「ハ」の字状に開く。10は口径7.8cm、高さ7.6cmの壷の蓋である。おそらく装飾付壷の蓋であろう。蓋部中位には列点文が施され、つまみは小型の坩のような形態をしている。

11は口径12.7cm、高さ16.45cmを測る瓶である。頸部は細く、外上方に大きく開き、端部は丸く収める。体部中位に最大径を持つ。底部は回転ヘラケズリを施している。体部内には穿孔した時の粘土片が残存している。12は口径12.8cm、高さ17.05cmの長脚二段スカシの有蓋高坏である。坏部はやや浅く、受け部はほぼ水平で立ち上がりも短い。脚部の柱状部はやや太く、裾部は大きく開き、端部はやや丸く収める。スカシは３方向に施す。13は口径12.2cm、高さ16.7cmの長脚二段スカシの無蓋高坏ある。坏部は２段に明瞭な稜があり、外上方に大きく開く。柱状部は細く、裾部は大きく開き、端部は面をなす。３方向にスカシを施す。14は口径10.4cm、高さ9.8cmの無蓋高坏である。坏部は口縁部が若干開きながら外上方にのび、端部は丸く収める。口縁部と体部の稜は不明瞭である。脚部は柱状部が細く、裾部は外反しながら大きく開き、端部は下方向につまみあげて面をなす。15・16は提瓶である。15は口径4.3cm、高さ15.0cmを測る。把手は先端が欠損しているが、釣り手状で、口縁端部は丸く収める。裏面は回転ケズリ調整で、膨らんでいる表面はカキ目を施す。16は、口径4.0cm、高さ12.5cmを測る。把手は釣り手状で端部は丸く収める。裏面は回転ケズリ調整で、表面は回転ナデ調整を施し、「｜」のヘラ記号が残る。17は口径11.6cm、高さ9.0cmの短頸壷である。全体的に器壁が厚い。頸部は短く外上方に開き、口縁端部は外傾する面をもつ。体部にはカキ目を施す。18は口径6.1cm、高さ14.0cmの平瓶である。体部は全体的に丸く、口頸部はやや内湾しながら立ち上がり、端部は内傾する面を持つ。19は口径21.2cm、高さ45.5cmの須恵器の甕である。体部中位に最大径を持ち、口頸部は短く外反し端部は丸く収める。体部外面は平行タタキののち回転ナデを施し、一部カキ目状になっている。内面は同心円文タタキが明瞭に残る。

20～22は土師器の壷である。３点とも体部～頸部のみの残存で口縁部は残っていないが、直口壷と考えられる。20は現存高11.7cm、体部最大径12.9cmを測る。底部はやや平らで、体部中位より下に最大径を持つ。調整は、底部は不定方向のヘラケズリ、中位は横方向のヘラミガキ、上位から頸部にかけてはナデ調整を施す。21は現存高13.8cm、最大径13.8cmを測る。やや扁平な球形の体部を持ち、若干外方向に開きながら伸びる頸部を持つ。体部下半はヘラケズリ、上半は横方向のヘラミガキ、頸部は縦方向のヘラミガキを施す。22は残存高11.7cm、最大径15.1cmを測る。平らな底部に、肩部が大きく張った扁平な体部を持つ。体部下半はヘラケズリ、上半は強いナデ調整を施す。

23は口径11.5cm、高さ3.5cmの坏蓋である。宝珠形のつまみをもつ。24は口径7.2cm、高さ15.9cmを測る長頸壷である。丸い底部から体部中位に稜を持つ。頸部は直線的に伸びたのち、上外方に開き、端部は丸く収める。25は口径9.6cm、器高20.25cmの台付長頸壷で、「ハ」の字状に踏ん張る台部が付く。体部最大径部分と頸部が大きく開く部分に浅い凹線を持つ。頸部はやや外反気味に延びたのち、口縁部は逆「ハ」の字状に開く。26は口径8.5cm、現存高20.4cmの台付長頸壷である。台端部は欠損しているが、３方向に円形のスカシを施している。体部最大径部分に浅い凹線を持ち、頸部は直線的に延びたのち、口

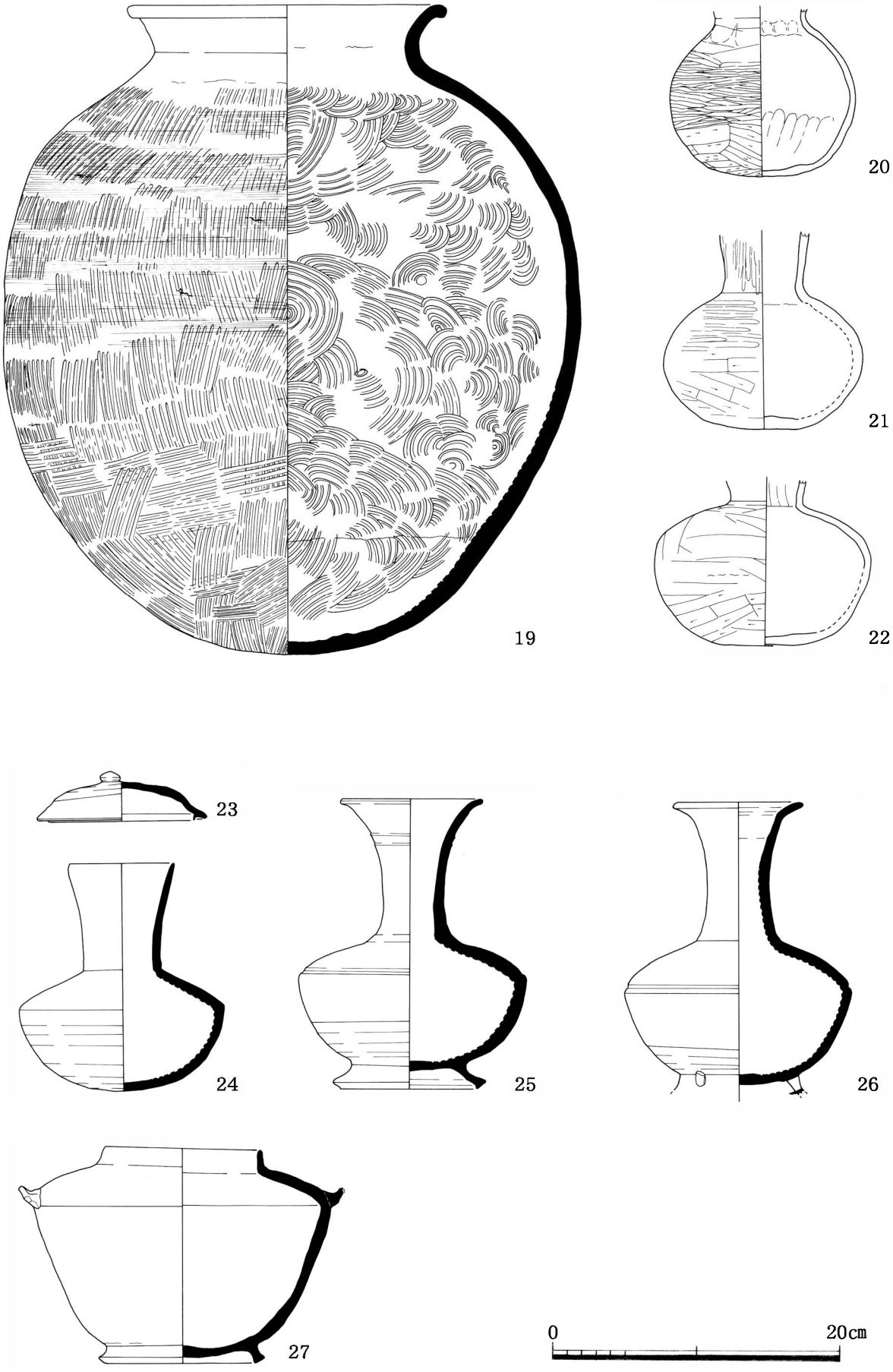


図５　高安古墳群出土資料（大阪城天守閣所蔵）③（S=1/4）

縁部で大きく外方向に開く。

27は口径10.8cm、高さ15.1cmの把手付短頸壷（壷Ａ）である。大きく張り出した肩部に２カ所、上向きの把手が付く。頸部は立ち上がりが短く、端部は丸く収める。

以上、須恵器・土師器計26点を報告した。今回報告した須恵器の型式をみると、大きく５つのグループに分けることができた。①ＴＫ23～ＴＫ47型式期に当たる２～４、②ＴＫ10～ＭＴ85型式期に当たる５～10、③ＴＫ43～ＴＫ209型式期に当たる11～19、④ＴＫ217～ＴＫ48型式期に当たる23～26、⑤ＭＴ21型式期の27である。２）で報告した長者の箸塚古墳出土の配像高坏形器台（１）は、③ＴＫ43～ＴＫ209型式期に比定でき、３点報告した土師器壷（20～22）も同時期のものと思われる。

今回、大阪城天守閣所蔵資料を実測、検討することによって各資料の時期を明らかにすることができた。５つのグループのうち、①グループの資料は、高安古墳群内で最も古い古墳である森田山古墳と同時期の資料となり、森田山古墳以外にも５世紀に遡る古墳の存在が指摘できる。また、最も出土量が多い③グループは、高安古墳群で最も造墓が盛んであった時期に当たる。

考察は後述となるが、本資料は、遺物の出土例が少ない高安古墳群を考える上で非常に貴重な資料と言える。

［参考文献］

大阪城天守閣　2010『地中からの遺産－大阪城天守閣所蔵考古資料展－』

片岡英宗編　1923『中河内郡誌』　大阪府中河内郡役所（写真１を引用）

清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター（写真２を引用）

拙稿　2009「八尾市出土の装飾付須恵器について」『研究紀要』第20号　八尾市立歴史民俗資料館　他

柴垣勇夫　1984「装飾付須恵器の器種と分類について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』３　愛知県陶磁資料館

末中哲夫・村川行弘編　1958『近畿大学周辺史－河内国中河内郡の歴史』原始古代編　近畿大学商経学会

間壁葭子　1988「装飾付須恵器の小像群－製作の意図と背景－」『倉敷考古館研究集報』第20号　倉敷考古館

山田邦和　1989「装飾付須恵器の分類と編年（上）－装飾付須恵器の基礎的研究１－」『古代文化』第41巻第８号、「装飾付須恵器の分類と編年（下）－装飾付須恵器の基礎的研究２－」『古代文化』第41巻第９号　(財)古代学協会

山田邦和　1992「装飾付須恵器総覧－装飾付須恵器の基礎的研究３－」『古代学研究所研究紀要』第２輯　(財)古代学協会

山田邦和　1997「装飾付須恵器および特殊須恵器の研究」『須恵器生産の研究』(株) 学生社

原田修・久貝健・島田和子　1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター

花田勝広・吉田野乃　2008『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13　八尾市教育委員会（図２を引用）

奈良国立文化財研究所　1982『平城宮発掘調査報告XI』

種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%)(口縁部)	備考
須恵器	1	配膳高坏形器台	口縁部～底部	33.8	60.8	外面－全体的に回転ナデ。柱状部は波状文と波状文の工具を原体とする調整。坏部は波状文とカキ目。内面－柱状部は回転ナデ。坏部は底部分が同心円文が残るが、その他は同心円文をナデ消している。	暗青灰色	良好	密	直径1mm以下の砂粒を少量含む。	100	
	2	𤭯	頸部～底部	体部最大径12.0	14.9	外面－底部は回転ケズリ。その他は回転ケズリ。体部中位と頸部には波状文。 内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1mmの白色粒子を僅かに含む。	0	外面肩部に自然釉がかかる
	3	壷	口縁部～底部	14.6	14.9	外面－頸部～体部はタタキ後回転ナデ。一部カキ目。頸部には波状文。内面－回転ナデ。体部には指おさえ痕あり。	灰白色	やや軟	やや密	直径1～2mmの砂粒を少量含む	100	口頸部内面と外面肩部に自然釉がかかる
	4	広口壷	口縁部～底部	17.8	21.5	外面－体部下半は格子タタキ後カキ目。内面－体部下半は同心円文タタキ。その他は回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径2～3mm以下の砂粒を少量含む。	100	
	5	坏蓋	口縁部～天井部	15.0	4.4	外面－天井部約1/3が回転ケズリ。他は回転ナデ。内面－回転ナデ。	暗灰青色	良好	密	直径2～3mm以下の砂粒をごく少量含む。	100	
	6	坏身	口縁部～底部	12.1	4.6	外面－底部約1/3が回転ケズリ。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	やや密	直径1～2mmの砂粒をやや多く含む。	100	
	7	坏蓋	口縁部～天井部	14.4	6.2	外面－天井部約1/3が回転ケズリ。他は回転ナデ。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	やや密	直径2～3mmの砂粒をやや多く含む。	100	
	8	有蓋高坏	口縁部～底部	12.7	11.4	外面－回転ナデ。一部回転ケズリとカキ目。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mmの砂粒をごく少量含む。	100	底部内面中央に静止ナデ
	9	無蓋高坏	口縁部～底部	11.5	8.9	外面－回転ナデと回転ケズリ。内面－回転ナデ。	明青灰色	良好	精良		100	
	10	壷蓋	口縁部～天井部	7.8	7.6	外面－回転ナデ。一部列点文とカキ目。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mm以下の砂粒をわずかに含む。	100	
	11	𤭯	口縁部～底部	12.7	16.5	外面－底部は回転ケズリ。その他は回転ナデとカキ目。内面－回転ナデ。	明青灰色	良好	やや密	直径1～2mmの砂粒を多く含む。	100	外面の一部に自然釉付着
	12	有蓋高坏	口縁部～底部	12.8	17.1	外面－坏部底部約1/3は回転ケズリ。その他は回転ナデ。内面－回転ナデとナデ。	青灰色～明青灰色	良好	粗	直径2～3mm以下の砂粒を多く含む。	100	
	13	無蓋高坏	口縁部～底部	12.2	16.7	外面－回転ナデ。内面－ナデ。	暗青灰色	良好	やや密	直径1～2mm以下の砂粒をやや多く含む。	100	
	14	無蓋高坏	口縁部～底部	10.4	9.8	内外面－回転ナデ。	青灰色	良好	やや粗	直径1～2mm以下の砂粒を多く含む	80	
	15	提瓶	口縁部～底部	4.3	15.0	外面－体部裏面は回転ケズリ、表面はカキ目。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mm砂粒を少量含む。	100	
	16	提瓶	口縁部～底部	4.0	12.5	外面－裏面は回転ケズリと回転ナデ。表面は回転ナデ。内面－回転ナデか。	青灰色	良好	密	直径1～2mm以下の砂粒を少量含む。	100	体部に「｜」のヘラ記号あり。
	17	短頸壷	口縁部～底部	11.6	9.0	外面－口頸部は回転ナデ、体部はカキ目。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mm以下の砂粒を少量含む。	100	
	18	平瓶	口縁部～底部	6.1	14.0	外面－体部はカキ目、口頸部は回転ナデ。内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mmの砂粒を少量含む	100	
	19	壷	口縁部～底部	21.2	45.5	外面－格子タタキの後回転ナデ。内面－同心円文タタキの後ナデ消し。	青灰色	良好	密	直径1～2mmの砂粒を少量含む	100	
土師器	20	壷	頸部～体部	最大径12.9	11.7	外面－体部下半はケズリ。上半はヘラミガキ。内面－ナデ。指おさえ痕あり。	赤褐色	良好	密	直径1～2mmの砂粒をごく少量含む。	0	
	21	壷	頸部～底部	最大径13.8	13.8	外面－体部下半は回転ケズリ。上半と頸部はヘラミガキ。内面－ナデ。	淡褐色	やや不良	密	直径1～2mmの砂粒を少量含む。	0	
	22	壷	頸部～底部	最大径15.1	11.7	外面－体部下半はヘラケズリ。体部上半から頸部は横ナデ。	赤褐色	良好	やや密	直径1～3mmの砂粒をやや多く含む。	0	

種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%)(口縁部)	備考
須恵器	23	坏蓋	口縁　部～天井部	11.5	3.5	外面ー天井部約1/は回転ケズリ。内面ー回 転ナデ。	青灰色	良好	密	直径1～2mmの砂粒を少量含む。	90	
	24	長頸壺	口縁部～底部	7.2	15.9	外面一底部は回転ケズリ。その他は内外面とも回転ナデ。	明青灰色	良好	やや粗	直径2～3mmの砂粒をやや多く含む。	100	外面の上部に自然釉付着
	25	台付長頸壺	口縁部～底部	9.6	20.3	外面ー体部下半は回転ケズリ。その他は内外面とも回転ナデ。	明青灰色	やや良	やや粗	直径2～3mm以下の砂粒やや多く含む。	100	外面の上部に自然釉付着
	26	台付長頸壺	口縁部～底部	8.5	20.4	外面ー体部下半は回転ケズリ。その他は内外面とも回転ナデ。	青灰色	良好	やや粗	直径1～3mmの砂粒やや多く含む。	90	
	27	把手付短頸壺	口縁部～底部	10.8	15.1	内外面とも回転ナデ。	灰白色	良好	やや粗	直径1～2mm砂粒をやや多く含む。	100	

３.高安古墳群関連資料　須恵器高坏形器台について

まず、本文中に用いる高坏形器台の各部の名称についてまとめておく。全体を鉢部と脚部に大別し、さらに脚部を沈線などで区画した最下段を脚台部とする。脚台部となる最下段は文様を施す例が少ないことから、文様を施す段とは区別し脚台部とする。脚台部より上は、下から数えて１～４段目とする。スカシの開口方向と形状は、図７と９に示している。最も外の円が脚台部となり、中心より１つ外側が最上段である。

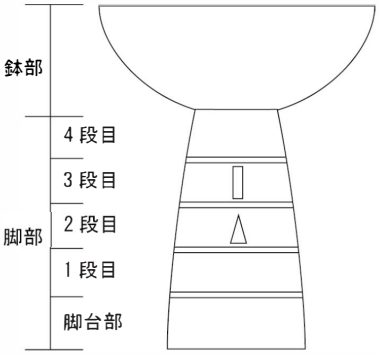


図６　高坏形器台各部名称図

１）高坏形器台１（図８）

本資料は、一部に欠損はあるものの完形品である。各部法量は器高48.6cm、口縁部径38.6cm、鉢部高15.1cm、脚部高33.5cm、脚部径27.7cmである。

全体の形状について、まず鉢部は口縁部径に対して深さがやや深い。口縁部は端部近くで水平方向に外反し、端部断面は三角形状を呈する。次に脚部は、鉢部との接合個所から脚端部まで直線的にハの字状に開き、脚台部で極く僅かに内湾する。鉢部と脚部の境には、断面が三角形状の突帯が貼り付けている。

スカシは８方向４段に穿孔している（図７）。１段目は三角形スカシ、２～３段目は三角形スカシ、そして４段目のみに長方形スカシを配置している。展開すると左右対称なスカシ配置になっていることがわかる。

調整について、全面に自然釉がみられ、ほとんど確認できないが、鉢部外面はタタキ調整ののち、外面上半にカキメを施す。鉢部内面は全面にロクロナデ調整を施しているために、当て具痕は残存していない。脚部外面は４段目上半にカキメが僅かに確認できることから、本来は外面全体にカキメが施されていた可能性がある。また、脚台部の一部に縦方向のハケがある。脚部内面には粗いロクロナデ調整が施されており、数ヶ所に粘土の接合痕が残存している。

文様は全面に施している。まず鉢部は、２条１組のやや深さのある沈線によって区画し、区画より上を２段の波状文を施している。次に脚部は、２～３条の沈線を１組として５段に分け、１～３段目に波状文を、４段目に３段に分けた縦方向のヘラガキを施している。波状文は各段の高さを最大限使い施文しているところは少なく、多くは段の半分程度である。また、ヘラガキ１つの単位は、上から下へ、向かって左から右方向へと強く施されており、半月状を呈する。

また、鉢部内面中央から直径約17cmの範囲内を除き、全面に淡い緑色の自然釉がみられ、光沢がある。鉢部外面はやや黒色の度合いが強い。この自然釉のみられない範囲には、別個体の須恵器の剥離痕が認められ、径約17cmの須恵器を置いて焼いた痕跡と考えられる。また、焼け歪みによりやや鉢部全体が傾いている。

本資料の時期については考察２にて詳述するが、ここでは時期を考える要素をまとめておく。

①鉢部は口縁部径に対して深さが深い。
②脚部が直線的にハの字に開き、脚台部で極く僅かに内湾する。
③口縁端部は外反し、断面が三角形状を呈する。
④スカシの形状は三角形が主体であり、長方形のものは少ない。
⑤鉢部の波状文が２段になっている。

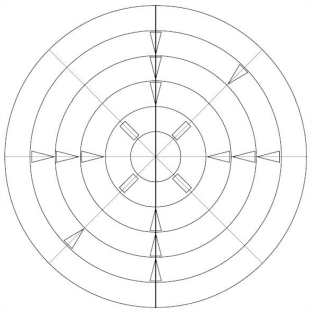


図７　高坏形器台１スカシ展開図

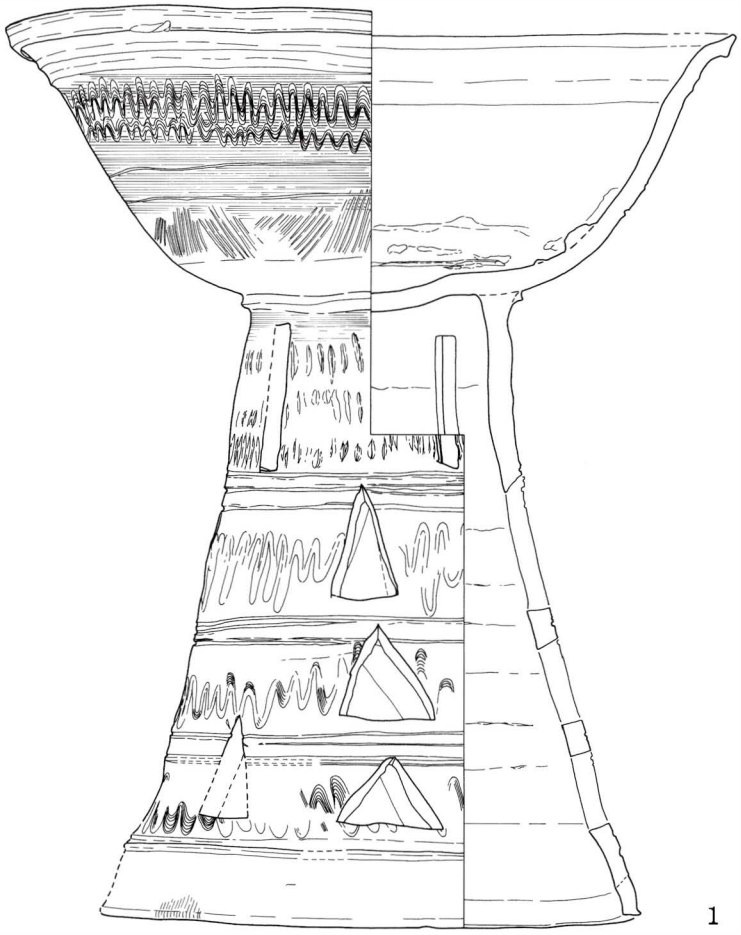


図８　高坏形器台１（S=1/4）

２）高坏形器台２（図10）

本資料は完形品であり、鉢部は僅かに傾いている。各法量は器高49.5cm、口縁部径32.6cm、鉢部高11.1cm、接合部径12.3cm、脚部高38.0cm、脚部径29.9cmである。

全体の形状について、まず鉢部は口縁部径に対し浅い。口縁部は斜め上方に外反し端部を短く上下へ突出させ、端部断面は三角形状を呈する。次に脚部は、鉢部との接合部からやや垂直気味にハの字に開き、１段目でさらに外反し、脚台部は稜をなして屈曲させたのち、やや開いたまま底端部までいたる。底端部の断面は四角形状を呈する。鉢部と脚部の境には断面が台形状の突帯が貼り付けられている。

スカシは４方向４段に穿孔している（図９）。４段目は長方形スカシ、１～３段目に縦長の三角形のスカシを配置している。穿孔の仕方は観察できるもので、長方形スカシは左→上→右→下、三角形スカシも同様である。

調整について、まず鉢部外面は、鉢部上半にカキメを施したのち、下半に格子目タタキ調整、カキメの順で施す。鉢外面底部にも格子目タタキ調整の痕跡が残存する。この痕跡よって鉢部を別作りしたのち、脚部と接合したことがいえる。また、鉢部外面上半と口縁端部には強いロクロナデ調整を施している。鉢部内面下半には、当て具痕が残存しており、当て具痕の重なりあいから上から見て外側から内側へ時計回りに施したことがわかる。次に脚部は、外面の脚台部を除き前面にカキメを施す。脚部内面には粗いロクロナデ調整が施され、数ヶ所に粘土の接合痕が残存する。また、内面の一部に指頭圧痕が残る。

文様は全体に施されている。まず鉢部は、１条のやや浅い沈線によって区画し、区画より上に１段の波状文を施す。脚部は2条一組の沈線によって４段に分け、２段の波状文を施す。施文方法は、１・２・４段目は上下に分けて波状文の施文を行っているが、３段目のみが上から下にむけて螺旋状に施文している。

本資料の時期については考察２にて詳述するが、ここでは時期を特定する要素をまとめておく。

①鉢部が口縁部径に対して深さが浅い。
②脚部はややハの字より垂直方向に開き、１段目で角度を変え外反し、脚台部は垂直からやや開いたまま底端部までいたる。
③口縁端部は三角形状を呈し、端部において上下に突出させる。
④スカシ形状は三角形が主体であり、長方形は一部である。
⑤鉢部の波状文が１段になっている。

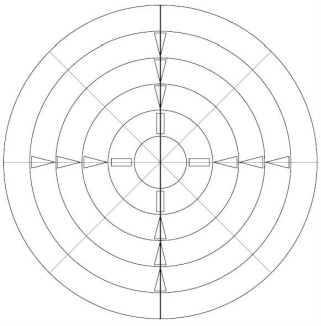


図９　高坏形器台２スカシ展開図

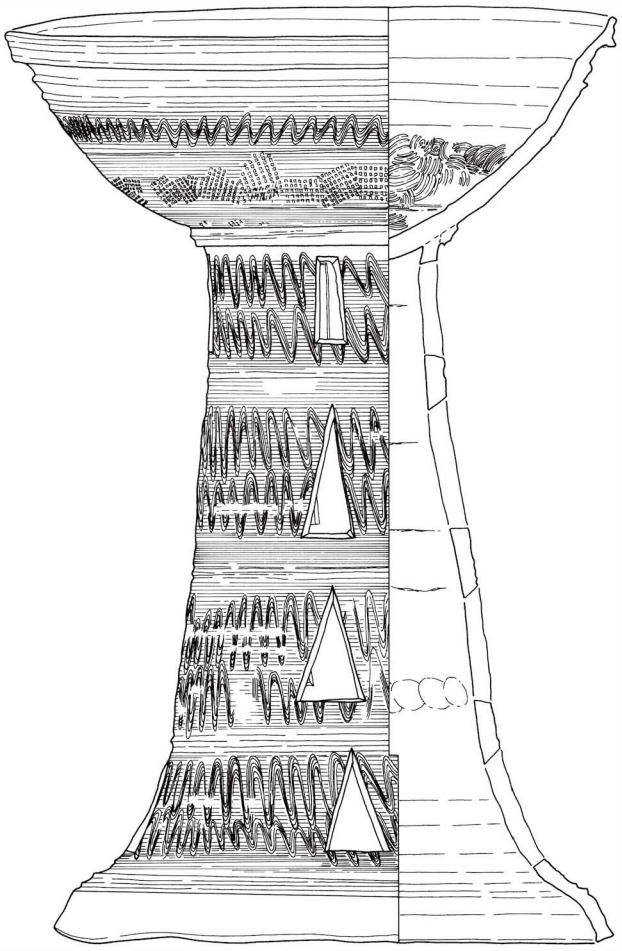


図10　高坏形器台２（S=1/4）

種類	番号	器種	部位	口径（cm）	全高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率（%）（口縁部）	備考
須恵器	1	高坏形器台	ほぼ完形	38.8	48.8	鉢部 外面−タタキ、カキメを施した後、2条の沈線と2段の波状文を施す。 内面−ロクロナデ 脚部 外面−カキメ、底部の一部にタテハケがみられる。2~4段は波状文を、5段目は縦方向の短いヘラガキを施す。 内面−粗いロクロナデ	外面 灰褐色 内面 青灰色	硬	普通	直径3mm以下の砂粒をわずかに含む。	95	全体に淡い緑の自然釉あり、光沢がある。鉢部内面には別個体の須恵器をおいて焼いた痕跡がある。その為、鉢部の中心から直径約17cmの範囲内は、自然釉がみられない。
	2	高坏形器台	完形	32.6	49.5	鉢部 外面−ナデ、カキメを施した後、沈線を施す。のちタタキを施し、再度下半にカキメを施す。 内面−当て具痕、ロクロナデ 脚部 外面−ナデとカキメを施した後、沈線で段設定し、波状文を真上から見て時計回り施し、最後にスカシをあける。 内面−ナデ、指頭圧痕	淡黒灰色	非常に硬	非常に密	直径1mm以下の砂粒をわずかに含む。	100	格子目タタキは、いわゆる疑似格子目タタキの可能性がある。

［参考文献］

沢村治郎　1999「須恵器大型器台考」『滋賀県史学会誌』第11号

高橋徹・小林昭彦　1990「九州須恵器研究の課題−岩戸山古墳出土須恵器の再検討−」『古代文化』第42巻第４号田

辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

山田邦和　1998「第三節 装飾付須恵器の編年」『須恵器生産の研究』学生社

４.出土地不詳須恵器子持器台の調査

まず、本文に用いる子持器台の各部名称についてまとめておく。各部名称については山田邦和氏の研究を基本としている（山田1998)。親器と子器に大別し、親器をさらに鉢部と脚部にわける。また脚部はⅡ－３の項で示した名称を用いる。

また、子器も図13の俯瞰図に対応した子器の配置を図12に示し、番号を付している。

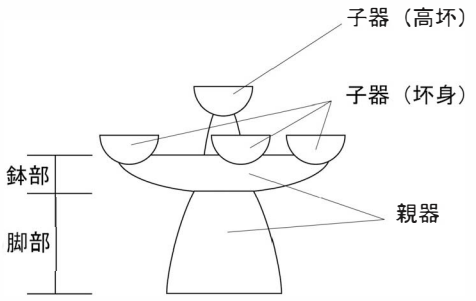


図11　子持器台各部名称図

１）子持器台（図12）

本資料は欠損が多く、親器鉢部の口縁部のほぼ半分、子器１点、高坏の坏身部分が残存しておらず、坏身の蓋については全く遺存していない。また、器台全体が焼けひずみにより大きく傾いている。各法量は残存高30.1cm、口縁部径28.8cm、鉢部高12.9cm、脚部高17.2cm、脚部径28.8cmである。子器坏身の法量については、表にまとめている。

親器の形状について、親器鉢部は本来の鉢部の形状とは異なり、鉢部と脚部を断面がくの字状をなすように、ひと続きになっている。鉢部の口縁部径に対して浅く、端部はやや外反し丸く収める。次に親器の脚部は、２段目が直線的な筒状を呈し、１段目はやや外反する。脚台部との境に明瞭な稜を作り、脚台部はやや垂直気味に開きながら脚底端部までいたる。脚底端部断面は少し凹んだ四角形状を呈する。

親器脚部のスカシは４方向２段に穿孔しており、２段目に長方形、１段目に三角形のスカシを配置している（図14)。

調整について、親器鉢部外面は全体にカキメを施し、一部にロクロナデ調整がみられる。内面は粗いロクロナデ調整がみられ、ナデの凹凸によって起伏がある。脚部は脚台部を除き、カキメが施される。ただ、２段目のカキメは数度施されたのか、数ヶ所重なりあっている。スカシ周囲の外面は粗くナデ調整をし、面取りをしている。また、２段目の数ヶ所に縦方向の指頭圧痕がみられる。

子器ついて、子器坏身は鉢部の周囲にやや間隔をあけて５点配していたとみられるが、１点を欠損している。坏身の受部は水平方向に開き、受端部はやや稜を残しながら丸く収めている。立ち上がりは、垂直気味に比較的長く、端部は丸く収めている。坏部はやや丸みを帯びているが、底部の１／３程に稜が明瞭にあり、そこから角度を変化して底部までいたる。

調整について、子器坏身Ａ～Ｃはほぼ同じ大きさであり、外面はロクロナデ調整と底部１／３にロクロヘラケズリを施す。内面はロクロナデ調整の後、内面底に不定方向の静止ナデを施すなど共通している。対して子器坏身Ｄは子器坏身Ａ～Ｃより小さく、調整も外面底部がロクロヘラケズリではなく、カキメを施す点が異なる。また、高坏は脚部外面をカキメとロクロナデ調整を施し、一部縦方向のナデがみられる。高坏脚部にはスカシを５方向に穿孔しており、それぞれ子器坏身の間の位置にある。スカシの形状は、子器坏身ＣとＤ間は円形、他は不定形の楕円形である。

なお、１段目に「M」字状のヘラ記号がある。このヘラ記号は向かって左から右へ順番に描かれている。本資料と同一ヘラ記号を持つ子持器台が出土しており、これについては４－２項において詳述する。

製作工程としては、まず親器の脚部を作り上げた後、一旦停止する。次に親器鉢部を脚部から口縁部まで一体成形で作り上げる。その為に、鉢部から脚部の断面がくの字状を呈する。また、鉢部と脚部の接合痕が脚上部に確認できる。その後、鉢部中央に別作りした高坏を取りつけ、周囲に子器の坏身を配する。

本資料の時期について考察１において詳述するが、その特徴をまとめておく。本資料は山田邦和氏の研究によると、鉢部が浅く口縁部が外反する特徴を有する「子持器台Ⅰ－二」に分類され、鉢部底を作らず、親器脚部のスカシが２段であることよりⅡ後期の時期に相当する（山田1998)。また、子器坏身の形状より、ＴＫ10型式古段階に相当する。

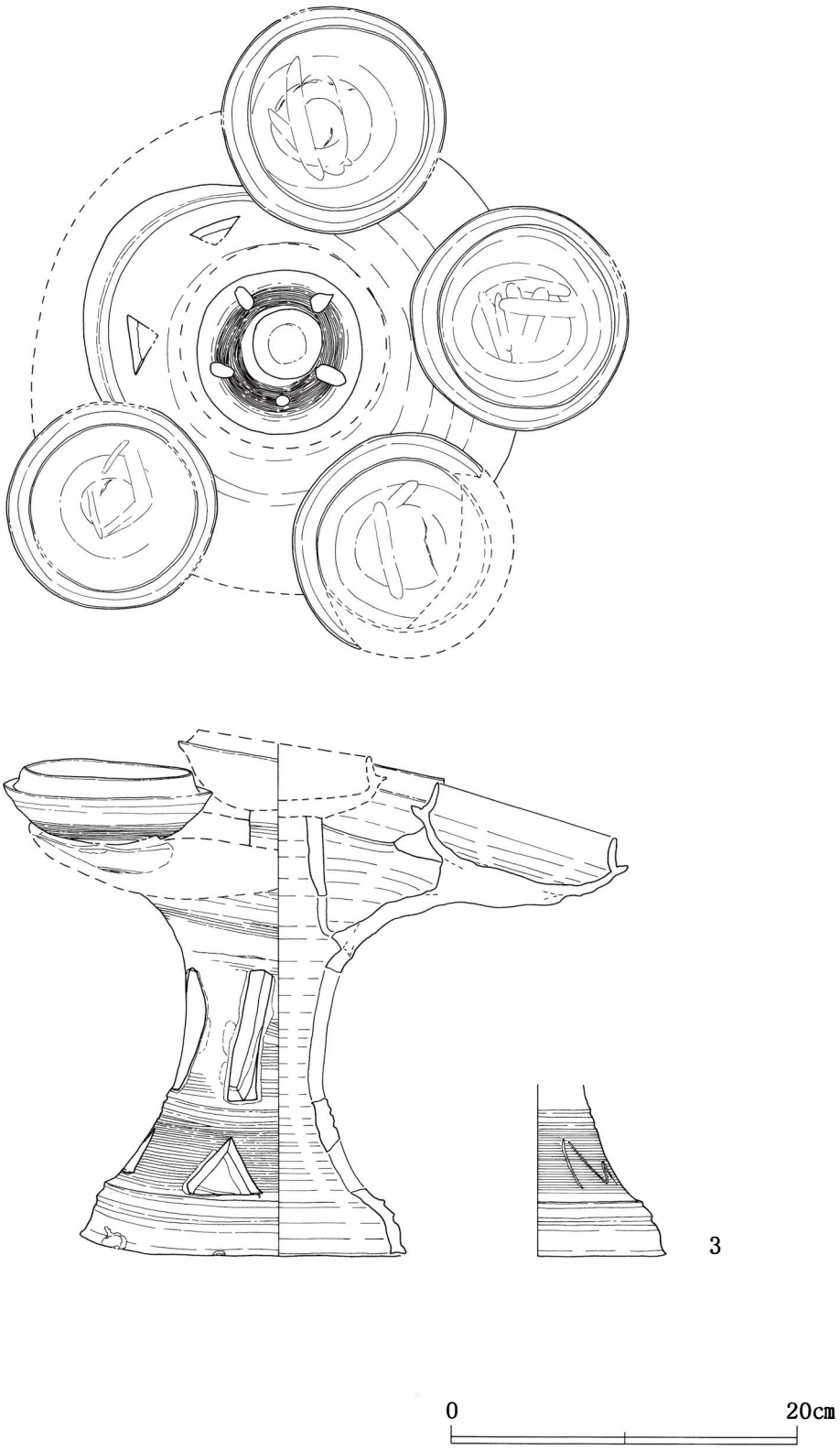


図12　出土地不詳　須恵器子持器台（S=1/4）（上の図は現状での俯瞰図）

子持器台　子器（坏身法量表）

子器	口径	全高	立上り高	ヘラ削り
A	10.7	4.5	1.5	時計回り
B	10.8	4.0	1.5	時計回り
C	10.3	4.5	1.4	反時計回り
D	9.6	3.5	1.1	時計回り

※単位はcm

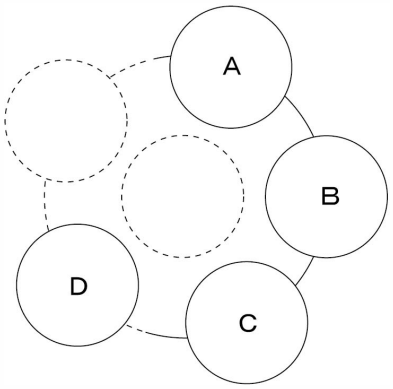


図13　俯瞰模式図

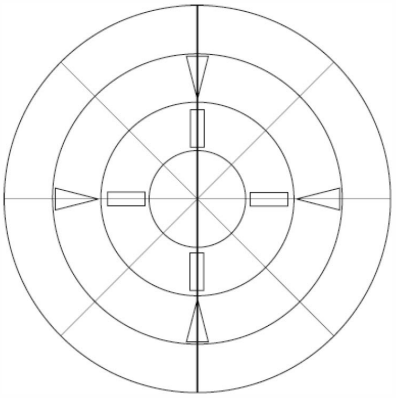


図14　スカシ展開図

観察表

種類	番号	器種	部位	口径（cm）	全高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率（%）（口縁部）	備考
須恵器	3	子持器台	ほぼ完形	28.8	30.1	親器 鉢部 外面−カキメを施した後、ロクロナデ 内面−ロクロナデ、高坏を取りつけた後、再度ロクロナデ 脚部 外面−1段目はロクロナデ、2段目はロクロの回転を利用したカキメ、3段目は切りあいがあるカキメ、一部に指頭圧痕があり、スカシの周囲を面取りする。 内面−ロクロナデ 子持部、坏身 外面−1 点のみ1/3をカキメ、それ以外はヘラケズリ 内面−ロクロナデ、親器に取り付け後に不定向の静止ナデ	外面 灰褐色 内面 淡灰色	普通	普通	直径8mm以下の砂粒をやや含む。	50	子器は4つしか残存していないが、本来は5つ親器の周囲についていたみられる。

［参考文献］

江浦　洋　1995「第３節　Ⅳ調査区須恵器窯Ｐ−１の基礎的検討」『日置荘遺跡　−近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津建設に伴う発掘調査報告書−　分析・考察編』(財)大阪文化財センター

岡田裕之　2003「古墳時代における須恵器の生産単位について　−須恵器に記されたヘラ記号の目的と関連して−」『史淵』第140輯

川瀬貴子　2007「八尾市黒谷出土の子持器台蓋について」『大阪文化財研究』第32号・(財)大阪文化財センター

北野　重　1998『平野・大県古墳群』高尾山創造の森に伴う調査その２　柏原市文化財概報1997−Ⅲ

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

山田邦和　1998「第三節 装飾付須恵器の編年」『須恵器生産の研究』学生社

２）子持器台のヘラ記号について

今回資料調査した本資料については、平尾山古墳群の平野・大県古墳群10−１号墳(注1)から本資料と同一のヘラ記号をもつ子持器台が出土している(注2)。ここでは平野大県10−１号墳について、本資料との時期や特徴の比較を試みる（図15)。

平野大県10−１号墳の出土資料は、原位置を保った状態でミニチュア炊飯具を周囲に置いた状況で出土している。法量は全高25.1cm、口縁部径28.4cm、鉢部高14.0cm、脚部高11.1cm、脚部径14cmである。

形状について、まず、親器鉢部は口縁部径に対して浅い。口縁部はやや外反し端部断面は四角形状を呈する。また、脚部と鉢部の一体成形により、断面が「くの字」状を呈し、本資料と同じ形状である。次に親器脚部は、２段目はほぼ垂直方向になり、１段目は外反する。脚台部との境に稜を作り、脚台部はほぼ垂直になる。また、脚部には不整形な三角形スカシを３方向２段に穿孔している。

外面には脚部中程から子器まで、子器を支える様に粘土帯を張り付けている。

子器は、６点の坏身と中央に高坏を配し、坏蓋は２点残存している。坏身はほぼ同形同大である。まず、受部はやや斜め上方に開き、立ち上がりは垂直に近く、立ち上がり端部は丸く収めている。坏蓋は、天井部との境は稜をもち、つまみは中央が浅く窪んでいる。鉢部中央の高坏は脚が短く、また脚部には細長い長方形のスカシを穿孔している。

M字のヘラ記号については、２段目に施されており、一部１段目にかかる。向かって左が大きく、右から左へと施されている。

時期について、山田邦和氏によると、鉢部が浅く口縁部が外反する特徴を有する「子持器台Ⅰ−二」に分類され、鉢部底を作らず、親器脚部の２段スカシであることよりⅡ後期の時期に相当する（山田1998)。また、子器坏身の形状からＴＫ10型式期（古）段階に相当する。

本資料の方が全体的に大きいものの、脚部から口縁部までの一体成形であること、脚台部の境が明瞭な稜線をもって内湾すること、ヘラ記号の「M」字の形状にいたるまで共通している。このことから、同一時期に製作地を同じくして、製作された可能性がある。ただし、子器を支える粘土帯の有無やスカシの穿孔の粗雑さなどから、平野大県10−1号墳の方が省略化されているものと考えられる。

（注1）　柏原市教育委員会1995『平野･大県古墳群』−高尾山創造の森に伴う調査−　柏原市文化財概報 - Ⅲ

（注2）　本項執筆にあたり、八尾市教育委員会藤井淳弘氏より、平野大県10−1号墳の資料の紹介いただいた。記して感謝申し上げます。

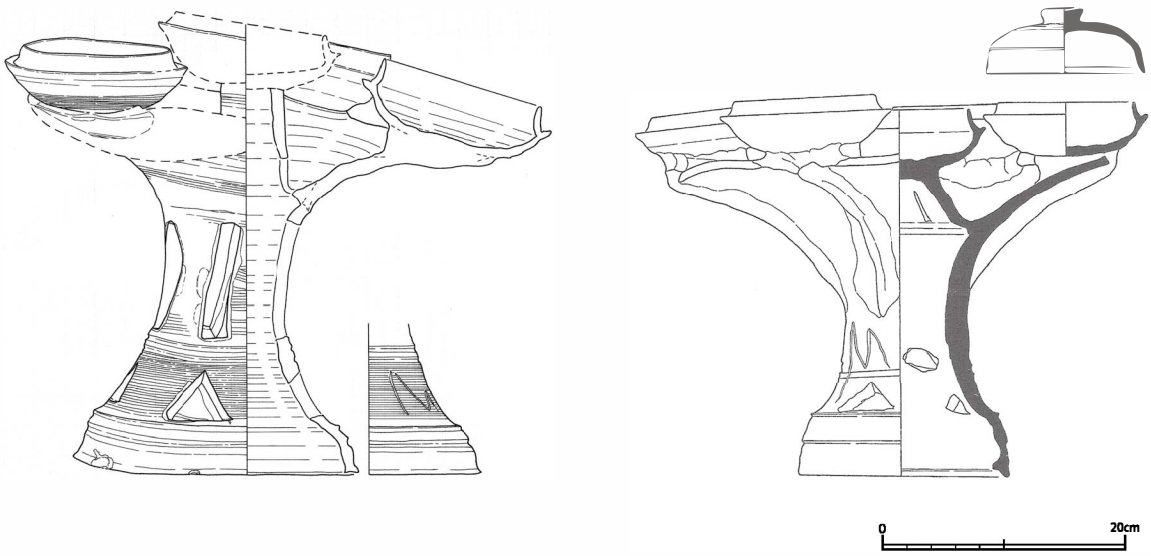


図15　同一ヘラ記号をもつ子持器台
１、出土地不詳須恵器子持器台　　２、平野・大県古墳群内の第10支群１号墳出土子持器台

５　まとめ

１）歴史民俗資料館寄託分資料　長者の箸塚古墳（大窪・山畑59号墳）出土装飾付器台（図３）

本例は、出土古墳が明らかな資料であるとともに、これまで多くの先学が研究されてきた資料であり、鉢部口縁に取り付けられた人物や馬の像は、当時の人々の風俗まで知ることのできる資料として注目できる。昭和16年に国重要美術品に指定されている。本例の時期は、ＴＫ43型式期、6世紀後葉頃の時期のものと考えられる。また、本例と共伴する可能性のある資料についてであるが、明治41年の出土状況について、清原得巌氏の記録では、「須恵器大型器台、装飾付器台、大型甕の他、純銀製耳環、台付壺(？)があった」とあり（清原1976)、「大型器台」に関しては、高坏形器台1、2の資料（図8・10）が注意されるが、これらは６世紀前半から中葉頃の須恵器であり、時期が箸塚古墳出土装飾付器台よりも古い。しかし、戦後に行われた長者の箸塚古墳の破壊状況の写真（４頁）を見ると、これは玄室側から羨道方向を撮影したものとみられるが、かなり巨大な石材が使用されており、羨道とみられる部分の側壁の石材は、大きな石材１石で、天井石を支えているようにみえる。本写真から推定する限りでは、長者の箸塚古墳の石室は、６世紀後半以降のものとみられる。このことからここでは、高坏形器台１．２は、長者の箸塚古墳とは別の古墳の出土とみておきたい。

２）歴史民俗資料館寄託分資料（図４の1～18・図５の19～27)

本資料については、Ⅱ－２項で検討したように、①ＴＫ23～ＴＫ47型式期、②ＴＫ10型式古段階～新段階型式(ＭＴ85型式期)、③ＴＫ43～ＴＫ209型式期、④ＴＫ217～ＴＫ47型式期、⑤ＭＴ21型式期の５つの土器群がある（24頁表)。①群が５世紀後葉頃、②群が６世紀第２四半期から第３四半期頃、③群が６世紀後葉頃、④群が７世紀代、⑤群が８世紀前葉頃の時期のものと考えられる。このうち①群については、６世紀後半の横穴式石室を主体とする高安古墳群よりも古い時期の土器群とみられる。同時期の資料は、服部川支群の森田山古墳(服部川134号墳)があり、Ⅳ－４項で記したよう、５世紀後半頃の古墳と推定され、竪穴系横口式石室等の埋葬施設であった可能性もある古墳である。しかし、岩本文一氏収集資料は、明治時代の終わりから大正11年頃までに収集された資料とみられ、森田山古墳は昭和９年に開墾により発見された古墳であり(清原得巌1976)、①群の資料は森田山古墳出土品とは考えにくい。このことから、①群の須恵器は、高安古墳群に森田山古墳の他にも５世紀後葉頃の古墳があったことを示すものとして注意される。②群の資料は、「高安千塚」の横穴式石室が造営開始後、間もない頃の時期の６世紀第２～第３四半期頃の資料、③群の資料は、造墓盛行期の資料、④群の資料は造墓の終息期で追葬が主に行われる時期の資料となる。②群、③群、④群の資料は同一横穴式石室の初葬と追葬の資料であったとしても違和感のない資料ではある。⑤群の図５の27は、８世紀前葉の須恵器の壺Ａである。郡川16号墳や芝塚２号墳においてもこの時期までの追葬あるいは祭祀に伴う土器が石室から出土している。ただ、本資料については、蔵骨器として使用されたものである可能性も考えられ、石室内からの出土の可能性の他に、単独で埋納されていた可能性も考えられる。

３）高安古墳群出土須恵器高坏形器台１・２（図８・図10)

高坏形器台１の時期については、東大阪市芝山古墳出土の高坏形器台を参考としてとりあげてみたい(図18)。芝山古墳の石室内の埋葬配置について検討された富山直人氏の論考によると、芝山古墳出土の横穴式石室には、５つの木棺が収められている(富山2009)。高坏形器台は左側壁側の二つの木棺に近い位置で出土しており、付近からはＭＴ15型式期の須恵器の坏蓋も出土している。高坏形器台そのものの形状をみても、ＭＴ15型式期頃のものとみてよいであろう。本例を芝山古墳出土例と比べると、鉢部の深さが口径に対してやや浅い点や、脚部における八の字状の開き方がやや緩く、脚端部がわずかに膨らむ点に、新しい要素がみられる。また、芝山古墳出土例の脚部に施された波状文は、沈線で画された範囲に、二段一組を基本として施されているのに対し、本例の脚部波状文は、一段の波状文となっている。このような点から本例はＭＴ15型式期とみられる芝山古墳出土例よりも新しく、ＴＫ10型式古段階期頃のものとみてよいと考えられる。

高坏形器台２の時期を考えるための参考資料としては、東大阪市山畑古墳群の山畑35号墳出土例(図18)、一須賀古墳群ＷＡ11号墳出土例(図19)が挙げられる。山畑35号墳出土例とともに出土した

須恵器の坏はＴＫ10型式新段階のものである。本例は山畑35号墳出土例に比べて、鉢部の口縁端部稜の屈曲がシャープであり、また脚部端も山畑35号墳出土例のように外へ膨らみをもって張り出すものではなく、しっかりとした稜をもって八の字状に張り出す。これらの点は本例が山畑35号墳出土例よりもやや古い要素をもっている点とみられる。また一須賀古墳群ＷＡ11号墳出土の高坏形器台もＴＫ10型式新段階の坏身とともに出土したとみられるものである。鉢部の形状は本例と似ている。鉢部の口縁部や脚端部の形状は、須賀古墳群ＷＡ11号墳出土例の方が稜や屈曲が緩く、本例の方がやや古い要素をもっているとみられる。このことから、本例については、ＴＫ10型式新段階でも古い時期のものとみられる。

以上の検討から、高坏形器台１・２については、ＴＫ10型式期古段階から新段階期初め頃、６世紀第２四半期から第３四半期頃のものとみられ、法量も近いことから、高安古墳群の同一の古墳で出土した可能性もあるものと考えられよう。

４）出土地不詳の須恵器子持器台（図12）

本例については、高坏形器台１．２と共に保管されていたが、来歴が不明の資料である。子持器台は横穴式石室の副葬品としての出土が一般的であり、河内の四大群集墳では、一須賀古墳群で特に多く出土している他、平尾山古墳群では平野・大県10－１号墳から、ＴＫ10型式古段階期のものが出土している（図15)。高安古墳群内周辺地域では、黒谷13号墳と楽音寺８号墳から出土している（図17)。黒谷13号墳出土例は、８個の坏が子器として取り付き、中央にも何らかの子器の取り付いた痕跡のある子持器台であり、ＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式期のものとみられる。楽音寺8号墳出土例は、中央に高坏が取り付くタイプの子持器台の脚部であり、ＴＫ43型式期頃の時期のものである。これら２例の子持器台は、子器坏身の内面中央に静止ナデが認められるという特徴がある。これについては、以前に若干の考察を行ったが(吉田2009)、郡川16号墳、大石古墳(楽音寺７号墳)にも認められ、口縁端部の刻み目状調整や同心円文スタンプとともに、陶邑古窯址群周辺で新たに造られた須恵器窯との関連で注意される。しかしながら、一須賀古墳群と日置荘遺跡の須恵器窯との関連性が指摘されているように(江浦1995)、これは高安古墳群出土品のみの特徴とはいえないものである。高安古墳群の子持器台の特徴を敢えて探せば、黒谷13号墳と楽音寺８号墳の脚端部の内傾の仕方が似ていることが注意される。また本例と楽音寺8号墳出土例のスカシの配置は似ている。しかしながら、Ⅱ－４項で記したように、本例と平野・大県10－１号墳出土例とは同一のヘラ記号をもち、同一の工人集団によって製作された可能性があるものである。このことから、本例は平尾山古墳群で出土したものである可能性も当然あるが、大阪城天守閣所蔵品には、平尾山古墳群からの出土品はない。

また、本例の須恵器型式については、ＴＫ10型式古段階期であり、さきにみた共に保管されていた高坏形器台２点と同一の型式であることは、注意される。ＴＫ10型式古段階期、６世紀第２四半期頃の時期は、高安古墳群でも造墓が開始されて間もない頃の時期であり、それほど多くの古墳が造られていない時期である。このことから、高坏形器台２点と本例の子持ち器台が高安古墳群の同一の古墳から出土したものである可能性も考えられよう。

このようにみてみると、本例について、高安古墳群の出土品と確定することは困難であるが、高安古墳群出土品の可能性をもつ資料とし考えておきたい。

５）小結

岩本文一氏収集資料については、長者の箸塚古墳出土の装飾付器台以外は、高安古墳群のいずれかの古墳出土資料ではあるが、出土古墳の限定はできないものである。ただ、岩本文一氏は、高安郡の古墳の調査をされ、郷土の歴史研究に貢献されただけでなく、山畑村の村社である佐麻多度神社の本殿前の狛犬を寄進されており(八尾郷土文化研究会1988)、地元の発展に貢献された方である。このことからも、岩本氏収集資料については、山畑村周辺、高安古墳群集中地域の大窪・山畑支群やその周辺の古墳の資料である可能性はあるであろう。

本資料の出土地についてのこれまでの検討を24頁の表にまとめた。現段階で可能な限り出土地の推定を行ったものである。今後の資料の増加を待ちたい。

最後に大阪城天守閣所蔵の岩本文一氏収集資料の意義について、簡単にまとめておきたい。本資

料は、明治時代の終わりから大正11年頃に、高安村で出土した資料であり、高安古墳群の出土であることがわかる資料として重要である。また、資料の時期幅が、５世紀後葉から８世紀前葉までと幅広く、６世紀後半が盛行期である高安古墳群にあって、数少ない５世紀後葉、６世紀第２四半期の須恵器を含む点も注意される。さらに高坏形器台２点と子持器台は、６世紀第２四半期という高安古墳群でも古い時期の大型須恵器であり、子持器台は高安古墳群出土と確定できない資料ではあるが、平野・大県10－１号墳出土品と同一ヘラ記号をもつ製品であることも注意される。

今回の調査により、本資料の時期を明らかにすることができ、出土地についても一定の検討を行うことができた。今後、今回の調査成果を、八尾市の歴史遺産である高安古墳群の歴史的価値を明らかにするための貴重な資料として生かしていきたい。

資料内容		図番号	須恵器の型式	時期	推定出土地
長者の箸塚古墳(大窪・山畑59号墳)出土装飾付器台		図3	TK43	6世紀第3四半期頃	
装飾付器台以外の八尾市立歴史民俗資料館寄託資料	①群	図4の2～4	TK23～TK47	5世紀後葉	高安古墳群
	②群	図5の5～10	TK10古～新段階	6世紀第2・第3四半期頃	高安古墳群集中地域(「高安千塚」)大窪・山畑支群とその周辺付近か
	③群	図4の11～18・図5の19	TK43～TK209	6世紀後葉	高安古墳群集中地域(「高安千塚」)大窪・山畑支群とその周辺付近か
	④群	図5の20～26	TK217～TK47	7世紀代	高安古墳群集中地域(「高安千塚」)大窪・山畑支群とその周辺付近か
	⑤群	図5の27	MT21	8世紀前葉	高安古墳群内横穴式石室あるいは高安山麓付近で単独で出土か。
高坏形器台1．2		図8・図10	TK10古～新段階	6世紀第2・第3四半期頃	高安古墳群(高坏形器台2点は同一古墳出土の可能性あり)
子持器台		図12	TK10古段階	6世紀第2四半期頃	出土地不明だが、上記の高坏形器台2点と同一の高安古墳群内の古墳で出土した可能性あり。

資料の推定出土地　一覧表

［参考文献］

江浦　洋　1995「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡　分析・考察編』大阪府教育委員会　(財)大阪文化財センター

清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター

富山直人　2009「芝山古墳の遺物出土状況からみた横穴式石室の利用形態」『古代学研究』184

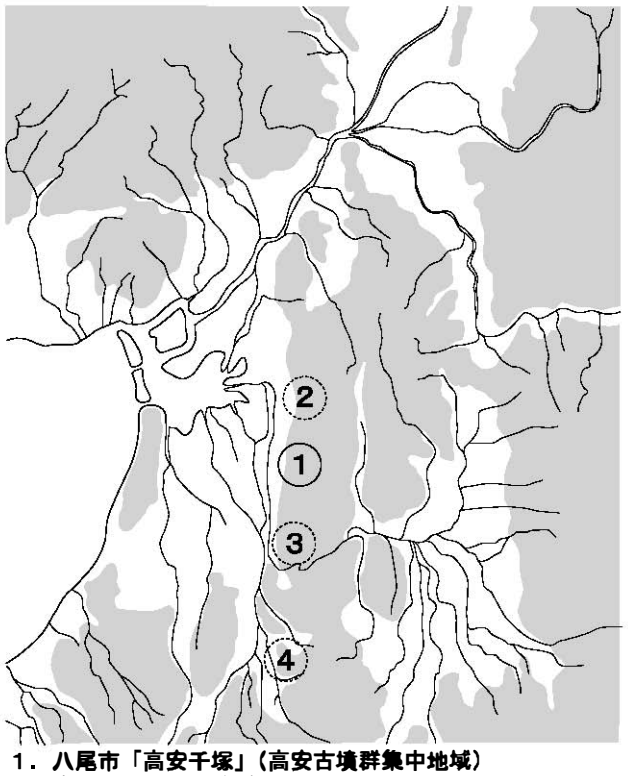
八尾郷土文化研究会　1988『八尾の狛犬』

吉田野乃　2009「考察２　高安古墳群における刻み目状調整等を有する須恵器について」『高安古墳群調査報告書　出土遺物整理調査　服部川支群東側地区測量調査』八尾市教育委員会

６．考察１　装飾付須恵器副葬の特徴からみた「高安千塚」の造墓集団の性格について

今回、調査を行った大阪城天守閣所蔵の高安古墳群資料には、長者の箸塚古墳(大窪・山畑59号墳)から出土した配像付の装飾付須恵器がある。一方、河内の四大群集墳の一つといわれる一須賀古墳群では、装飾付須恵器のうち、子持器台が特に多く出土している。ここで注意されるのは、一須賀古墳群では子持器台が多く出土しているが、配像付の装飾付須恵器は出土していないとみられることである。また、平尾山古墳群においても、平野・大県10－１号墳で子持器台は出土しているが、配像付の装飾付須恵器は全く出土していない。(注1)

このことから、河内の四大群集墳では、副葬する装飾付須恵器の種類に何らかの特徴があり、その特徴が群集墳の造墓集団の性格を示している可能性があるのではないかと考えた。もしそうであるならば、「高安千塚」(注2)の造墓集団の性格を考えるための材料の一つとすることができよう。



1．八尾市「高安千塚」(高安古墳群集中地域)
2．東大阪市山畑古墳群
3．柏原市平尾山古墳群
4．河南町・太子町一須賀古墳群

図16　河内の四大群集墳の位置

ここでは、河内の四大群集墳といわれる八尾市「高安千塚」、東大阪市山畑古墳群、柏原市平尾山古墳群、河南町・太子町の一須賀古墳群から出土している装飾付須恵器を須恵器型式別に整理したうえで(図17)、副葬された装飾須恵器の種類の特徴に注目してみたい。なお、「高安千塚」においては、装飾付須恵器は２例のみしか出土していないため、関連資料として高安古墳群内周辺地域の装飾付須恵器も検討の対象とした。

まず、「高安千塚」では、大窪・山畑支群の長者の箸塚古墳出土の配像高坏形器台がある。ＴＫ43型式期頃、６世紀第３四半期頃の時期のものである。これは、鉢部の口縁に鉢巻状のかぶりものをした美豆良髪の男子像と鞍を装着した馬の像、鳥の像、短頸壺が付くものがある。また、服部川54号墳からは、壺ないしは瑞となる装飾器台の子器片が表面採集されているが(八尾市教育委員会2007)、これは子持器台であるのか、配像高坏形器台の一部であるのか判然としない。

高安古墳群内周辺地域では、４例の装飾付須恵器が出土している。子持器台は２例あり、まず黒谷13号墳出土の子持器台が、ＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式期、６世紀第３四半期頃のものである。また楽音寺8号墳からは、鉢部中央の子器が高坏となる子持器台の脚部が出土しており、ＴＫ43型式期頃、６世紀第3四半期頃のものである。なお、大阪城天守閣所蔵の子持器台が高安古墳群出土品であるとすれば、６世紀第２四半期頃の子持器台を出土する古墳が存在したことになる。また、配像高坏形器台では、大石古墳(楽音寺７号墳)から、鳥の像と長頸壺が付く配像高坏形器台が出土しており、ＴＫ43型式期、６世紀第３四半期頃の時期に位置づけられる。さらに恩智遺跡出土と伝えられる配像付の長脚付壺がある。この資料の時期は、長頸壺の形状が、東大阪市山畑22号墳出土の配像付の長脚壺と似ている。東大阪市山畑22号墳出土例は、ＴＫ10型式新段階頃の須恵器坏と共に出土していることから、６世紀中葉頃の時期とみられる。このことから伝・恩智遺跡出土例も同様の時期とみてよいであろう。

以上みたように、「高安千塚」においては、確実に器種を確認できた装飾付須恵器は、長者の箸塚古墳出土の配像高坏形器台のみであり、資料が少なく様相が判然としない。高安古墳群内周辺地域、

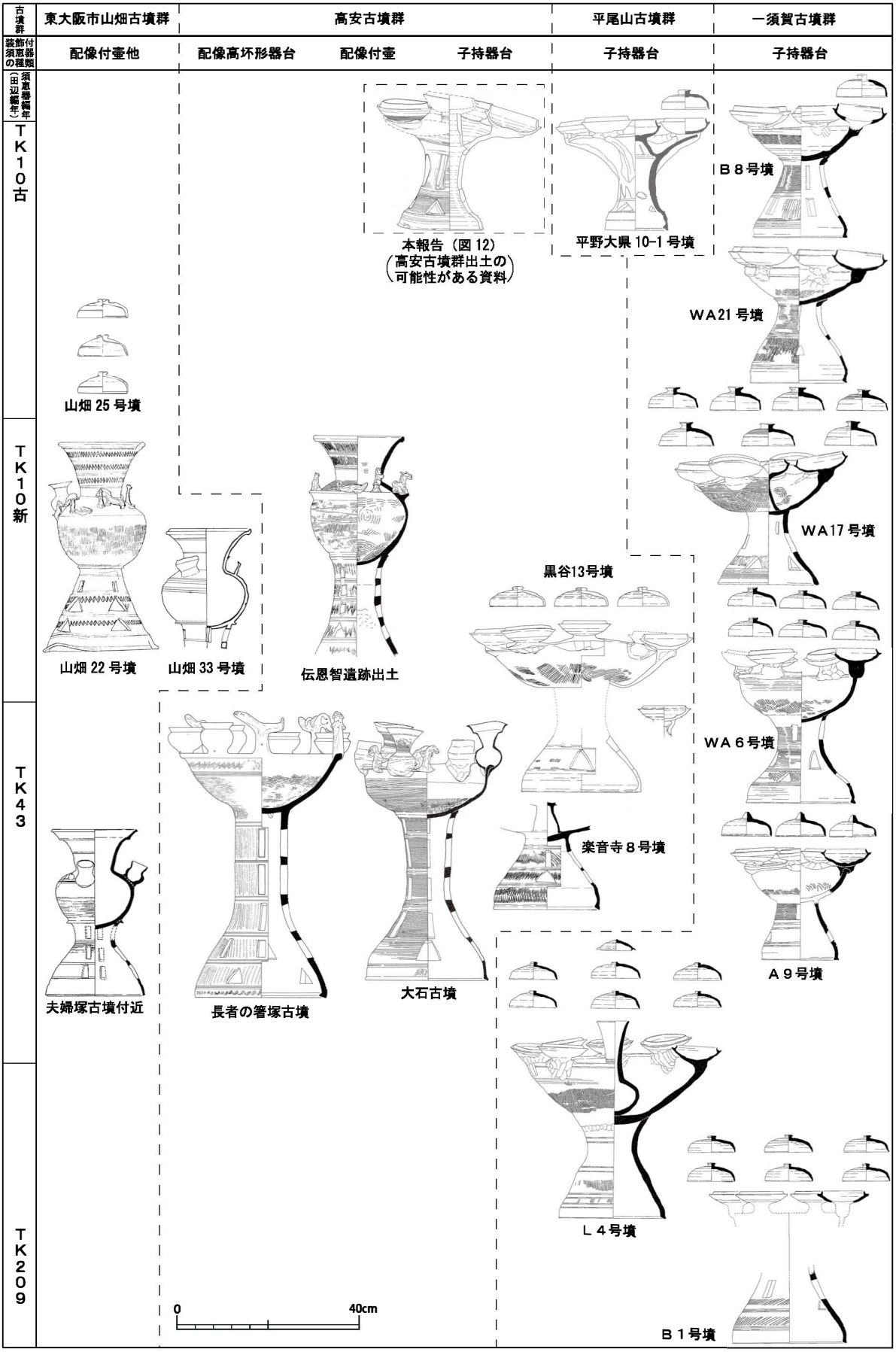


図17　河内の四大群集墳における装飾付須恵器の変遷

では、子持器台、配像高坏形器台・配像付の長脚付壺が出土している。

東大阪市山畑古墳群からは、３例の出土がある。まず、山畑22号墳出土の配像付の長脚壺は、前述のとおり、６世紀中葉頃の時期とみられる。また、山畑33号墳からは、肩部に壺が付く長脚壺が出土している。山畑25号墳からは子持器台の子器の蓋とみられるものが出土し、TK10型式古段階、６世紀第２四半期頃のものとみられるが、装飾器台の本体が出土しておらず、判然としない。以上から東大阪市山畑古墳群では、配像付の長脚壺、子持の長脚壺といった装飾付須恵器が副葬されており、子持器台も副葬されていた可能性がある。東大阪市山畑古墳群は、総数68基(本来は100基前後)の古墳からなる群集墳である(中西2006)。東大阪市では、神並古墳群の夫婦塚においても、乗馬する人物や鞍装した馬等の配像付の装飾須恵器が出土している。堀田啓一氏は山畑22号墳や夫婦塚古墳が双円墳であることに注意され、これらと新羅の双円墳との関連性を指摘されている。さらに夫婦塚の装飾付須恵器については、渡来系の馬飼い集団の家長層の被葬者の可能性を考えられている(堀田1997)。私は、東大阪市の山畑古墳群等で確認されている双円墳と新羅の双円墳との関連性については、時期差もあり、直接的に結びつけるのは、現段階では資料不足ではないかと考える。また、配像付装飾須恵器は、新羅の陶質土器の影響を受けたものとみられるが、6世紀後半段階の装飾付須恵器について、直接的に新羅との関連性を考えることは難しい。東大阪市山畑古墳群からは、ミニチュア炊飯具や釵子等の渡来系遺物は出土しておらず、石室の玄室平面プランも玄室幅指数の低い細長の長方形プランである。山畑古墳群の造墓集団については、むしろ在地的な集団が主体であったと考えられる。

次に平尾山古墳群では、平野・大県10－１号墳からＴＫ10型式古段階、６世紀第２四半期頃に位置づけられる子持器台が出土しており、本墳からはミニチュア炊飯具セットや金銅製釵子、銀製指輪も出土している。平尾山古墳群からは、現段階では配像付の装飾付須恵器は全く出土しておらず注意される。平尾山古墳群は1407基を数える大型群集墳である。釵子やミニチュア炊飯具、指輪を出土する古墳があることや、鉄鍛冶関連の副葬遺物から、文人や技術者の渡来系集団が主として造墓した群集墳と考えられている(安村2008)。

一須賀古墳群からは７例の子持器台が出土している。ＴＫ10古段階期の６世紀第２四半期頃に位置づけられるものがＢ８号墳・ＷＡ21号墳から、ＴＫ10新段階期の６世紀第中葉頃に位置づけられるものがＷＡ６号墳・ＷＡ17号墳から、ＴＫ43型式期の６世紀第３四半期頃に位置づけられるものがＡ９号墳・Ｌ４号墳から、ＴＫ209型式期の6世紀第４四半期～末頃に位置づけられるものがＢ１号墳から出土している。一須賀古墳群は総数262基の群集墳であり、石室玄室プランが方形に近いものが多く、釵子やミニチュア炊飯具セットを多く出土する。Ｂ７号墳からは金製垂飾付耳飾が、Ｄ４号墳からは金銅製釵子や金銅製飾金具が出土している。このことから、渡来系集団の造墓による群集墳と考えられる。

ここで注意されるのは、渡来系集団との関係の強い群集墳である一須賀古墳群、平尾山古墳群から出土する装飾付器台は、子持器台を主体とし、配像付の装飾付須恵器を出土していないということである。このことは何を示しているのであろうか。子持器台自体は、渡来系要素をもつ遺物ではない。しかしながら、発掘調査が比較的なされている一須賀古墳群や平尾山古墳群において、これまで配像付の装飾付須恵器が確認されていないとみられる点、特に一須賀古墳群では子持器台が多く副葬されている点に注視すると、やはり造墓集団のアイデンティティに関わる何らかの理由があったとみられるのである。平尾山古墳群は、百済出身の渡来人そのものの墓と推定されている５世紀後半に造られた高井田山古墳(安村2008)との関連性も注意される。このことから一須賀古墳群や平尾山古墳群においては、渡来系集団の出自に関わる何らかの理由で、配像付の装飾須恵器を副葬することが避けられた可能性が想定されるが、具体的な理由については、判然としない。ただ、一須賀古墳群や平尾山古墳群の造墓集団が、渡来系集団としてのアイデンティティを強く持った集団であったということは示す資料の一つであるということはいえるのではないかと考えられる。

一方、「高安千塚」では配像高坏形器台が長者の箸塚古墳から出土し、高安古墳群内周辺地域においては、子持器台と配像付の長脚壺の両者が出土している。特に「高安千塚」では、資料が極めて少ないが、一須賀古墳群や平尾山古墳群のように、子持器台のみを副葬するという限定性は認められない。「高安千塚」の造墓開始期の石室には、韓式系土器、ミニチュア炊飯具を副葬する郡川16号墳をはじめ、渡来系の要素が認められる。しかし、6世紀後半には、全体に渡来的な要素は認め

られなくなるようである。「高安千塚」においては、発掘調査例が他に比べて少ないため、今後の資料の増加を待たなければならないが、渡来系集団としてのアイデンティティが、一須賀古墳群や平尾山古墳群の造墓集団ようには強くはなく、造墓当初期の渡来系集団を核として、在地化が進んだ集団であった可能性が考えられる。「高安千塚」の造墓集団については、その石室規模が大きいこと、石室構築技術の高さ、また、石室規模に階層性があること等から、畿内政権と強い関係をもった中河内の有力集団に統括された渡来系集団の可能性を考えてきた(吉田2010)。今回の検討では、副葬された装飾付須恵器の種類の特徴から、「高安千塚」の造墓集団が強いアイデンティティをもった純粋な渡来系集団ではなかった可能性を考えた。

「高安千塚」の造墓集団を考えるための出土遺物の資料は少ないが、河内の四大群集墳をはじめとする他の群集墳との比較等を通じて、今後も検討を進めていきたい。

群集墳	総数	出土装飾付須恵器	渡来系遺物
山畑古墳群(東大阪市)	68基(本来100基前後か)	配像付装飾壺(山畑22号墳)・肩部に子器を付けた装飾付壺(山畑33号墳)	
高安古墳群集中地域(「高安千塚」)(八尾市)	226基	配像高坏形器台(長者の箸塚古墳(大窪・山畑58号墳))・壺等となる子器部片(服部川54号墳)	ミニチュア炊飯具・韓式系土器
高安古墳群周辺地域	79基	配像付装飾壺(伝恩智出土)・配像高坏形器台(大石古墳(楽音寺7号墳)・子持器台(黒谷13号墳・楽音寺8号墳)	
平尾山古墳群(柏原市)	1407基	子持器台(平野・大県10－1号墳)	釵子・ミニチュア炊飯具・銀製指輪
一須賀古墳群(太子町・河南町)	262基	子持器台(B8・WA21・WA17・WA6・A9・L4・B1号墳)	釵子・ミニチュア炊飯具・金製垂飾付耳飾・金銅製飾金具・指輪

河内の四大群集墳における装飾付須恵器

(注1) 柏原市立歴史資料館安村俊史氏のご教示による。

(注2) 八尾市教育委員会では現在学術上、高安千塚と称されている古墳が密集する部分も含め山麓の古墳群全体について高安古墳群の遺跡名を付しており、遺跡名の変更を検討しているところである。このため、本稿では便宜上、高安古墳群内の古墳集中地域は、鍵括弧付で「高安千塚」と称し、それ以外の部分は、高安古墳群内周辺地域と称している。

[参考文献]

中西克広　2006「山畑古墳群について」『ミニシンポジウム河内の四大群集墳』柏原市立歴史資料館

堀田啓一　1997「河内の双円墳について」『堅田直先生古希記念論文集』

安村俊史 2008『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂出版

山田邦和　1989「装飾付須恵器の分類と編年（上・下)」『古代文化』第41巻８号・９号

吉田野乃　2010「八尾市教育委員会における「高安千塚」の調査」『高安千塚シンポジウム記録集２』八尾市教育委員会

八尾市教育委員会 2007 『高安古墳群分布・測量調査報告書』

７.考察２ 河内四大群集墳とその周辺出土の須恵器高坏形器台の変遷について

本稿では、高安古墳群を含む四大群集墳（高安古墳群、山畑古墳群、平尾山古墳群、一須賀古墳群）とその近辺から出土している高坏形器台の変遷とその画期を考え、Ⅱ－３項において報告した器台１と器台２の時期について考察を行うことを目的としている。なお、高安古墳群については、「高安千塚」といわゆる集中地域と周辺地域に分かれるが、高坏形器台については、確実な集中地域の資料がないため、ここでは高安古墳群全体を検討対象とした。

まず、先行研究より高坏形器台の変遷についてまとめておく。高坏形器台の変遷を考察した論考は多くはない。そうした状況の中、山田邦和氏は装飾付器台の変遷を述べる際に、６世紀以降の装飾付須恵器の親器である高坏形器台の変遷像を示している（山田1998)。具体的には、脚部は時期を経るにつれ、長さが次第に細長く延びる。脚裾部は単に大きく開くだけのものから、裾部が鉢を伏せたような形に広がる傾向が強まり、最終的には脚部が矮小化する。鉢部は比較的浅いものから、深さが増す。文様の点では、波状文、カキメ、斜線文などの省略化が進む。山田氏は鉢部、脚部、文様の３点の型式変化の方向性を示している。高橋徹氏・小林昭彦氏は福岡県岩戸山古墳出土の器台を再検討する為に、器台の型式学的検討を試みている（高橋・小林1990)。両氏は高坏形器台と筒型器台のセットからなる器台様式を、ＴＫ73型式～ＭＴ85型式以降までの7段階に区分している。今回の検討においては、高橋氏、小林氏の検討を基本としている部分があり、以下に氏らの検討した７段階に設定したⅦ様式の内、高坏形器台の特徴についてまとめておきたい。

まずⅠ式とⅡ式（ＴＫ73型式）は形態差は少ないが、Ⅱ式はⅠ式より脚部が高くなり、脚下半がⅠ式より広がらない。Ⅲ式（ＴＫ208型式前後）は、Ⅱ式より脚部がやや長くなり、直線的にハの字状に広がる。脚端部は一度外に屈曲するものもある。脚端部の突帯は退化してほとんど消滅し、鋸歯文も施文されなくなる。Ⅳ式（ＴＫ23型式～ＴＫ47型式）は、外広がりの脚裾部で、短く内湾するものが現れてくる。この裾部で短く内湾する点は、Ⅳ式（ＭＴ15型式）において開始される重要な変化である。Ⅴ式（ＭＴ85型式以降）は、浅い坏部と長く延びた脚部は共通するが、脚部の形態はａ類とｂ類に大別される。ａ類は、古相の特徴を残し、その脚部は坏部との接合面から下方に向かって逆ハの字状に外反する。脚部も内湾することなく裾広がりになる。ｂ類は、坏部との接合面から比較的垂直に下がり、その下半部から裾広がりになる。Ⅵ式は前式の２系統が存在するが、両系統とも前式よりさらに脚部は延び、脚部中央で一旦細くなり、下半から脚部に向かって内湾気味に大きく裾広がりになる。Ⅶ式は前式とほとんど変わらないが、口縁端部が前式の三角形状のものから、鈍く丸くおさめたもの、短く垂直にあがるものが現れる。氏らの研究は、器台における編年研究の先駆けとして、貴重な成果であるといえる。

以下に先行研究で指摘された、変化の大きい脚部と鉢部に注目し、脚部の形態を３類に分類した上で、４段階の変遷案についての試案を示した（図18～20)。変遷案の検討にあたっては、高坏形器台に共伴する須恵器について、できる限り検討を行ったが、所属時期が不明瞭なものもあり、今後の検討で前後する可能性はある。以下、各段階の特徴をまとめている。

第１段階[ＭＴ15型式期]

ＭＴ15型式期以前の古い特徴を残すが、脚部の高さの比率が大きくなる。特徴としては直線的にハの字に開く特徴を残すものと、脚台部が明瞭な境をもつものがある。口縁部はやや外反するものと、斜め上方にのびるものがある。

第２段階[ＴＫ10（古）型式期～ＴＫ10（新）型式期]

ＴＫ10（古）段階については、資料が少なく、また全形が判る資料を欠いている。前段階の形を引き継ぐものがみられるが、脚台部の丸みがやや増す。ＴＫ10（新）段階になると、脚上半が直線的な筒状になり、脚台部のバリエーションが増える。口縁部も前段階とほぼ同様だが、端部を短

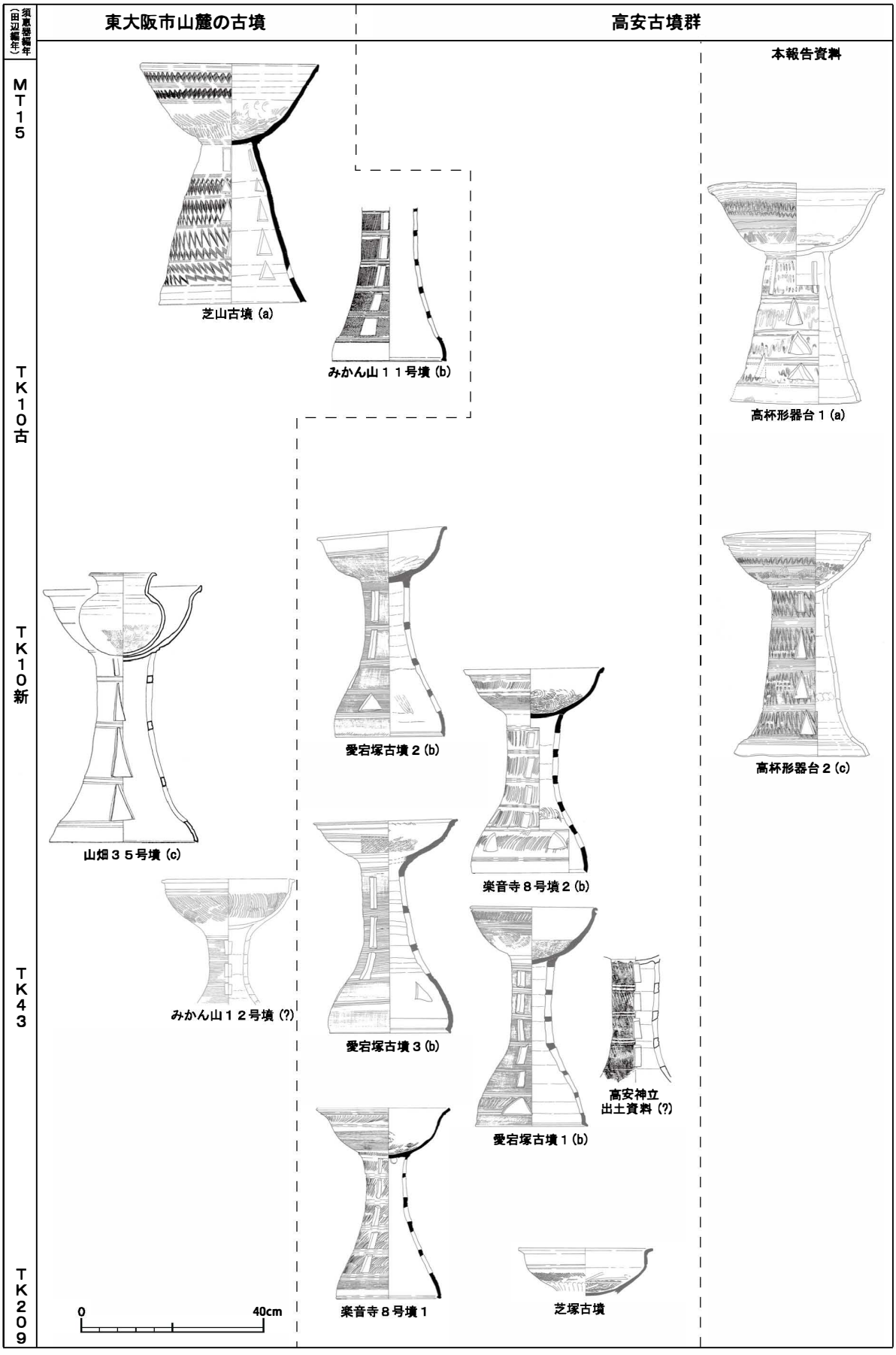

須恵器編年（田辺編年）
東大阪市山麓の古墳
高安古墳群
本報告資料
MT15
TK10古
TK10新
TK43
TK209
芝山古墳（a）
みかん山１１号墳（b）
高杯形器台１（a）
愛宕塚古墳２（b）
高杯形器台２（c）
山畑３５号墳（c）
楽音寺８号墳２（b）
みかん山１２号墳（?）
愛宕塚古墳３（b）
高安神立
出土資料（?）
愛宕塚古墳１（b）
楽音寺８号墳１
芝塚古墳
0
40cm

図18　器台の変遷図１

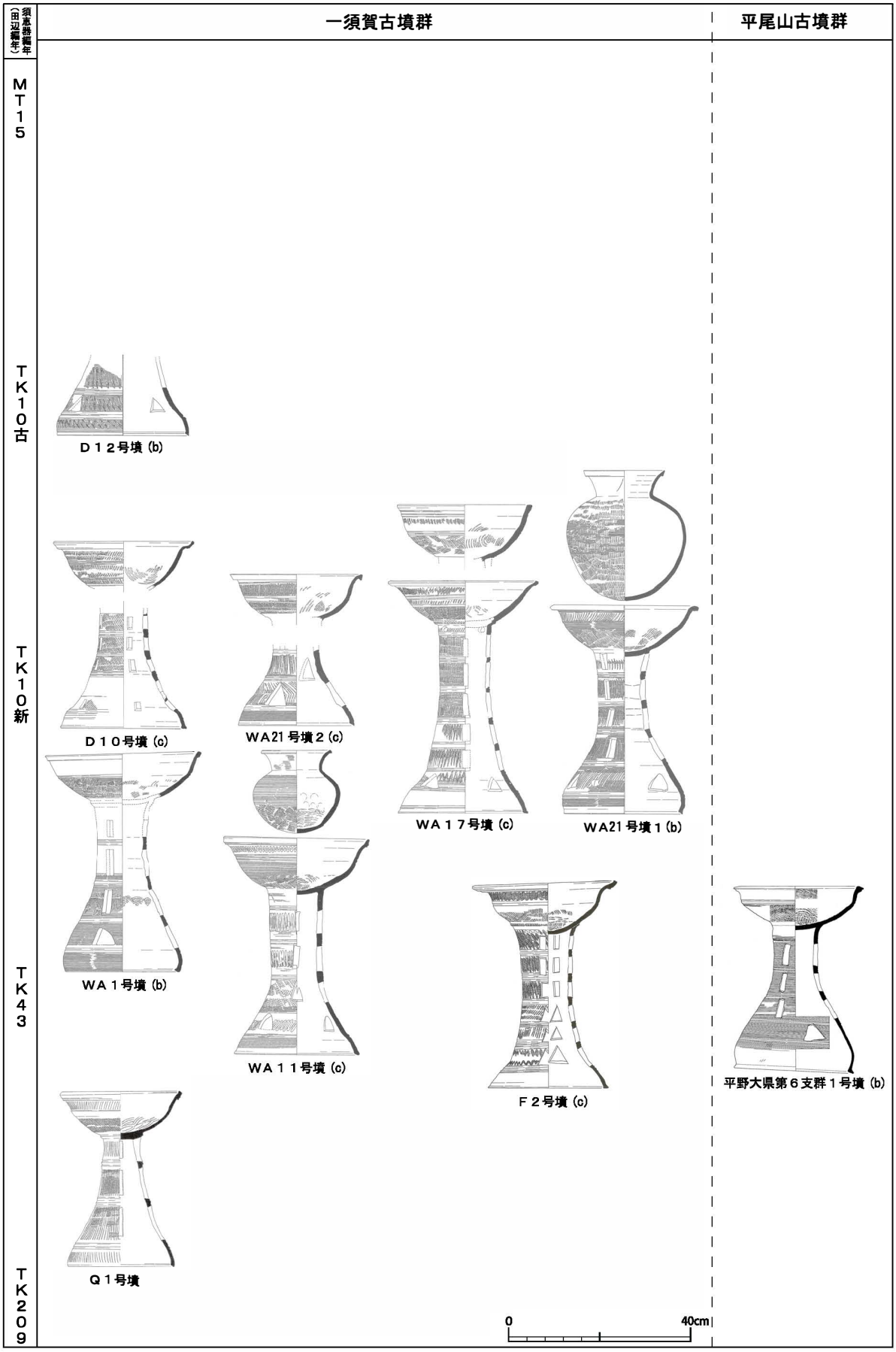

須恵器編年（田辺編年）
一須賀古墳群
平尾山古墳群
MT15
TK10古
TK10新
TK43
TK209
D１２号墳 (b)
D１０号墳 (c)
WA21 号墳２ (c)
WA１７号墳 (c)
WA21 号墳１ (b)
WA１号墳 (b)
WA１１号墳 (c)
F２号墳 (c)
平野大県第６支群１号墳 (b)
Q１号墳
0
40cm

図19　器台の変遷図２

く突出させるものがあらわれる。

第３段階［ＴＫ43型式期］

前段階に比べ、脚上半の直線的な筒状を呈する部分がさらに細くなる。口縁部は、前段階でみられた、端部を短く突出させるものが顕著になる。

第４段階［ＴＫ43型式期～ＴＫ209型式期］

全体的に小ぶりで、脚部は形態上の差がなくなり、鉢部との接合個所から緩やかに広がる。

以上示したように、４段階の変遷を見出すことができた。このなかで画期となる段階は、脚部が直線的に脚端部までいたるa類がなくなり、脚台部のバリエーションが増える第２段階であろう。また高橋氏、小林氏らのⅣ式の段階でみられた裾を短く内湾させる変化は、第１段階以降もみられ、この変化は高坏形器台の型式変遷のメルクマークになるであろう。

最後に以上の変遷に基づき、器台１と器台２の時期を考えてみたい。器台１は、脚部が鉢部との接合個所から直線的にハの字にのび、脚台部が僅かに内湾すること、口縁端部がやや水平方向に外反することなど、第１段階のa類に相当する特徴を有している。検討範囲では芝山古墳例に時期は近いものの、器台１の脚台部が僅かに内湾していることより、やや新しいであろう。器台２は、脚部が垂直気味に開き、１段目で外反し、脚台部が開き気味になること、口縁端部が短く上下に屈曲することなど、第２段階のc類に相当する特徴を有している。検討範囲では、山畑35号墳例の脚台部に近い特徴を有している。また、今回の検討では文様は除外しているが、脚部の各段に波状文を２段に分け施文している点等は、やや古い要素といえるだろう。

以上、高坏形器台の変遷を検討したが、高橋氏、小林氏の編年案と大枠は変わらないことを再確認した。ただ、両氏のⅦ式の段階をさらに分けることができ、脚台部の変化を追うことで、河内の四大群集墳を中心とする須恵器高坏形器台の変遷を捉えることができたと考える。

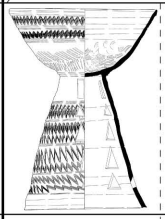
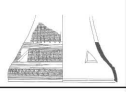
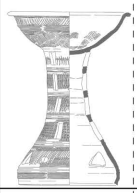
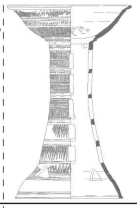
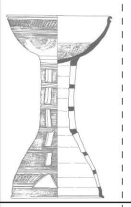
須恵器編年（田辺編年）	TK47	MT15		TK10（古）	TK10（新）		TK43		TK209
高橋・小林氏変遷案	Ⅳ式	Ⅴ式		Ⅵ式	Ⅶ式				
段階（案）	第１段階			第２段階			第３段階		第４段階
類	a		b	b		c	b	c	
									
出土古墳	芝山古墳	みかん山 11 号墳		一須賀 D12 号墳	一須賀 WA21 号墳	一須賀 WA17 号墳	愛宕塚古墳１	一須賀 WA11 号墳	一須賀 Q1 号墳
鉢部	口縁部断面は三角形状を呈し、斜め上方にのびる。				端部を丸くおさめ、水平に外反する。	端部は三角形状を呈し、口縁部端部が短く上方にのびる。	前段階とほぼ、同様だが外反する長さが短くなる。	前段階とほぼ、同様だが、端部が上方に屈曲する。	端部は外反するものと、斜め上方にのびるものがある。
脚部	鉢部接合個所から直線的にハの字に開く。	垂直気味にハの字に開き、脚台部は明瞭な稜線を境として垂直に屈曲する。		前段階とほぼ同様で、脚台部やや丸みが増す。	前打開に比べ上半が直線的な筒状を呈する。	上半が直線的な筒状を呈し、下半が直線的ないし、脚台部のみ下方に広がる。	上半がすぼまり、下半の広がりが、釣鐘状を呈する。脚台部との境は、ほぼなくなる。	前段階に比べ、より直線的な部分が増加し、一部に脚台部が角度を変更するもの。	脚台部の形態差がなくなり、鉢部との接合個所から緩やかにひろがる。

図20　河内四大群集墳の須恵器高坏形器台の変遷案

a類　脚部と鉢部の接合個所から直線的になるもの。
b類　脚台部との境に稜を持ち、脚台部が垂直気味、または内湾するもの。
c類　脚上半が直線的で、脚台部が１段目と開く角度を同一にするもの。
　　または、脚台部が角度を変えるが、内湾せずハの字にひらくもの。

［参考文献］

高橋徹・小林昭彦　1990「九州須恵器研究の課題-岩戸山古墳出土須恵器の再検討-」『古代文化』第42巻第4号

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』研究論集第10号

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

山田邦和　1989「装飾付須恵器の分類と編年」上・下　『古代文化』第41巻8・9号

Ⅲ．森田山古墳出土須恵器について

１．森田山古墳について

森田山古墳は服部川の一の谷の北側、通称「西の舞台」と呼ばれた場所に位置した古墳で（**図21**）、昭和９（1934）年５月17日に開墾により発見されたと記録されている。古墳の形は発見時にすでに破壊されていたため不明であるが、「付近に50cm～１m大のやや小型の石材が掘り出されており、小型の横穴式石室ないしは一種の竪穴式石室であったと知れるのみである」とされる（清原1976）。当時、須恵器瑯６点、把手付小型鉢１点、鉢１点、長頸壷１点、直刀が出土したと記録されているが、現在残っているのは、今回報告する瑯６点と把手付小型鉢１点、鉢１点の計８点のみである。

今回報告する資料は、八尾市の郷土史家、清原得巌氏が収集した資料で、八尾市立歴史民俗資料館が保管を依頼されている資料である。これらの資料は『大阪文化誌』通巻第６号（1976）で原田修氏らによって実測図・写真とも報告されている（原田ほか1976）が、今回本報告に掲載するにあたって、資料の再実測を行った。掲載順は、『大阪文化誌』通巻第６号の報告と同じ順で報告する。

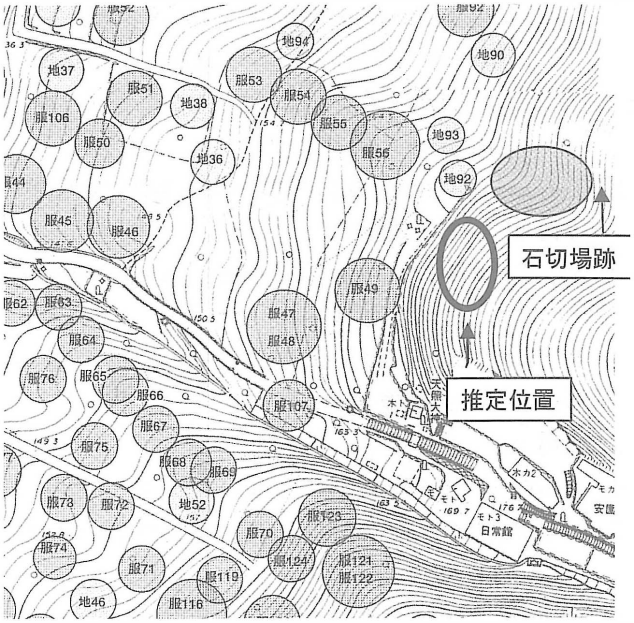


図21　森田山古墳位置推定図（吉田 2008）

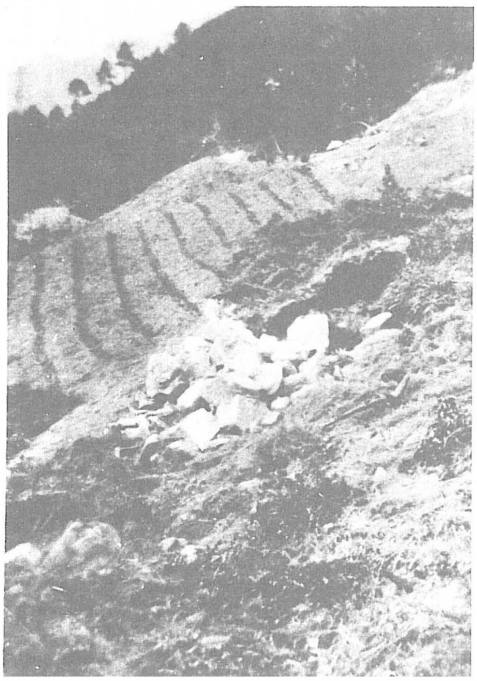


写真３　森田山古墳検出状況（南から）

２．出土須恵器の報告（図22）

１～６は瑯である。１は現存高6.5cm、最大径9.6cmを測る。体部は中位が張り出す球形で、穿孔部分に波状文を、その上下にカキ目を施す。２は残存高8.5cm、最大径10.0 cmを測る。肩部が張り出すやや扁平な球形の体部で頸部は外上方に伸びる。穿孔部分に列点文を、頸部には波状文を施す。３は現存高7.7cm、最大径11.2cmを測る。体部が大きく張り、扁平な球形をしている。体部中位にはカキ目が施されている。４は残存高6.5cm、最大径9.8cmを測る。１・２よりも肩部が張り出す。底部は不定方向のヘラケズリ、穿孔部分にやや崩れた波状文を施す。５は現存高7.6cm、最大径10.3cmを測る。１と同様体部は中位が張り出す球形で、穿孔部分には波状文、その上下にカキ目を施す。６は口径6.45cm、高さ9.3cmを測る。『大阪文化誌』の報告では、口縁端部が残存していなかったが、今回詳細に観察した結果、端部の一部が残存していることが判明した。短頸の瑯で唯一完形に近い資料である。体部は大きく張るやや

扁平な球形で、頸部は、わずかに外反しながら短く立ち上がり、端部は外傾する面をなす。底部は縦方向の強いナデ、中位は強い横方向のナデを施す。穿孔部分には櫛描文状の調整、頸部に波状文を施す。瑯は１～５の口頸部が欠損しており、６も口縁端部のほとんどが欠けている。葬送の際にわざと打ち欠いたものと思われる。

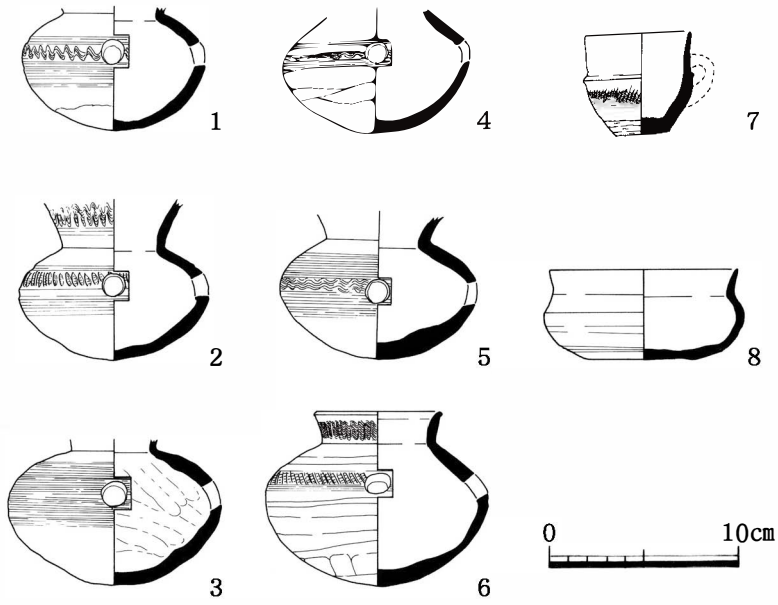


図 22　森田山古墳出土須恵器実測図（S=1/4）

７は口径5.6cm、高さ5.4cmの小型の把手付鉢である。平らな底部から体部は内湾しながら立ち上がる。中位に稜をもち、その部分からはほぼまっすぐ立ちあがる。把手部分は欠損しているが、接合痕が残っている。底部の調整はヘラケズリ、体部下半には波状文を施している。

８は口径9.8cm、高さ4.75cmを測る。『大阪文化誌』」では鉢もしくは盌と報告されているが、短頸壷とした方がよいだろう。底部は平らで、口頸部は外上方に開く。全体的にひずんでおり、上からみた形は楕円形に近い。底部は粘土紐巻き上げの痕跡が明瞭に残っており、作りは雑である。

以上、森田山古墳出土資料を８点報告した。森田山古墳出土資料はすべて洗浄が行われておらず、全体的に土が付着した状態である。そのため、調整が十分観察できなかった部分もある。

森田山古墳出土資料の時期について、最初に報告された原田氏は「須恵器が田辺昭三氏がⅠ期と称された型式に属し、周辺群集墳の形成開始期より若干遡る５世紀末頃のものと考えられ、」と５世紀末に比定されている（原田ほか1976）。また、「高安千塚の基礎的研究」で花田勝広氏は、「高安千塚の開始期は、森田山古墳と郡川16号墳で、前者を陶邑ＴＫ47型式」とされ、その時期を５世紀末に比定されている（花田2008）。

瑯は、６以外、口縁部が残存しておらず、明確には言えないが、再実測した結果、従来よりも若干古く、ＴＫ23型式期になる可能性を指摘できる。７は、もう少し時期がさかのぼる可能性もある。森田山古墳は高安古墳群で最も古い古墳の一つであり、築造時期は５世紀末～６世紀初頭とされてきたが、５世紀後葉までさかのぼる可能性を指摘できる。

［参考文献］

清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター（写真３を引用）

花田勝広　2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13　八尾市教育委員会

原田修・久貝健・島田和子　1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』通巻第６号　(財)大阪文化財センター

吉田野乃　2008「(付記) 森田山古墳と天神山古墳の所在地」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13　八尾市教育委員会（図20を引用）

種類	番号	器種	部位	径（cm）	全高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%)（口縁	備考
須恵器	1	壺	体部	最大径9.6	6.5	外面－底部はナデ。体部中位はカキ目後波状文。 内面－回転ナデ	青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	0%	
	2	壺	頸部～底部	最大径10.0	8.5	外面－底部はナデ。体部中位はカキ目後列　窟　頸部に波状　文　内 面－回　　転	青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	0%	
	3	壺	頸部～底部	最大径11.2	7.7	外面－底部はナデ。体部にカキ目。内面－ナデ。	青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	0%	
	4	壺	体部	最大径9.8	6.5	外面－下半は不定方向のケズリ。中位はカキ目後波状文。内面－ナデ	青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含む	0%	
	5	壺	頸部～底部	最大径10.3	7.6	外面－底部はナデ。カキ目後波状文。　　内面－ナデ	暗青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	0%	
	6	壺	口縁部～底部	口径6.45	9.3	外面－底部は縦方向のナデ。体部下半はナデ。中位に櫛描文状の調整、頸部に波状文。 内面－回転ナデ	暗青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	95	
	7	把手付鉢	口縁部～底部	口径5.6	5.4	外面－回転ナデ。底部はヘラケズリ。　　内面－回転ナデ。	青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	100	
	8	短頸壺	口縁部～底部	口径9.8	4.75	外面－回転ナデ。底部ナデのみ。内面－ナデ	暗青灰色	良好	密	1～2mmの砂粒を少量含	100	底部には粘土紐痕が明瞭に残る。

Ⅳ．服部川支群　西舞台出土金銅装大刀について

１．金銅装大刀・耳環の調査経緯

「Ⅰ．平成 22 年度　高安古墳群出土遺物整理調査の概要」で述べたように、平成２年８月に八尾市立歴史民俗資料館に寄贈された高安古墳群　服部川支群西舞台出土の本資料は、長らく寄贈された時のまま、柄頭部分の破片を収めた木箱と、おそらく鐔から刀身の部分を収めるために作られた細長い木箱の２つに分けられたまま、保管されていた。箱の状態からすでに寄贈時に柄頭と鐔から刀身部分は、遊離していたことが分かる。

平成 21 年度に行った資料調査時に、金銅装であることはわかったが、装飾付大刀の種類を判断できる柄頭部分はばらばらで細片化しており、その形状は明らかにできなかった。また、柄頭及び柄間部分の木質等は残っていなかったようである。金銅製の柄縁金具で固定された無窓鐔は茎部が途中で折れており、同じく金銅製の鎺に若干の刀身があったが、刀身は途中で折れていた。刀身自身もばらばらの状態で、錆の進行がひどく層状に剥離し、粉状になっている部分もあった。保管時に刀身を固定していたと思われる紐があったが、固定できている刀身はほとんどなかった。鞘は木製と考えられるが、木質部もほとんど残っておらず、刀身に部分的な付着にとどまっていた。また、鞘口金具や鞘尻金具、足金具等は残っていなかった。大刀については、早急な保存処理が必要であることがわかった。同じ所有者から同時期に寄贈された耳環２点についても、錆が進行しており同じく保存処理が必要であった。

そこで、平成 22 年度に高安古墳群出土遺物の整理調査に併行して、同じく国庫補助事業として、これら金属製品の保存処理事業を行うことした。保存処理の過程で柄頭の箱内にあったほぼすべての破片が接合でき、金銅装圭頭大刀の柄頭であることが明らかとなった。また刀身部の接合もできるだけ行ったが、１本の刀身に接合できなかったため、大刀全体の復元的な考察も含めて今回報告するものである。なお、保存処理の方法、保存処理に合わせて行ったＸ線写真・成分分析の結果は、別途報告予定である。

２．金銅装圭頭大刀について

今回報告する圭頭大刀は、責金具、鐔、鎺を装着した刀身と、柄頭が別個の木箱に保管されていたものである。どちらも遺存状態が非常に悪く破片化していたが、保存処理の結果、刀身については全長を復元しうる５点の破片と部位不明の小片に、柄頭についても本来の形状に近い形にまで接合できた。以下、柄頭から切先方向に向け、部位ごとに観察した結果を詳述する。

１）各部位の観察（図 23・24）

柄頭（１）１は柄頭である。打ち出しにより成形した銅板を両側から挟み、圭頭形の柄頭を作っている。頭頂部内面を観察すると、両側の銅板の合わせ目を長軸に沿った一条の線として確認することができる。Ｘ線写真でも、やはり銅板の合わせ目を確認できる（図版 12－10）。ただし、鍍金時の研磨によるためか、柄頭外面では銅板の合わせ目や蠟付けした痕跡は確認できない。柄頭全体は長さ 7.0 ㎝、最大幅 4.8 ㎝、厚さ 2.8 ㎝である。柄頭の佩表側の中央には、三分の二程度が欠損するものの懸通孔がある。佩裏側は完全に欠損しているが、対応する位置に穿たれていたのであろう。鍍金はこの懸通孔の断面にまでわたっている。復元しうる懸通孔の直径は約１㎝である。なお、接合しない小片ではあるが、懸通孔が一部残存している資料がある（1´－a）。こちらの資料も断面に鍍金がなされている。

また、柄頭の固定金具として責金具を確認している。残存長 2.9㎝、幅 0.3 ㎝、厚さ 0.15 ㎝の破片ではあるが、内面の円弧が柄頭下縁のそれと一致し、同じ木箱に収められていたことから、柄の責金具と判断したものである。なお、柄木本体や、責金具と共に柄頭を固定する木釘、鵐目等の金具は資料中に含まれていなかった。

刀身（２～６）２は茎の先端部である。後述する茎元周辺とは別破片になっていた。しかも茎元周辺に比べて厚いため、別個体である可能性も考えられた。しかしながら、一つの木箱に入れて保管されていたこと、破片中に茎に当たるものが他に見当たらないことから、別個体が混入している可能性は低く、

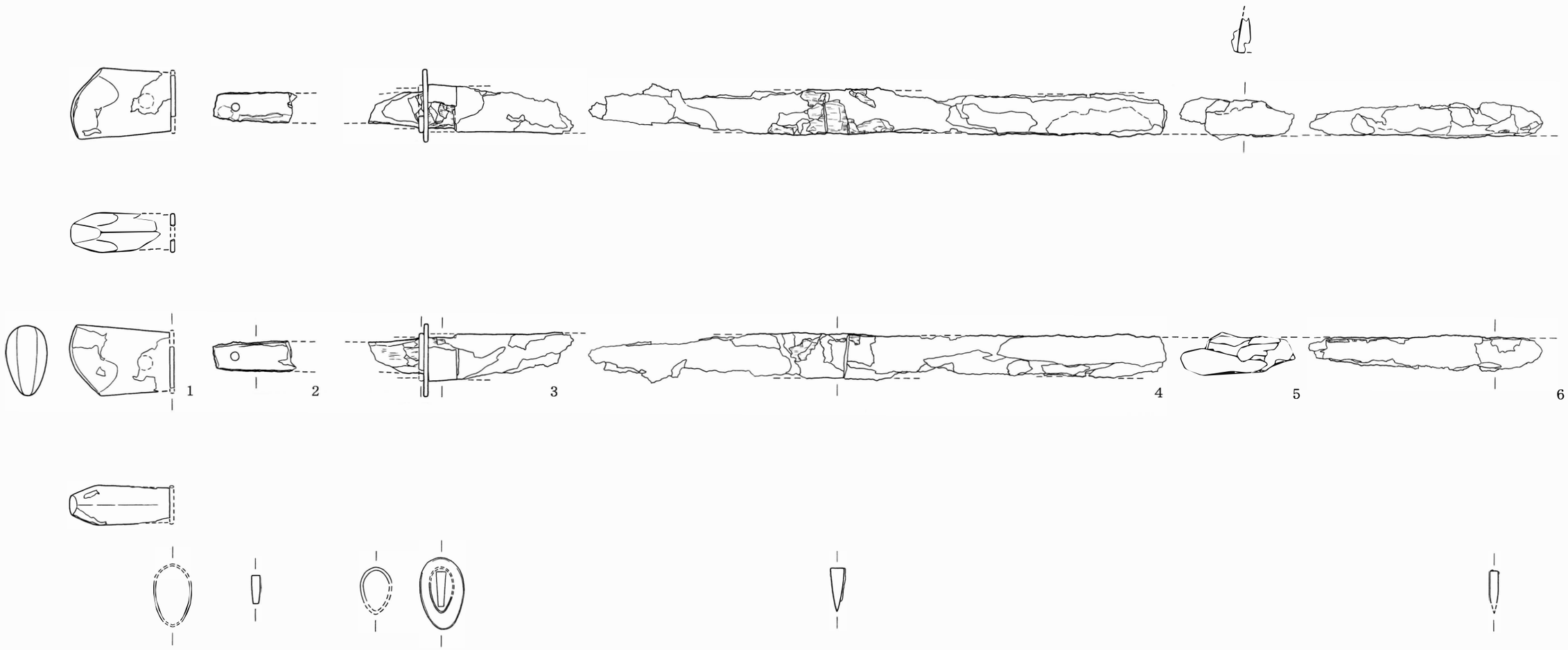


図23　圭頭大刀実測図 1 (S＝1/4)

厚みは錆膨れによるものと考え、同一個体と判断した。そこから復元される茎は、わずかに先細りしながら伸びる一文字尻である。茎尻には直径5.5㎜の目釘孔があけられている。これ以外にも目釘孔が存在した可能性があるが、本資料は茎の中間を欠損しているため、本来の形状は不明である。

3は茎元周辺から刀身にかけての破片である。責金具（柄縁金具）と鐔、鎺が装着されている。これらの装具はいずれも金銅装である。鐔は倒卵形の平面形をした無窓鐔で、その縁は丸く仕上げられている。長径5.1㎝、短径3.1㎝、厚さ0.3㎝である。また、切先側から見て反時計回りに、鐔の主軸が僅かに佩裏側にずれている。ただし、これは柄木の腐朽によるものとも考えられ、本来は刀身と鐔が主軸を揃えていた可能性が高い。鐔の柄側には、責金具がはめられている。この責金具は腹側を欠損しており、全体の半分程度しか遺存していない。しかしながら、鐔に責金具が当たっていた痕跡が、緑青の生じた部分として残されており、本来の形状や大きさを復元できる（図版 13－12）。すなわち、その平面形は鐔と同様、倒卵形である。大きさは長径3.3㎝、短径2.2㎝、幅0.3㎝、厚さ0.2㎝である。

鎺は背側を欠損しているが、腹側は良く遺存している。本資料の鎺は、切先側に蓋が付けられるタイプのものである。鎺が欠損している背側においても、直角に0.2㎝程度切り込まれた背側の関から茎口に沿って蓋の残欠が遺存している。なお、X線写真によると、腹側にも関の存在が確認できることから本資料は両関である（図版 13－17）。一方で、腹側の鎺と刃部との間には明瞭な段差が認められないことから、欠損した背側も本来は同様の構造をしていた可能性が高い。すなわち、鎺の長径と刀身幅は、両者の接点でほぼ等しかったことになる。そこから復元される鎺の形状は、鐔、責金具と相似形の倒卵形である。長径3.25㎝、短径1.75㎝である。

4～6は刀身の一部である。破片4は背幅が後述する破片6のそれより厚いため、少なくとも6よりは鐔側に位置する破片であることが分かる。さらに、4、6は両面で錆の色調が異なっており、両者共に淡色と暗色の面を観察できる（図版 10－1，2）。したがって、4と6の同じ色調の面が、本来刀身の同一面であったと判断した。すなわち、佩表側が淡色、佩裏側が暗色を呈している。さらに、破片5は背から片側側面の一部しか残存していない資料であるが、側面に礫の錆着が見られる。同様に破片4の佩裏、切先側の一部で、石室床面で付着したと考えられる礫の錆着面が見られることから、両者は本来一連のものであったと判断できる。このことから、破片5を破片4と6との間に、残存する側面を佩裏側に位置付けることができる。なお、礫の錆着が佩裏側に限られることから、副葬時はこちらの面を下にしていた可能性が高い。

以上のことから、復元した刀身の全長は約93㎝、茎長約17㎝、茎尻幅1.45㎝、刃部長さ約76㎝、刃部幅3.0㎝、背幅は刀身半ばで1.0㎝、切先付近で0.6㎝である。これ以外にも刀身の小片が遺存しているが、刀身中の位置を特定するには至らなかった（7）。刀身の切先は欠損しており、フクラ形かカマス形かは判断できない。なお、茎元周辺と刀身半ばに比較的まとまって、木質が遺存している。特に刀身半ばの鞘の木質には、刀身に直交して亀裂が走る部分があり、ここに足金具等の装具が装着されていた可能性がある（図版13－16）。

2）年代について

圭頭大刀を始めとする装飾付大刀は、装具自体やその組み合わせから時期的な位置付けを与えられる場合が多い。しかし本資料は、鞘尻や柄間金具等、年代の指標となる装具をすでに失っており、詳細な年代を知るには材料不足な嫌いがある。ただし、遺存している鐔周辺の装具や柄頭等から、ある程度の時期を限定することは可能と思われる。そこで、これらの材料から、本資料の年代について考えてみたい。

圭頭大刀の年代については、滝瀬芳之氏や菊池芳朗氏による分類・編年研究がある（滝瀬1984、菊池2010）。滝瀬氏の編年は、刀装具の細かな分類とその組み合わせから圭頭大刀を分類し、伴出須恵器によりその年代を求めたものである。装具の組み合わせというその方法論からして、本資料を当てはめるには困難が伴うが、氏の言う「無窓鐔二足佩用圭頭系」には収まるものと思われる。その存続期間は、TK43～TK217型式期である。したがって、「無窓鐔二足佩用圭頭系」は圭頭大刀の存続期間を通じて存

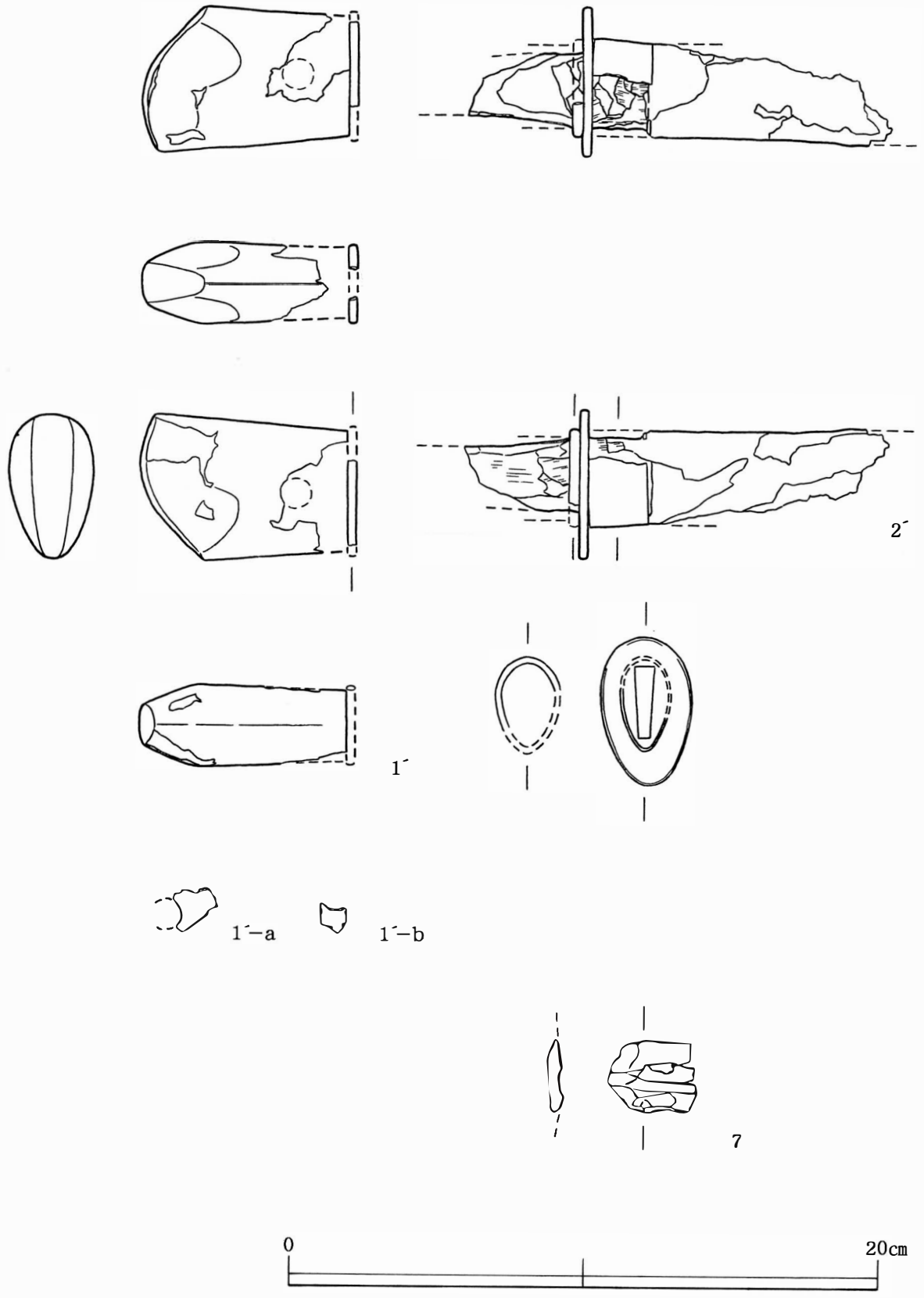


図24　圭頭大実測図 2 (S＝1/2)

在したことになり、本資料の年代を限定するには至らない。

一方で、菊池氏の編年は、本資料のように頂部の腹側と背側に顕著な高低差のある形態の柄頭を対象とし、柄頭頂部の腹側近くの抉りが、次第に内反度を弱くしていくことから３時期に区分したものである。しかしながら、この菊池氏の編年は、外郭と内郭から構成される柄頭を対象としており、厳密には本資料の柄頭とは異なる。ただし、外郭・内郭の構成を取るか、本資料のように袋状となるかの相違はあるものの、菊池氏が編年で扱った柄頭の系統と、本資料のそれとは平面形が共通しており、同様な型式変化を辿っている可能性が高い。菊池編年に本資料を当てはめるならば、頂部腹側近くの抉りがほとんど認められないことから、最も新しい段階に位置付けられる。したがって、その年代は新納泉氏の装飾付大刀編年の第９段階以降、須恵器型式で言えばＴＫ209～ＴＫ217 型式期となる（新納 1987）。

このほか、圭頭大刀の年代に迫ることができる資料として、責金具の形状、装具の材質を挙げることができる。菊池氏によれば、本資料のような断面蒲鉾形の責金具の出現は、新納編年第７段階のことである。この形状の責金具は、断面三角形や台形の環体外面に稜を持つ責金具の出現まで、７世紀を通じて用いられた。また、装具の材質については環頭大刀の変遷から、銀を多用するものが古く、金銅のみを用いるものが新しい傾向があるという（町田 1976、穴沢・馬目 1979）。本資料の刀装具は全様が不明ではあるが、銀と金銅が併用される事例は少ないことから、金銅装の装具のみ用いられていた可能性が高い。よって、これらの装具の特徴は、先に柄頭の形態から想定した年代と矛盾しない。

本資料の類例としては、伝群馬県内出土品と大阪歴史博物館所蔵品（考 6063 刀）がある（徳江 1992、加藤他 2006）。どちらの資料も、抉りのない袋状の柄頭と、無窓鐔を始めとする金銅装の刀装具を装着する点で本資料と共通している。加えて、この２点の圭頭大刀は鞘尻や柄間金具が良く遺存している。しかも、金属板巻柄や丸尾の鞘尻金具を持ち、足金具を持たないこと等、装具自体やその組み合わせが共通している。したがって、本資料も本来は、これらの装具を装着していた可能性が高い。また、類例の時期的な位置付けについては、どちらも来歴不明の資料であることから詳細には知り得ない。ただし、装飾付大刀全体の変遷としては、柄に金属線を巻くものが古く、類例のように金属板を巻くものが新しい（小林 1986）。

以上の検討から、本資料の年代は、圭頭大刀の存続期間である６世紀後葉から７世紀前葉の中でも比較的新しい段階、すなわち７世紀初頭から前葉に位置付けるのが妥当と考える。

［参考文献］

穴沢咊光・馬目順一　1979「郡川市牛庭出土の銀作大刀」『福島考古』第 20 号　福島考古学会

加藤俊吾・伊藤幸司・福田さよ子　2006「大阪歴史博物館所蔵の装飾大刀 - その保存処理作業にともなって -」『大阪歴史博物館　研究紀要』第５号　大阪市文化財協会

菊池芳朗　2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会

小林行雄　1986「古墳時代の大刀」『研究紀要』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

滝瀬芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

徳江秀夫　1992「上野地域における装飾付大刀の基礎調査」『研究紀要 10』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

新納泉　1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第３号　考古学研究会

町田章　1976「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ・奈良国立文化財研究所

３．耳環について

以下に報告する２点の耳環は、圭頭大刀と同じ所有者から同時期に寄贈されたものである。大刀と同様、錆が進行しており保存処理が必要であった。

１）耳環（図 25）

耳環１（８）側面は全体が緑青に覆われ、部分的に金色を呈する部分がある。縦方向の径 2.49 ㎝、横方向の径 2.70 ㎝、断面の径 0.55 ㎝を測る。本資料は金色部分の大半が剥離しており、銅芯であることがわかる。さらにＸ線写真やその重さから、中実であると判断できる。また、金色部分は比較的厚みを持っているようであり、鍍金によるものと言うよりは、金板貼に近い特徴を有している。

保存処理時の蛍光Ｘ線分析に基づく伊藤幸司氏の所見では、「金色部分は非常に高濃度の金から成っていること、芯材はほぼ純銅であること」から、「銅芯に金の薄板を貼ったもの」とされている。水銀の検出量が皆無であることからしても、鍍金がなされた可能性は低く、本資料は渡辺智恵美氏の名称によれば銅芯金板貼製であると判断できる（渡辺 1997）。

耳環２（９）側面は黒褐色を呈し、部分的に緑青が認められる。縦方向の径 2.78 ㎝、横方向の径 3.17 ㎝、断面の径 0.8 ㎝を測る。Ｘ線写真や重さから、中実であることが分かる。側面の色調から判断して、銀の使用が想定される。また、緑青は黒褐色部分が剥離した箇所や亀裂に生じているため、本資料は銅芯である可能性がある。

伊藤氏の所見では、「非常に高濃度の銀と、少量の銅を検出している」ことから、銀製であることは間違いないとされている。一方で、「金の検出量が比較的多く、また水銀も夾雑物（不純物）とするには多いように思われる」ことから、銀芯に鍍金された可能性も指摘されている。ただし、伊藤氏も指摘されるように、銀芯に鍍金された耳環の類例は皆無である。したがって、伊藤氏の自然科学的分析も踏まえたうえで、本資料の材質を判断するならば、銅芯に銀板を巻き、その上に鍍金を施した銅芯銀板貼鍍金製である可能性が最も高い。ただしその場合、鍍金は全て剥離したことになる。

以上の観察によると、これら２点の耳環は法量、製作技法ともに異なっており、一対で使用されたものとは考えにくい。したがって、本来は個々に対を成す資料が存在したのであろう。

［参考文献］

渡辺智恵美　1997「耳環小考 - 製作技法、材質からみた分類 - 」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所

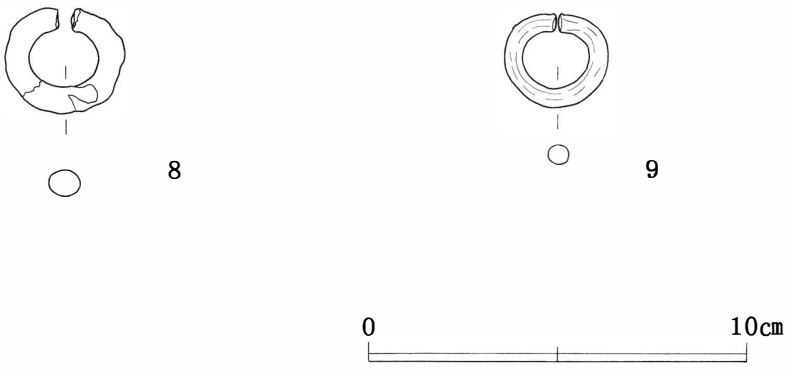


図 25　耳環実測図（S=1/2）

４．金銅装圭頭大刀・耳環の出土古墳の検討

１）新聞記事の検討

今回報告した「服部川支群　西舞台出土金銅装大刀」についての初見は、昭和33年刊行の『八尾市史(旧版)』(八尾市史編纂委員会編1958)で、執筆した西岡三四郎氏によると「服部川　森田山から圭頭の柄頭のついて（※原文ママ)、外装の金具が残っているのが出土した。」とある。出土した古墳の内容や状況等は不明であるが、すでにこの段階で圭頭大刀であることが知られていたことが分かる。しかし、これ以後、この大刀について記載された資料はなかった。

今回保存処理を行い、往時の姿に復元できた圭頭大刀及び耳環が出土した古墳を考えるために、大刀類の寄贈者が出土当時の様子を伝えるものとして合わせて寄贈いただいた新聞の切り抜き記事(**資料１**)をまず検討する。この新聞記事はこれまで存在が明らかでなく、大刀類の出自を知る上で重要な資料であった。しかし、資料調査当初、新聞記事が書かれた年代や日付が分からず、大刀類がいつ出土したものかは不明であった。そのため、高安古墳群の研究史に詳しい松江信一氏にこの新聞記事を見ていただいた。松江氏は、新聞記事にある発見日の「十七日」と地元の研究者である清原得巌氏が鑑定したとの記事に着目された。清原氏が後に報告（清原1976・以下「清原報告」と呼称）した同じ高安古墳群の服部川支群にあった森田山古墳の発見日である昭和９年（1934）５月17日との日付の一致を手がかりにして、発見日の翌日にあたる５月18日の「朝日新聞　大阪地方版」の記事であったことを確認され、ご教授いただいた。この新聞記事の大刀類の発見年月日の解明により、出土古墳は、市史に書かれた出土場所の「森田山」が「森田山古墳」である可能性が明らかになったのである。

以上のことから、金銅装大刀の出土古墳が森田山古墳であったことを検証していきたい。

考古學上に
有力な資料
高安村の山林中から
劍や高坩など

中河内郡高安村服部川村和三郎
氏は自己所有の同村西舞台の山林
を開拓中、十七日地下百尺のあた
りから長さ二尺三寸の直刀一本、
高さ一尺五寸、直徑五寸の祝部式
高坩一個をはじめ金環一個、有蓋
平杯の破片などを發見したので直
に同村の考古學者清原得巌氏の鑑
定を求めたところ、右は何れも約
千四百年以前のもので貴重な史料
であることが判明した、殊に刀
劍についてゐる鍍金のハート型鍔
の如きは燦然たる光りを放つてゐ
るが、これなどは今まで例をみな
いものである、右につき清原氏は
語る
本村はその昔漢の貴族が歸化し
て住んだ土地で文化が進んでゐ
たことは史實に徴して明かであ
る、これは相當貴人の古墳であ
ることは刀劍、金環、土器など
で考へられる、刀劍の裝飾が比
較的完全に殘つてゐることも珍
らしい

小麥と菜種の
販賣統制協議
豐能の廿町村

豐能郡で細河、止々呂美二村を除
く二十ヶ町村では、本年度から府
當局の方針に從ひ小麥、菜種の販
賣統制に全力を盡すことゝなり六
月中左の日割で農務課員、府、郡

白濱湯崎溫
每土曜黑潮列車
大阪より往復五
双子島遊覽
新和歌浦より
食事付遊覽券　三圓

資料１　大刀類とともに寄贈された「大刀出土」を伝える新聞記事

（新聞記事の書き下し）

考古學上に有力な資料　　高安村の山林中から剣や高坩など

中河内郡高安村服部川川村和三郎氏は自己所有の同村西舞台の山林を開拓中、十七日地下百尺のあたりから長さ二尺三寸の直刀一本、高さ一尺五寸、直径五寸の祝部式高坩一個をはじめ金環一個、有蓋平杯の破片などを發見したので直に同村の考古學者清原得巌氏の鑑定を求めたところ、右は何れ

も約千四百年以前のもので貴重な史料であることが判明した、殊に刀劍についてゐる鍍金のハート型鍔の如きは燦然たる光を放つてゐるが、これなどは今まで例を見ないものである、右につき清原氏は語る

本村はその昔漢の貴族が歸化して住んだ土地で文化が進んでゐたことは史實に徴して明かである、これは相當貴人の古墳であることは刀劍、金環、土器などで考へられる、刀劍の装飾が比較的完全に残ってゐることも珍らしい

［朝日新聞　大阪地方版　昭和９年（1934）５月 18 日］

２）新聞記事から分かること

①出土場所（古墳）　出土場所は「西舞台の山林」とあり、森田山とは記載されていない。高安古墳群の服部川支群に位置し、西舞台の字が残る場所である。しかし、字名の場所は山林のため広範囲に及び、古墳の特定は困難である。西舞台の名が示すとおり、石室の石材が舞台のように露出した場所であったと考えられる。また、発見場所の深さは「地下百尺のあたり」とあるが、約30mの深さとは考えにくく、墓の底からという例えとして記されたと考えられる。

②大刀の状態　出土した直刀の長さは「二尺三寸」とあるが、現在の長さで約70㎝となる。今回報告した金銅装大刀が復元長約93㎝であるが、圭頭の柄頭と茎部がすでに発見時に折れていたと考えると、鍔から刀身の長さとほぼ一致する。また、金銅装の鍔のハート型という形状もほぼ一致しており、新聞記事にある大刀と今回の報告した大刀が同一のものであることは間違いない。

③共伴した遺物　大刀とともに出土した「高さ一尺五寸、直径五寸の祝部式高坩」とは、高さ約45㎝、直径約15㎝の須恵器の大型の坩もしくは壷であると考えられるが、法量のバランスに欠けるため、脚付の壷等の可能性がある。そして、「金環一個、有蓋平杯の破片」とあるのは、金環は、今回報告した耳環のうちの一つ（**図25-8**）である。有蓋平杯は、平成21年度に資料報告している八尾市立歴史民俗資料館所蔵の須恵器の坏蓋（八尾市教育委員会編2010・10頁 第８図２を再掲・**図26**）である。大刀と同じ所有者から同時期に寄贈を受けた土器で、これにあたる可能性が高い。

④清原氏の鑑定　清原氏が大刀等を鑑定し、約1400年前、約６世紀以前のものとし、大刀の評価やこの地域の渡来人の存在を指摘したことは当時の大刀や古墳の年代観を知る上で興味深い。さらに、清原報告と森田山古墳の発見の顛末と重ねて考えてみると、発見日とされる５月17日に現地の森田山古墳を清原氏が確認している。翌18日には早くも大刀類の発見の記事と清原氏の所見が新聞に掲載されていることから、現地に記者を伴った可能性はないだろうか。想像の域を超えないが、『大阪文化誌』に掲載された森田山古墳の写真（**写真５**）は記者が撮影した可能性もある。

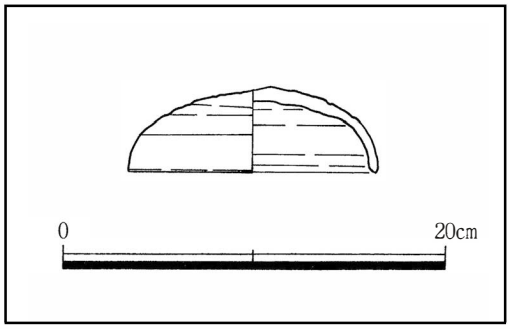


図26　須恵器・坏蓋（八尾市教委編2010）

３）新聞記事と清原得巌氏の報告との比較

先述したように、森田山古墳の内容については、古墳が破壊された時に現地を確認した清原報告がくわしい。石室は、完全に近いほど破壊され、その原形を知るすべがなく、付近に50ｃｍから1m大の小型の石材が掘り出されていたとのことである。

清原報告では、森田山古墳からの出土品を「須恵器　瓩六・把手付小型鉢一・盌（鉢）一の他、長頸壷一・直刀」としている。新聞記事と比較すると、清原報告がより詳しく土器の構成について記載している。新聞記事にない前段の須恵器８点については後述するが、後段の長頸壷は、新聞記事の「祝部式高坩」にあたると考えられる。しかし、直刀のくわしい内容の記載はない。直刀は金銅装大刀を示すも

のと考えられるが、自ら鑑定した銅鏃的な金属器大刀についての一切の記載がないのは疑問として残る。また、清原報告には、新聞記事にあった金属の存在は記載されていない。清原報告は出土から40年後の年月を経た時期に書かれたもので、新聞記事も清原報告も基本にして考える必要があろう。

前述の鏃を中心とする銅鏃8点は清原氏が所蔵しており、今回再実測したものである。『大塚古墳』で原田氏らにより資料紹介（原田他1978）されているが、その他の出土資料の所在は不明としている。そのうちの一つが、現在所在の不明な鉄鏃であると考えられる。今回の資料調査にあたり八尾市立歴史民俗資料館に保管されている桑田山古墳の銅鏃8点を発見したところ、注記の時期は明らかでないが、すべての銅鏃に清原氏によるものと考えられる出土状況等を記した注記（以下「清原注記」と呼称）が確認できた。特に詳しく書かれていたのが写真4である。

写真4左を見ると、「銅鏃半矧　昭和九年五月十七日発掘　コノ土器　鏃　七個同時　出土ソノ使用ニ参考　高安　桑田山古墳　通称　西ノ舞台　横穴　鉄金刀剣伴出　他ニ高盃一個」とある。この注記から明らかなように、出土古墳名が「桑田山古墳」で、通称「西ノ舞台」と呼ばれている「横穴＝竪穴（石室）」から、これらの土器とともに「鉄金（鉄金）刀剣伴出」、つまり金属製大刀が土器と共に出土していたことがはっきりと判記されている。

また、写真4左の「出土ソノ使用ニ参考」や、写真4右の「同一個所ヨリ八個伴出　内　半矧六個　参考保存　清原蔵」の注記は、所有者から参考資料として譲り受けたことを示すものであろう。

出土当時の状況は不明であるが、清原注記の内容から考えると、銅鏃8点のみを出土直後に所有者から入手し、早い段階で注記したものと考えられる。その他の大刀や耳環などは所有者が発見以降、保管されてきたものである。

以上のように、新聞記事を基本として、銅鏃に書かれた清原注記の内容から明らかなように、これら金属製品（大刀や耳環）とも舞台出土と伝えられてきたものは、すべて桑田山古墳（横穴式石室）の副葬品であった可能性が高いことがわかった。

写真4　鏃（左：報告Ⅱ-8・右：報告Ⅱ-4）表面

4）桑田山古墳の副葬品と古墳の年代

①副葬品の組成　これまでに明らかにできた新聞記事及び清原報告、写真資料の内容から、桑田山古墳の副葬品の組成を整理すると下記のようになる。

・土器：須恵器　鏃　8点（図22-1～8）・把手付椀　1点（清原注記：小杯・図22-7）・提瓶　1点（清原注記：壺・図22-6）・清原氏所蔵資料
　杯蓋　1点（図26）・寄託資料

長頸壷（新聞記事：祝部式高坩、清原注記：高壷）・所在不明

・**大刀**：金銅装圭頭大刀　１振（**図23・24-1～7**）・寄贈資料

・**装身具**：金環　１点（**図25-8**）・銀環　１点（**図25-9**）・寄贈資料

②古墳の年代　今回報告した出土遺物の年代から、森田山古墳の時期を考えてみることにする。まず、須恵器であるが、清原資料８点は一括資料と考えてよく、５世紀後半のものである。そして、坏蓋の時期はＴＫ43型式のもので、６世紀後葉のものである。坏蓋は、圭頭大刀の７世紀初頭～前葉という年代観からはやや古いものであるが、大きく乖離するものではなく、同時期の副葬品と考えてよい。

このように須恵器と大刀の年代から時期差があり、はっきり２時期に分かれている。さらに耳環も２対あることから、複数の被葬者が考えられる。以上のことから、古墳構築と須恵器・瑯を伴う初葬を５世紀後半、そして年月を経たおよそ100年後の７世紀初頭～前葉に金銅装圭頭大刀を持つ被葬者が追葬されたと考えたい。初葬と追葬の時期が大きく離れている点について考えるため、まず森田山古墳の所在地、そして高安古墳群で最も古い古墳のひとつと考えられるその埋葬施設構造を検討してみる。

５）森田山古墳（服部川134号墳）の再検討

①所在地の再検討　原田氏らの資料紹介では、土器類の発見者は土地所有者の森田氏としているが、発見者は新聞記事にあるように発見者は、別の所有者であった。森田山古墳の古墳名は、以前の所有者の名前を冠した山を呼称したものとしてとらえた方がよい。森田山古墳の所在地については、以前に吉田氏により検討されている（吉田2008）。しかし、今回の新聞記事の知見により、森田山古墳の位置は、当時の発見者の所有地をさらに拡大して再検討する必要がある。

森田山古墳の場所が、清原氏のいう「一の谷」の北側の「西舞台」であったことは間違いない。西舞台の場所については、先述した原田氏の資料紹介では「(一の谷の) 谷口の北方標高170ｍを計る通称　西の舞台と呼ばれる山腹に森田山古墳が存在した。」とある。そして、昭和９年の発見段階での周辺地番の土地所有者を確認したところ、吉田氏が森田山古墳の所在地とした904-1番地だけでなく、隣接する904-3番地及び933番地も発見者の土地であることがわかった。そのため、森田山古墳の所在地の可能性がある場所はむしろ広がってしまった。改めて、清原報告にある南から撮影された森田山古墳の写真（**写真５**）で周辺の状況を確認すると、破壊された森田山古墳の手前にも石室石材らしき大型の石材が見え、南側手前に別の古墳があった可能性がある。また、背面にはやや分かりづらいが、墳丘状の高まりが尾根上

写真５　森田山古墳とその周辺

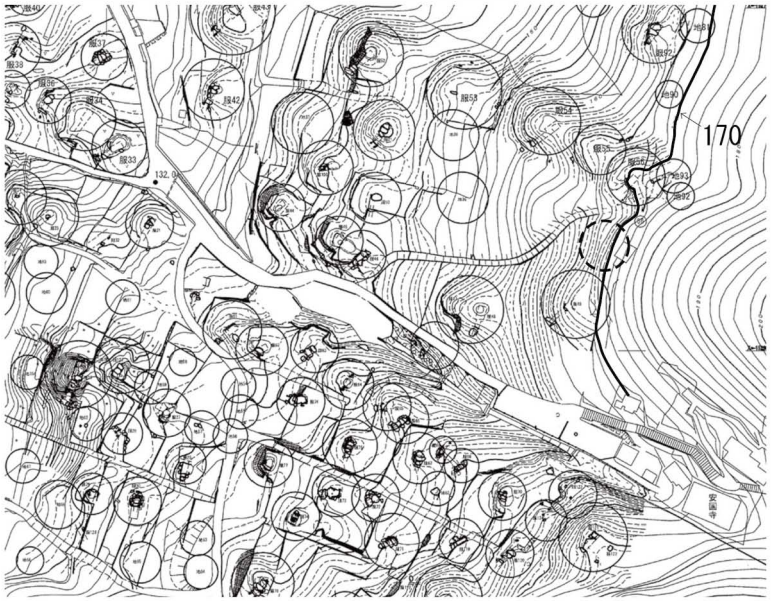


図27　森田山古墳の推定範囲（円形の破線が推定位置）

に連なっているように見える。

これらの立地条件を満たす範囲を検討するために、平成20年・21年度に市教委が実施した服部川地区の詳細分布調査で作成した詳細な地形測量図（八尾市教育委員会編2010）から推定してみることにする。手前に見える古墳を一部石材が露出している服部川49号墳（現況でも石室開口せず）とし、背面の古墳を右から服部川56号墳（玄室のみ残存）、服部川55号墳（石室開口せず）、服部川54号墳と連なる小支群と考えたい。ただし、これら服部川56～54号墳の比定は写真が不鮮明なため、検討の余地はある。そして、原田氏が述べた西舞台の場所の高さである標高170mの等高線が南北にほぼまっすぐに位置する、北側の服部川56号墳と南側の服部川49号墳にはさまれた範囲を森田山古墳の所在地と考えたい（**図27**・円形破線の位置）。直径10m前後の小規模な円墳であれば、十分その範囲におさまる。吉田氏の推定範囲からはやや西に位置するが、今回明らかになった発見者の所有地の範囲内であり、清原報告の写真とも整合すると考えられる。

森田山古墳周辺にある別の古墳からの出土の可能性も残されている。周囲の古墳を見ると、例えば現況で羨道部分が破壊され、玄室も埋もれている先述の服部川56号墳も発見者の所有地にある古墳の一つである。玄室長約4.0m、玄室幅1.95mの右片袖式の横穴式石室である（**図28左**）。また、服部川49号墳の西側に位置する服部川48号墳は２つの石室が東西に並んでいる古墳で、開口している東側の石室は、全長9.5mで玄室長約4.3m、玄室幅2.85mで服部川支群の中でも大きな両袖式の横穴式石室である（**図28右**）。しかし、これらは６世紀後半までの築造と考えられ、発掘調査が行われていない現状では、金銅装大刀を追葬した可能性を指摘するのはこれ以上困難といえる。やはり、新聞記事と現地で確認を行った清原氏による須恵器の注記のとおり、森田山古墳からの出土とするのが現段階では最も適当であろう。

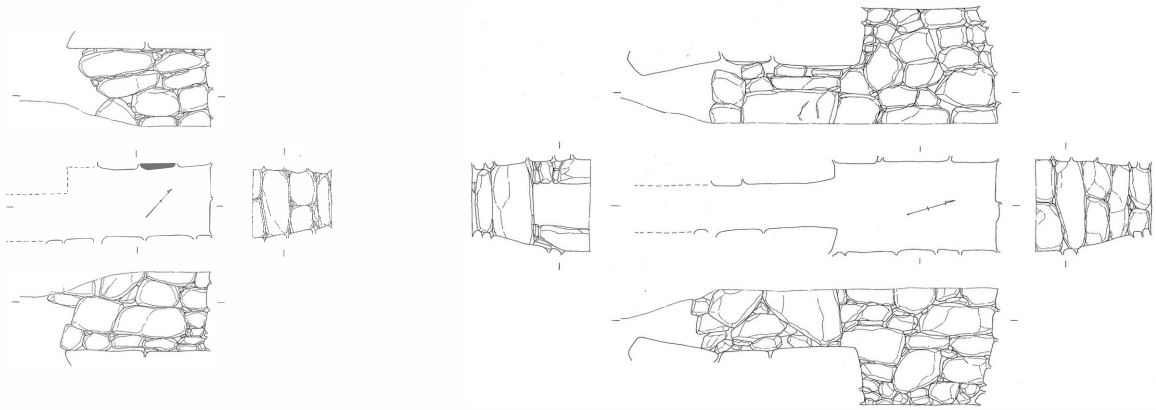


図28　服部川56号墳（左）と服部川48号墳（右）の石室

②埋葬施設の再検討　森田山古墳の埋葬施設構造については、すでに清原氏や原田氏ら（原田他1976）は小型の横穴式石室もしくは竪穴式石室の一種と指摘している。今回明らかになった知見から、高安古墳群で最も古い５世紀後半の築造と考えた森田山古墳の埋葬施設を再検討してみる。

まず、竪穴式石室であるが、類例として、広義の高安古墳群の中で周辺地域として位置づけている教興寺西地区の教興寺西1号墳（寺池１号墳）で５世紀末～６世紀前半頃の竪穴式石室が確認されている（坪田2002）。小規模な石室で長さ2.9m、幅1.0mを測るもので追葬は困難だろう。古墳時代後期の竪穴式石室の例は少なく、小規模な石室がほとんどである。金銅装大刀等が追葬されたものとすれば、追葬しにくい構造の竪穴式石室の可能性は低い。

次に、横穴式石室の可能性を探るため、高安古墳群出現期の横穴式石室を検討してみる（**図29**）。高安古墳群の横穴式石室の変遷については、高安古墳群にある大部分の石室の実測調査を行った花田氏により検討（花田2008）されている。その成果をもとに、「高安千塚」とも称される高安古墳群の集中地域で、中心支群となる大窪・山畑南支群、服部川支群、郡川支群の３つの支群の出現期の横穴式石室を、玄室

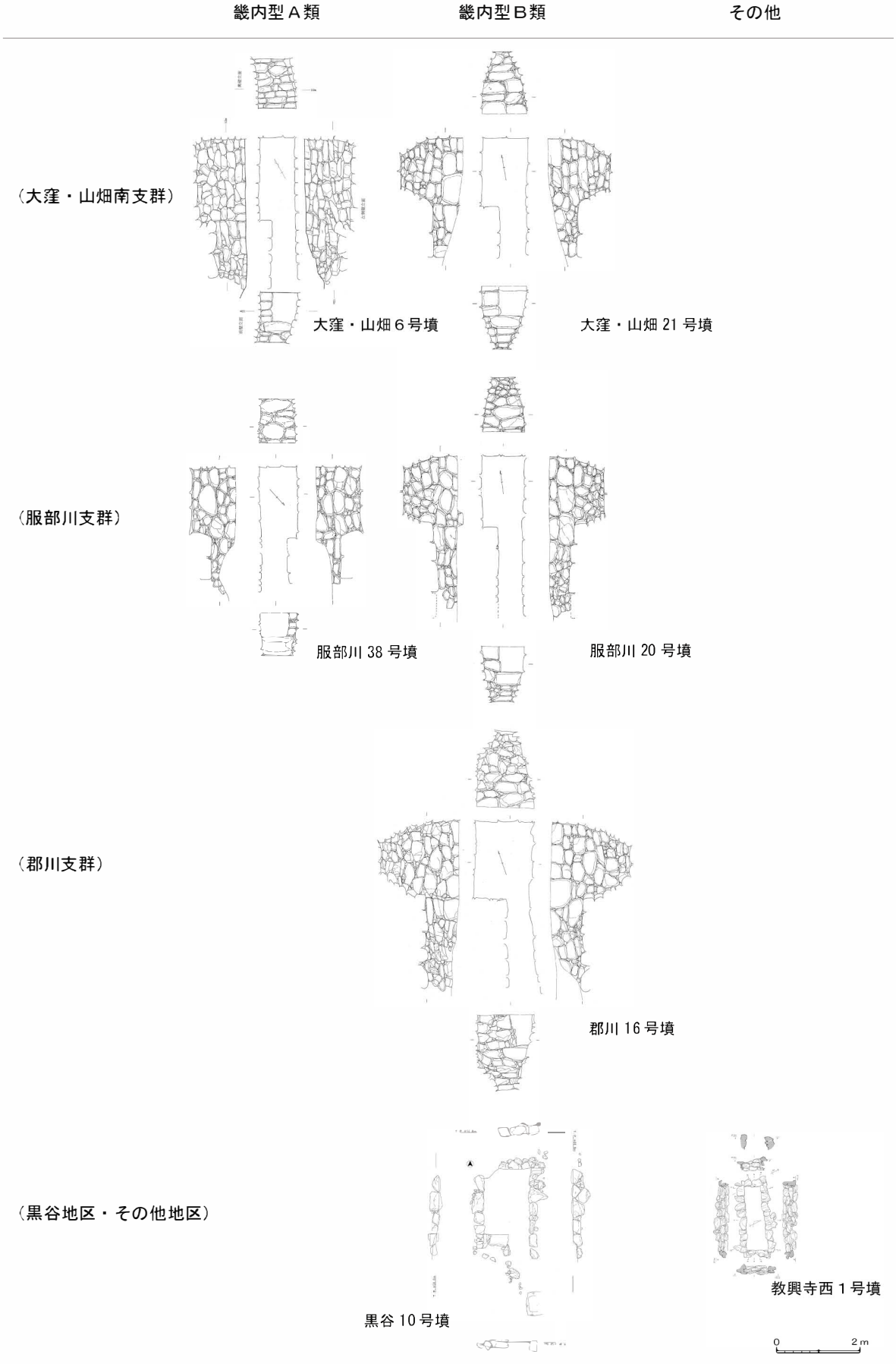


図29　高安古墳群出現期の横穴式石室

（河内の初期横穴式石室）

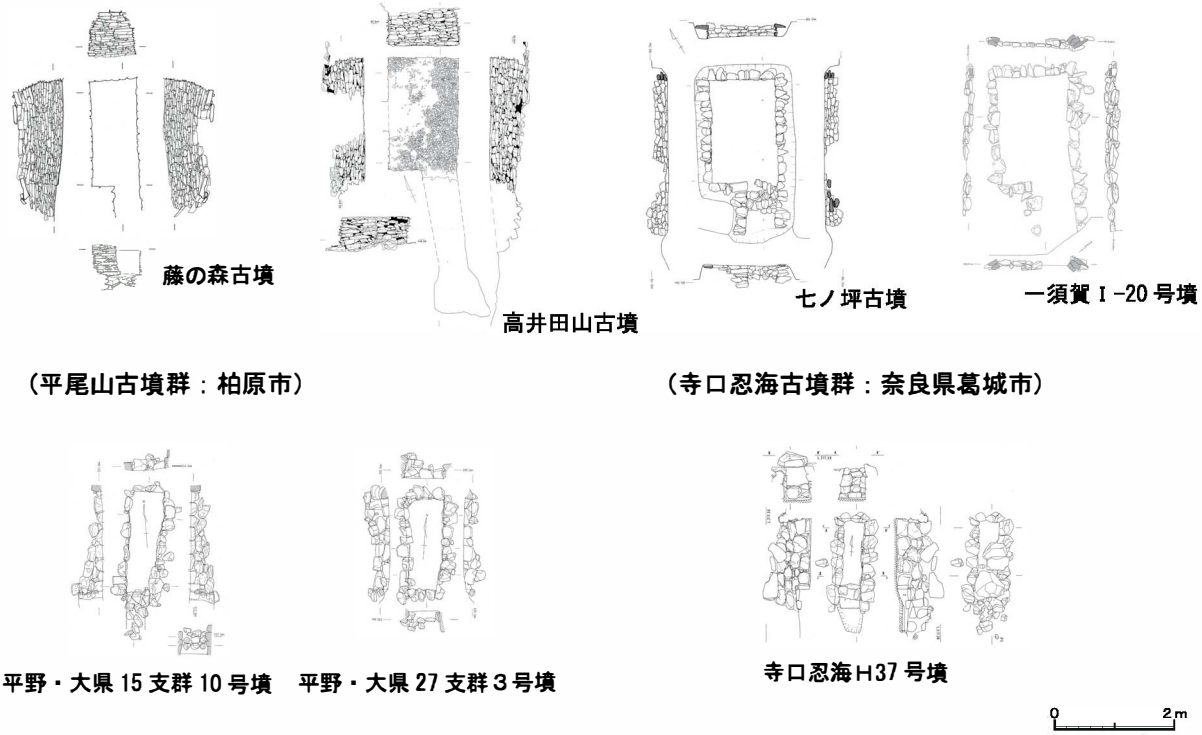


図30　河内の初期横穴式石室（上）と竪穴系横口式石室（下）

天井の形態から平天井の「畿内型A類」、穹隆状天井の「畿内型B類」と分類（森下1986）されている石室構造の違いを中心に確認してみる。

大窪・山畑南支群と服部川支群では、「畿内型A類」の大窪・山畑６号墳や服部川38号墳、「畿内型B類」の大窪・山畑21号墳や服部川20号墳で、それぞれの石室型式がある。両支群では、両方の石室型式が導入され、普及していったことがわかる。「畿内型A類」の服部川38号墳は、出現期の横穴式石室では稀有な左片袖式で、玄室比（玄室長3.5m/玄室幅1.8m）が1.94である。高安古墳群に近い前方後円墳で、この地域の首長墓である郡川東塚古墳の横穴式石室が左片袖式に復元でき（藤井2010）、玄室比が1.7（玄室長5.1m/玄室幅3m）で両者の玄室比は近く、その導入と系譜を考える上で興味深い。

一方、集中地域の南方に位置する高安古墳群出現期の横穴式石室の典型例とされる郡川支群の郡川16号墳、そして、郡川支群の南側にある黒谷地区の黒谷10号墳では、石室平面プランが正方形に近い「畿内型B類」が見られ、郡川支群の成立は他の２つの支群よりやや先行すると考えられる。しかし、これら３支群の出現期の古墳は、時期差はあるものの、６世紀に入ってからの築造である。５世紀後半の築造と考えた森田山古墳の時期と異なる。

高安古墳群の最古例の埋葬施設構造を検討するため、視点を広げて河内地域でのいわゆる初期横穴式石室を見てみる（**図30上**）。近畿地方への初期横穴式石室の導入は、５世紀後葉頃と考えられている（柳沢1993）。その中で河内地域では、九州系の系譜を持つ横穴式石室とされる藤井寺市藤の森古墳、「畿内型B類」の初現となる平面プランが正方形に近く、穹隆状ドーム天井と推定されている柏原市高井田山古墳、大阪市七ノ坪古墳、河南町一須賀Ⅰ-20号墳などがある。これら初期横穴式石室は、扁平な板状もしくは長方形の小型石材を石室石材に使用している。森田山古墳の破壊された石室の写真（**写真５**）では、下部にやや大型の方形の石材があり、積まれた上部にそれより小ぶりの石材が見えることから、初期横穴式石室に使用された石材とは異なっていることがわかる。

以上のように、高安古墳群出現期の横穴式石室の様相から、森田山古墳の埋葬施設構造を考えてみる

と、正方形プランや穹窿状天井の特徴を持つ高安古墳群出現期の郡川16号墳のような「畿内型B類」の横穴式石室の可能性がある。しかし、時期的には扁平な小型石材を使用した初期横穴式石室の導入期と考えられ、そこまでさかのぼる石室構造か検討が必要である。そのため、横穴式石室の導入以前の埋葬施設構造として、一見すると竪穴式石室と類似しており、朝鮮半島南部での研究（亀田1981）も進んでいる「竪穴系横口式石室」を検討してみる。

竪穴系横口式石室は、国内への横穴式石室導入期にみられた竪穴系の埋葬施設の一種として、北部九州に多く見られる（蒲原1983）。蒲原氏の定義によると、竪穴式石室を短小口面の横方向から入れるようにしたもので、石室高は1.4m以下と低く、玄室幅も1.4m以下と長細い形状であるが、追葬は可能である。近畿地方では、奈良県の葛城山東麓に多く見られ、葛城市寺口忍海古墳群でＴＫ47型式の竪穴系横口式石室（千賀1988）がある。高安古墳群に近い柏原市平尾山古墳群では、古墳群の形成期の古墳に見られ、平野・大県第15支群10号墳はＭＴ15型式の竪穴系横口式石室（安村1996）がある（**図30下**）。

近畿地方への竪穴系横口式石室の導入は、北部九州の影響も指摘されている（森下1987）が、北部九州を経由しない、朝鮮半島南部の伽耶からの直接的な影響も考えられる（坂1991）。寺口忍海古墳群や平尾山古墳群平野・大県支群は、ともに鍛冶系集団の墓が含まれており、鉄鍛冶技術を導入した伽耶を出自とする渡来系集団が、竪穴系横口式石室を採用した可能性は十分考えられる。高安古墳群の造墓集団の一つとして、高安古墳群に隣接し、５世紀中頃に出現した郡川遺跡の鉄鍛冶集落の渡来系工人が指摘されている（花田2008）。同様に彼ら集団の埋葬施設も、その出自を示すような竪穴系横口式石室だった可能性がある。

これまで述べてきたように、森田山古墳への金銅装大刀等の追葬を前提とするならば、森田山古墳の埋葬施設構造は、清原氏が考えたような竪穴式石室の可能性は少ない。そして時期的には、初期横穴式石室の導入期であるが、やや大型の使用石材からその採用の可能性も低い。以上のことから、森田山古墳の埋葬施設は、竪穴式石室や横穴式石室ではなく、鉄鍛冶技術を導入した伽耶系の埋葬施設とも考えられる竪穴系横口式石室であった可能性が考えられる。ただし、竪穴系横口石室を採用した古墳は、寺口忍海古墳群や平尾山古墳群、そして森田山古墳も、立地条件のよいところに造られた古墳とはいえず、採用した被葬者の階層性が高い埋葬施設ではなかったことは、留意すべきである。

森田山古墳はすでにないが、おそらく単発的な竪穴系横口式石室の導入だったであろう。今後周辺で竪穴系横口式石室が確認されれば、高安古墳群の造墓開始期の集団の性格や出自を考える上で重要な知見となる。造墓集団に渡来系集団が指摘される高安古墳群において、新たな証左のひとつとなろう。

５．まとめ　ー高安古墳群における金銅装圭頭大刀副葬の意義ー

装飾付大刀副葬の意義　圭頭大刀は、関東地方を中心とする東日本に多く分布し、近畿地方では出土例が少ない装飾付大刀である（菊地2010）。装飾付大刀は、その象徴性から保有した人物や集団の社会的な地位や階層性を示すもの（滝瀬1986・高島1996）であったと考えられている。さらに新納氏は、装飾付大刀を基本とする古墳の副葬品の組み合わせから古墳の階層性を読み取り、金銅装大刀の保持をその組織（群集墳）での頂点の人物と考えた（新納1983）。同様に考えると、高安古墳群の造墓集団の頂点とも言うべき金銅装圭頭大刀の保有は、渡来系集団から有力氏族への成長を象徴する副葬品といえ、入手の経緯から考えると、ヤマト政権との強い関係を示すものである。

金銅装圭頭大刀副葬の意義　高安古墳群に葬られた金銅装圭頭大刀を保有していた人物は、おそらく氏族を代表する武人的な性格を有した人物と考えられる。この人物が、時期を大きく隔てた森田山古墳に追葬された理由を考えてみたい。

７世紀初頭～前葉の時期は、高安古墳群において古墳築造が下火になった時期とはいえ、服部川支群内の古墳で追葬が見られる時期である。おそらく金銅装圭頭大刀の保有から考えても、古墳築造の力は持っていたはずである。しかし、あえて古墳を造ることはなかった。高安古墳群で古墳が最も集中する服部川支群の数ある古墳で、最深部に位置し、小規模でも一族の初現ともいうべき古墳にこだわったの

である。つまり、服部川支群形成に関与した人物の墓に追葬されることによって、有力氏族としての出自を示すことこそが重要であったと考える。

高安古墳群の装飾付大刀　発掘事例の少ない高安古墳群の集中地域の３支群（高安千塚）では、装飾付大刀はおろか刀剣類などその他の武器の出土はほとんど知られていない。副葬品から造墓集団の性格を知ることは現状では難しい。金銅装大刀を保有した人物の優位性は先述したとおりであるが、高安古墳群での造墓終焉時期にあたる７世紀初頭～前葉の時期での金銅装大刀の存在は稀有な例といえる。

一方、高安古墳群の北部で行われた発掘調査で、６世紀後半代の装飾付大刀の副葬古墳が多く知られている。神立地区の芝塚古墳（神立７号墳）の亀甲花文銀象嵌円頭大刀、楽音寺地区の大石古墳（楽音寺７号墳）の種類は不明ながら鐔に象嵌がある大刀、そして、独立墳の性格が強い愛宕塚古墳の龍文銀象嵌鞘金具付の捩り環頭大刀がある（**図31**）。これらは、有力古墳に副葬された装飾付大刀であることがわかる。また鉄鏃などの武器や馬具なども合わせて副葬されている。これらの古墳は、高安古墳群の集中地域のように支群を形成するのではなく、有力者の古墳が選択的に造られた古墳群といえる。おそらく高安古墳群の北部に分布する古墳は、集中地域とは性格が異なる在地系の有力氏族の墓域であったと考えられる。

今後の課題　高安古墳群の集中地域では、装飾付大刀の出土が金銅装圭頭大刀の一例だけであったが、造墓集団の有力氏族への成長を示すものととらえた。また、装飾付大刀の類例が知られる高安古墳群の北部の墓域については、集中地域と性格が異なる造墓集団であることを指摘するにとどまった。今後、集中地域や周辺地域を含む広義の高安古墳群だけでなく、生駒山地山麓部に多数分布している群集墳も合わせて、装飾付大刀を含む武器副葬の実態とその造墓集団の性格について再検討したい。

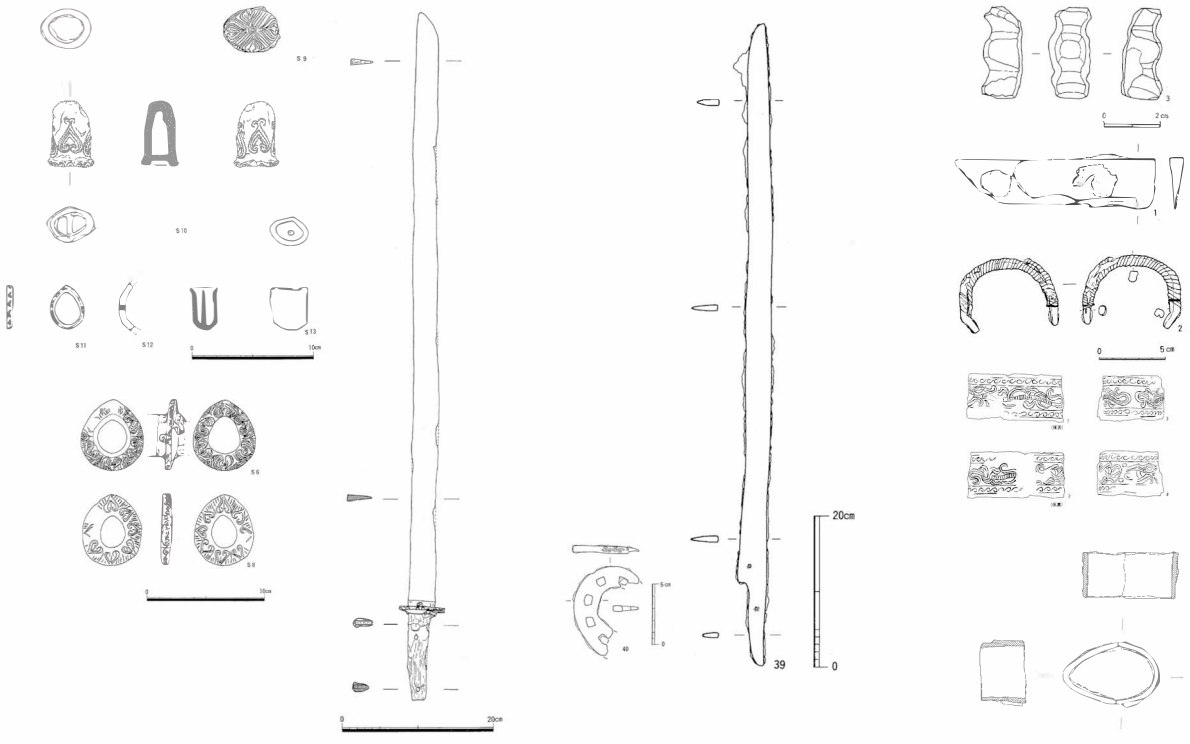


図31　高安古墳群周辺地域出土の装飾付大刀

[参考文献]

亀田修一　1981「朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室」『城二号墳』宇土市教育委員会

蒲原宏行　1983「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視覚』雄山閣出版(株)

菊地芳朗　2010「第３章　装飾付大刀の系譜とその展開」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
清原得巌　1976「高安の遺跡と私」『大阪文化誌』通巻第6号・(財)大阪文化財センター
高島　徹　1996「装飾付大刀を出土した古墳」『金の大刀と銀の大刀　－古墳･飛鳥の貴人と階層－』大阪府立近つ飛鳥博物館図録9
滝瀬芳之　1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』NO.266・ニューサイエンス社
千賀　久　1988「第４章　寺口忍海古墳群の位置づけ」『寺口忍海古墳群』新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編
坪田真一　2002『教興寺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告72
新納　泉　1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30-3・考古学研究会
花田勝広　2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13・八尾市教育委員会
原田修・久貝　健・島田和子　1976「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』通巻第6号・(財)大阪文化財センター
坂　靖　1991「奈良県内の竪穴系横口式石室」『寺口千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62冊
藤井淳弘　2010「８．郡川東塚古墳の鉄製品　３）郡川東塚古墳の再検討」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告61
森下浩行　1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜　－畿内型と九州型－」『古代学研究111号』
　　1987「横穴式石室伝播の一様相　－北九州型Ｂ類－」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要　1987年』
八尾市教育委員会編　2010『高安古墳群　調査報告書　－出土遺物整理調査・服部川支群西側地区測量調査－』
八尾市史編纂委員会編　1958『八尾市史』(旧版)
安村俊史　1996「1.横穴式石室について」『高井田山古墳』柏原市教育委員会
柳沢一男　1993「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第45号・雄山閣出版
吉田野乃　2008「(付記)高安古墳群　森田山古墳と天神山古墳の所在地」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13・八尾市教育委員会

［図28　図版出典］

花田勝広　2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市文化財紀要13・八尾市教育委員会
八尾市教育委員会　2008『高安古墳群　分布・測量調査報告書　－郡川地区詳細分布調査・市史跡大窪・山畑7号・8号墳測量等調査他－』
　　2009『高安古墳群　調査報告書　－出土遺物整理調査・服部川支群東側地区測量調査－』
坪田真一　2002『教興寺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告72

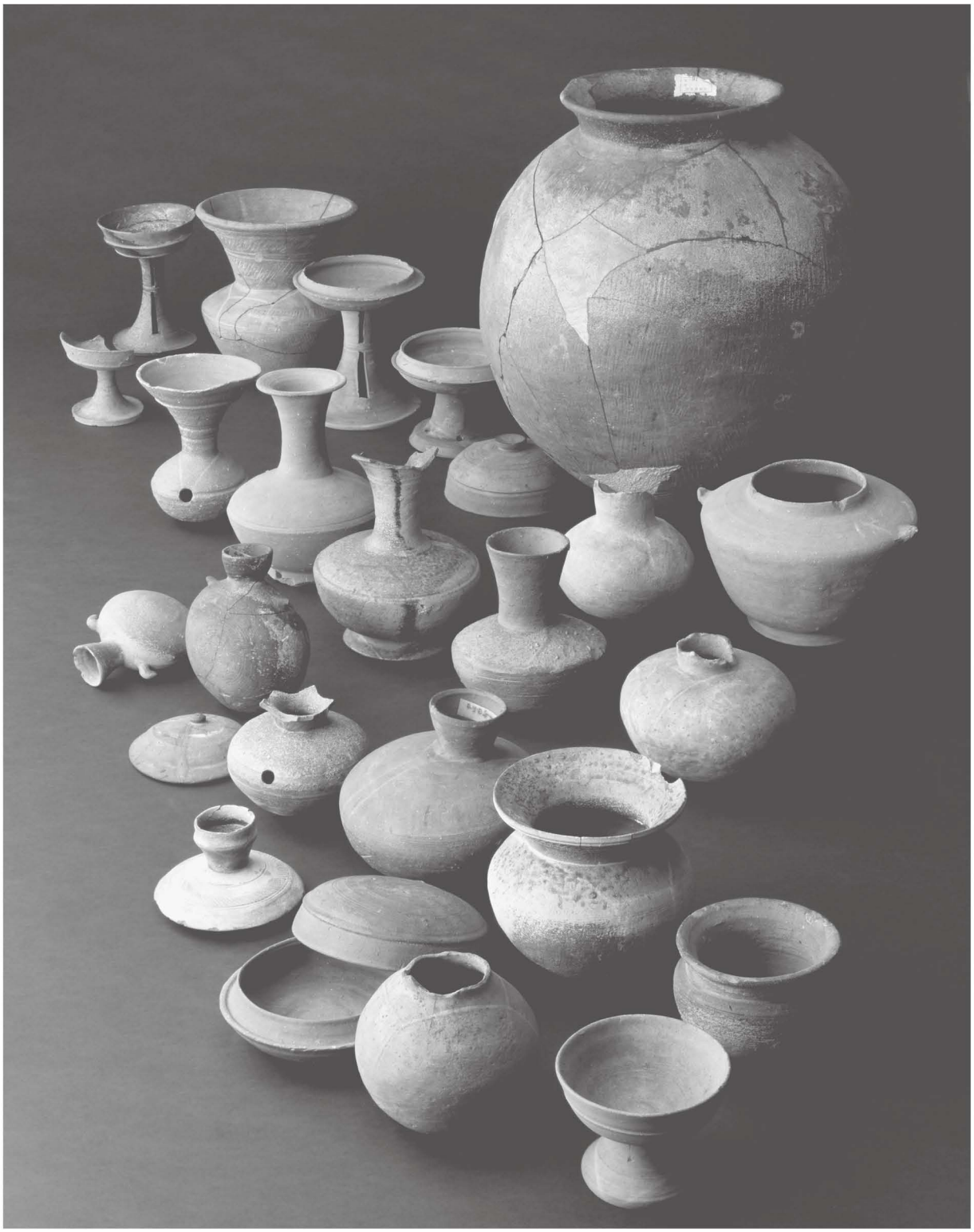
［図29　図版出典］

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会　1987『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
大阪府教育委員会　1993『はざみ山遺跡発掘調査概要－藤の森古墳の調査－』
　　1993『一須賀古墳群Ｉ支群発掘調査概要』
柏原市教育委員会　1992『平尾山古墳群　平野・大県支群　－ミニゴルフ場建設に伴う－　1991年度』
　　1996『高井田山古墳』
新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編　1988『寺口忍海古墳群』

［図30　図版出典］

高萩千秋　1993『高安古墳群　芝塚古墳』(財)八尾市文化財調査研究会報告38
坪田真一　1995『高安古墳群　大石古墳』(財)八尾市文化財調査研究会報告44
小林義孝・有井宏子　1996「河内愛宕塚古墳出土の飾り大刀　－龍文銀象嵌鞘金具付捩り環頭大刀－」『研究紀要　第７号』八尾市立歴史民俗資料館
八尾市立歴史民俗資料館編　1994『河内愛宕塚古墳の研究』

写　真　図　版



1

2

3

4

5

6

7

8

10

9

11

14

17

12

13

15

16

18

23

20

21

22

24

25

26

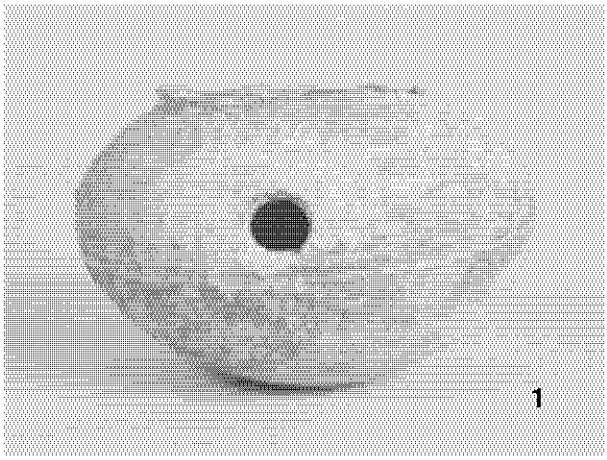
19

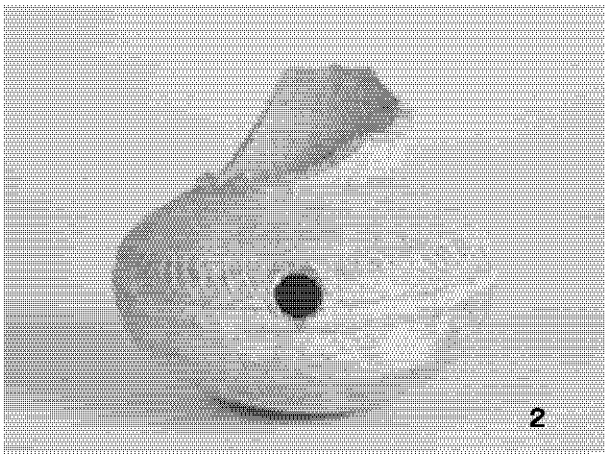
27

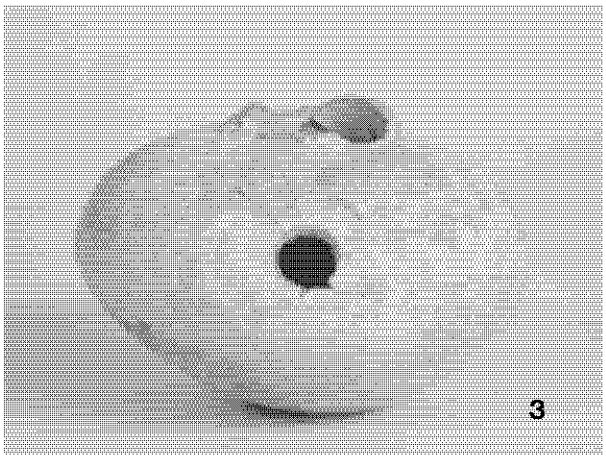
1

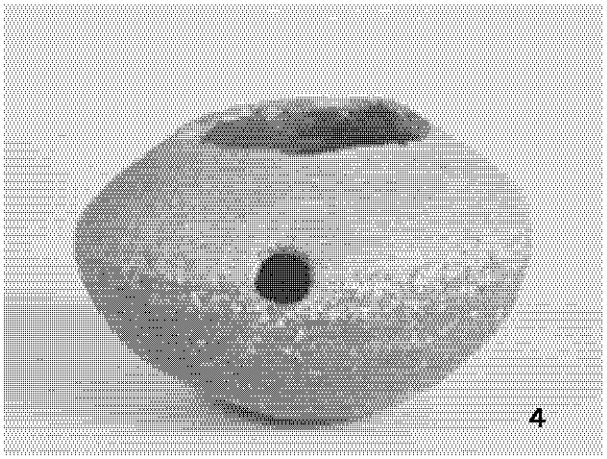
2

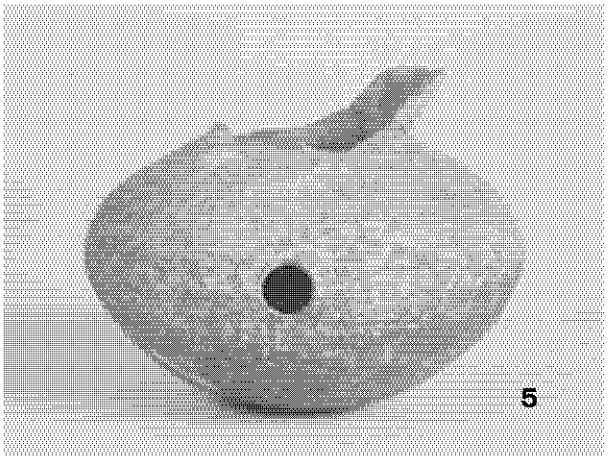
3


1


2


3


4


5

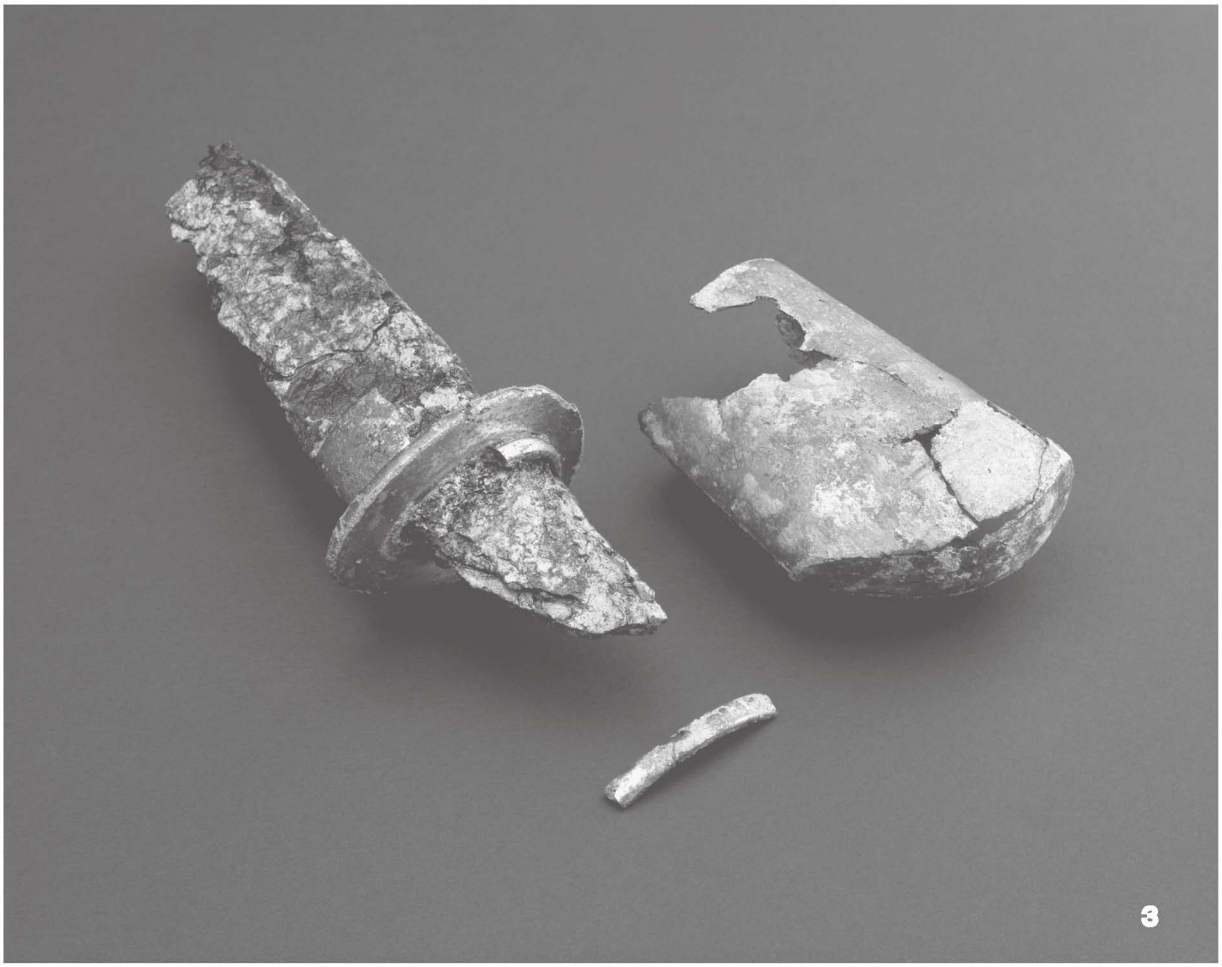
6

7

8

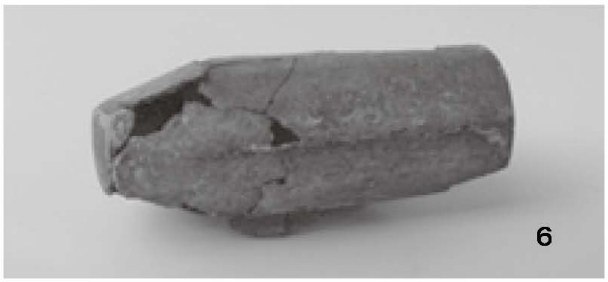
1

2


3

4

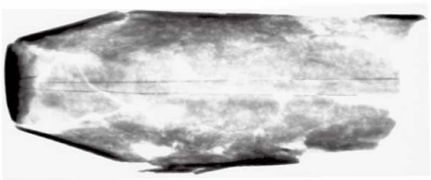
5

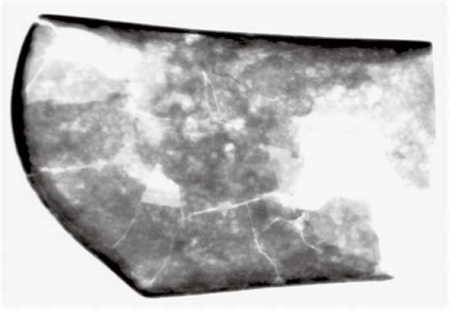

6

7

8

9





10

11

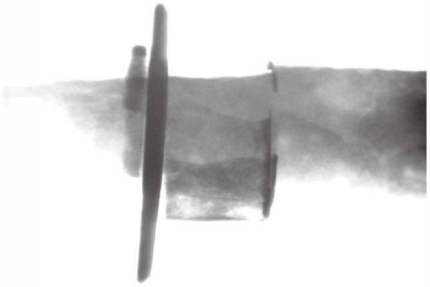
12

13

14

15

16



17

18

19

20

21

22

報告書抄録	
ふりがな	たかやすこふんぐんちょうさほうこくしょ　へいせい22ねんど　しゅっどいぶつせいりちょうさ
書名	高安古墳群調査報告書　－平成22年度　出土遺物整理調査－
副書名	平成22年度国庫補助事業
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	66
編著者名	藤井淳弘/吉田野乃/樋口めぐみ/眞鍋貴匡/志田真吾
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003　大阪府八尾市本町一丁目１番１号　TEL072-924-8555
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
高安古墳群（たかやすこふんぐん）	八尾市（やおし）	27212	12	34 37 9	135 38 41	2010/04/01～2011/03/31		遺物整理
森田山古墳（もりたやまこふん）	八尾市服部川（やおしはっとりがわ）	27212	12	34 37 22	135 39 01	2010/04/01～2011/03/31		遺物整理
高安古墳群服部川支群西舞台（たかやすこふんぐんはっとりがわしぐんにしぶたい）	八尾市服部川（やおしはっとりがわ）	27212	12	34 37 22	135 39 01	2010/04/01～2011/03/31		遺物整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高安古墳群（たかやすこふんぐん）	古墳	古墳時代		須恵器・土師器	
森田山古墳（もりたやまこふん）	古墳	古墳時代		須恵器	
高安古墳群服部川支群西舞台（たかやすこふんぐんはっとりがわしぐんにしぶたい）	古墳	古墳時代		金銅装大刀・耳環	

八尾市文化財調査報告 66
平成 22 年度国庫補助事業

高安古墳群調査報告書

－平成 22 年度　出土遺物整理調査－

発　行　日　平成 23年（2011）３月 31 日
編集・発行　八尾市教育委員会
〒581-0003　八尾市本町一丁目一番一号
ＴＥＬ(072)924－8555(直通)

《八尾市刊行物番号　H22－153》